元総社明神遺跡Ⅴ

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋は名山赤城山を背に、坂東太郎で名高い利根川や萩原朔太郎をはじめ多くの詩人によってうたわれる広瀬川が市街地を貫流し、四季折々の風情にあふれる詩情豊かな県都です。

前橋市域の赤城山南麓と前橋台地上には縄文時代から近世、近代にかけての人々の生活の痕跡を示す遺跡、遺物が数多く存在しています。特に古墳においては市域に800余基の存在が伝えられております。その中には、東国の古墳を代表する前橋天神山古墳をはじめ、八幡山古墳、大室三二子古墳、天川・総社二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳等の国指定史跡があります。また山王廃寺、上野国分寺、国分尼寺、推定上野国府の重要遺跡が元総社明神遺跡の至近距離の総社、元総社に集中的に存在している。

このように、前橋の地は古代において政治、宗教、文化、経済の中心地として栄え、東国の奈良ともいわれている。また、中世においては戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏等がしのぎを削った地であり、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三大名城の一つ厩橋（前橋）城があります。

元総社明神遺跡は、西部第三元総社明神地区の区画整理事業に伴う発掘調査であります。本地区は、推定上野国府域及びその周辺に位置し、蒼海城の東辺にあたる地区である。近くに総社神社が鎮座しています。

調査の結果、数多くの住居跡・溝・土坑等々が発見されており国府成立期から衰退期までの各種の遺物、遺構が発掘され多大な成果を上げることができました。

本報告書を刊行するにあたり都市計画部区画整理第一課をはじめ多くの方々から物心両面での協力をいただき厚く感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため少しでも寄与できれば幸に存じます。

昭和62年３月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　関口和男

例　　言

1．本書は、前橋市都市計画事業元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡の略称は、61A15とする。

3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要項は、次の通りである。

調査場所　前橋市元総社町地内

調査期間　昭和61年5月1日～11月13日

整理期間　昭和61年11月14日～62年3月25日

調査担当者　原田和博　加部二生

5．本書の編集は、担当者の討議により分担編集し、執筆は主に遺構担当者が行なった。遺物整理、図面整理、図面作成、遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担して行なった。

6．調査ならびに本報告書作成にかかわった方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。

発掘作業員

飯田五郎　石田洋子　大島正幸　岸　フクエ　小林延寿　駒形とし子
酒井　寛　佐藤忠重　白井和子　住谷文彦　千明香根子　渡木秋子
福島裕子　藤田光夫　松本加代子　宮原麻吉　湯浅たま江　湯浅道子

整理作業員

相田昌子　石堂千秋　岸　フクエ　駒形とし子　白井和子　高島　康
竹内敏江　塚越則子　渡木秋子　渡木昌範　中沢不二　福島裕子
槙塚昌子　松本加代子　湯浅たま江　湯浅道子

7．本書作成にあたり次の方々に御教示を賜った。

石塚久則　大江正行　女屋和志雄　坂口　一　佐藤明人　関根慎二
橋本博文　前沢和之　宮崎重雄　横倉興一　若狭　徹　綿貫綾子
綿貫邦男

8．執筆分担は以下の通りである。

原田和博　I、III、IV、V－1・3・4・6、VI（住居址）

加部二生　II、V－2・5・7、VI（溝）

凡　　例

1．遺構の略称は、次の通りである。

土師器使用竪穴住居址 → H、土坑 → D、溝状遺構 → W、落ち込み → O

2．挿図図版の縮尺は、次を基本としている。

1)　遺構

住居址 → 1/80　カマド → 1/40　土坑 → 1/80　溝 → 1/80　遺構全体図 → 1/200

2)　遺物

土師器・須恵器・鉄器 → 1/4　大型須恵器甕・瓦 → 1/6　玉類 → 1/1

3．遺構挿図中に記した断面基準線は標高で表した。

4．遺構挿図中に示したN方位は、座標北である。

5．遺構及び遺物挿図中の記号は次の通りである。

遺構

焼土範囲　炭化物　地山　白色粘土

遺物断面

酸化焔焼成　還元焔焼成　灰釉陶器　緑釉陶器

遺物表面（内外面）

炭化物
油焔
二次焼成
黒班を含む

赤色塗彩　黒色処理　施釉部分　硯研磨面

目　　次

序
例　　言
凡　　例
I　発掘調査に至る経過 …… 1
II　遺跡の位置と環境 …… 1
III　発掘調査の経過 …… 3
IV　基　本　層　序 …… 4
V　遺構と遺物 …… 5
1.　P トレンチ …… 5
2.　9 トレンチ …… 12
3.　6・Qトレンチ …… 47
4.　C トレンチ …… 54
5.　N トレンチ …… 72
6.　O トレンチ …… 79
7.　その他の遺物 …… 80
VI　ま　と　め …… 83

I　発掘調査に至る経過

前橋市教育委員会では、前橋市都市計画事業西部第三明神地区土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査を昭和57年以来元総社明神遺跡Ｉをはじめとして実施してきた。本年度の発掘調査も元総社（西部第三明神）地区区画整理事業に伴う発掘調査を昭和60年12月３日に区画整理課から依頼があった。昭和61年４月10日、区画整理課と教育委員会との間で協議がなされ、同年４月22日委託契約が締結され、５月より発掘調査のはこびとなった。

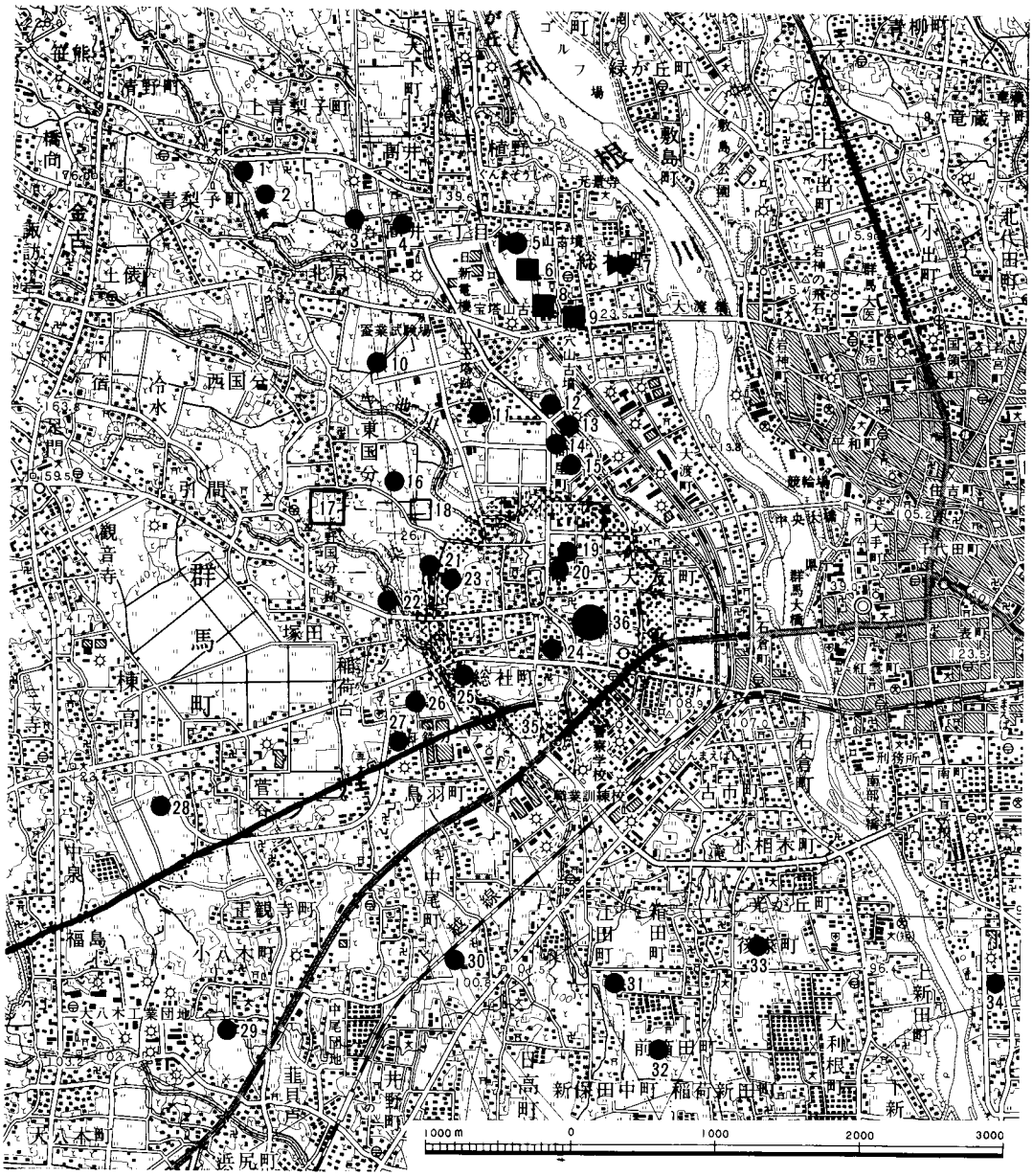
調査区域は道路予定地2,944㎡の約35％に当たる1,019㎡を調査することになり、昭和61年５月１日より開始した。

II　遺跡の位置と環境

元総社明神遺跡の所在する前橋市元総社町は、群馬県中央部に聳える榛名山の東南麓で、火山斜面が平坦面に移行する前橋台地上にある。利根川の西岸に当り、前橋市街地とは川を狭んで対峙する位置である。榛名山麓に集まる流水は幾多の小河川となって多くの開析谷を形成しながら南流するのを常とする。牛池・染谷の両河川もこうした複雑な微地形を造形しつつ前橋台地を貫流している。上野国府はこうした水利と官道に面した好適地であり、南方に広がる一大生産基盤を背景にもつ地方豪族の暗躍により当地に占地されたものと思われる。

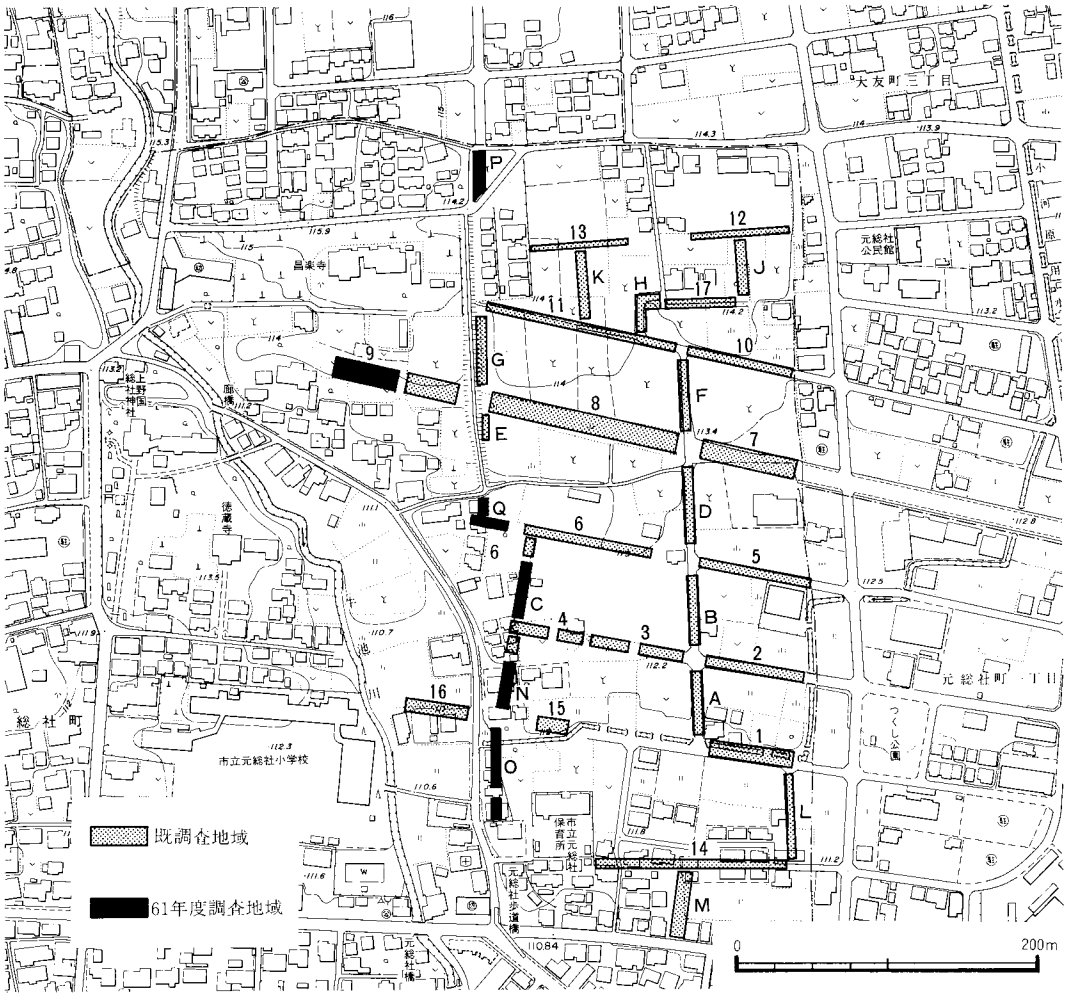
前橋台地における人類の足跡は縄文時代前期まで遡ることができる。関越道の国分寺中間地域や、下東西遺跡では諸磯期の遺構が調査されている。中期になると分布は拡大し、中間地域遺跡では20軒に及ぶ住居址が調査されている。後晩期の遺構は本遺跡中にも確認され、土器片を多数出土している他、産業道路東遺跡・同西遺跡・鳥羽遺跡等で住居址が調査されている。

弥生時代の良好な遺跡は発見されていないが、樽式土器を出土した総社町桜ケ丘遺跡・鳥羽遺跡・赤井戸式土器を出土する国分寺中間地域遺跡・下東西遺跡等が知られ、国分寺では方形周溝墓が２基調査されている。桜ケ丘遺跡ではＣＰ純層下から樽式土器が出土している。これに対し元小校庭遺跡からはＣＰで埋没した古式土師器のセットを検出しており、両者間にさほどの時間差がないことが明らかになった。なお本遺跡からもＣＰ以降の石田川式土器は多数出土しており住居址も検出されている。当該地域における古墳の出現は５世紀中葉と見られる。東博所蔵の多量の石製模造品を出土した小円墳や円筒埴輪の外面に二次調整横ハケを持つ大小路山古墳等が助産期の古墳であろうと推察される。５世紀終末には本遺跡から西方５kmの地点に豪族居館として有名な三ツ寺遺跡等の拠点も築かれ、保渡田古墳群との関連性が考えられている。こうした古墳文化圏にありながら元総社地区は空白地帯で、昭和10年の調査でも弥勒山古墳の１基のみであった。こうした現象は、国府に関連した都城ともいうべき街づくりが行なわれた際に破壊されたものと推定されている。律令以降の遺跡の分布は改めて述べるまでもなく元総社町全域に及んでいる。中近世には蒼海城が置かれ現在の街並みの祖型が形成されたと考えられる。



1 清里南部遺跡群
2 中島遺跡
3 下東西遺跡
4 柿木遺跡
5 総社二子山古墳
6 愛宕山古墳
7 遠見山古墳
8 宝塔山古墳
9 蛇穴山古墳
10 北原B遺跡
11 山王廃寺遺跡
12 昌楽寺廻村東遺跡
13 産業道路東遺跡
14 産業道路西遺跡
15 稲荷塚北遺跡
16 国分境遺跡
17 国分僧寺跡
18 国分尼寺跡
19 閑泉樋遺跡
20 閑泉樋南遺跡
21 小見遺跡
22 国分寺中間遺跡
23 草作遺跡
24 元総社小学校校庭遺跡
25 染谷川遺跡
26 弥勒山古墳
27 鳥羽遺跡
28 菅谷古墳群
29 小八木遺跡
30 日高遺跡
31 箱田境遺跡
32 前箱田遺跡
33 五反田遺跡
34 中大門遺跡
35 推定上野国府域
36 元総社明神遺跡

第1図　元総社明神遺跡と周辺遺跡（1/50,000）

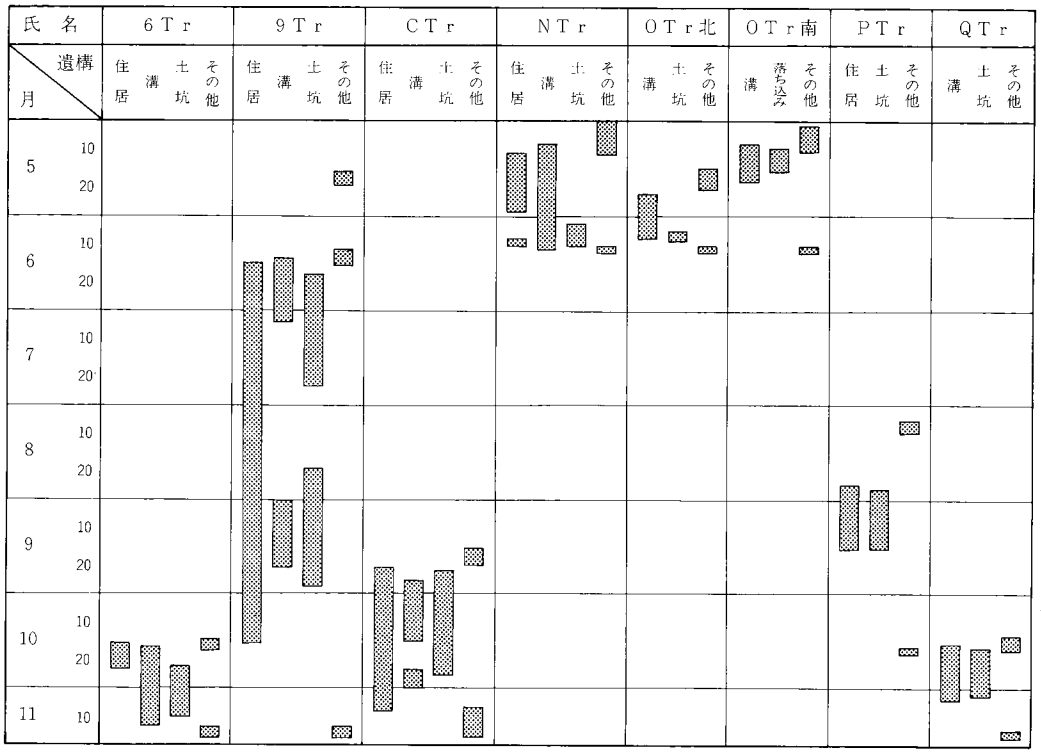


第２図　トレンチ設定図（1/5,000）

III　発掘調査の経過

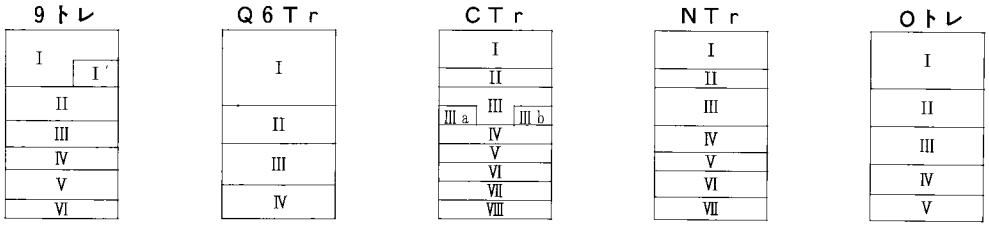
発掘調査は、昭和61年５月１日に着手され、同年11月13日まで実施された。調査対象地区は、区画道路予定地内の幅の狭いトレンチに限られた。また、予定地内の住宅移転が遅れ当初の計画を大幅に変更せざるをえなくなった。そこで急遽調査することになった９トレンチから住居址29軒が検出され、調査期間の大半を費すことになり調査全般に大きな影響を及ぼすことになった。調査の進行は９トレンチ、Ｃトレンチにおける住居群の著しい重複やＮトレンチの溝における夥しい出土遺物、全トレンチにおけるプラン確認の難行によって作業が計画通りに進まなかった。調査終了後、11月中旬から昭和62年３月まで整理作業が行なわれた。

トレンチは57年度からの連番で、東西トレンチに算用数字、南北トレンチをアルファベットで呼称した。



第３図　発掘調査経過表

Ⅳ　基　本　層　序



第４図　基本層序

9トレンチ

Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土。柔かい細砂。
Ⅰ′層　黒褐色土層　旧耕作土。
Ⅱ層　黒褐色土層　B軽石層
Ⅲ層　暗褐色土層　ＦＰ・ＢＰ３％含む。
Ⅳ層　黒褐色土層　ＦＰ２％含む細砂。
Ⅴ層　暗褐色土層　ＣＰ３％含む細砂。
Ⅵ層　褐色土層　しまったローム漸移層。

Ｑ６トレンチ

Ⅰ層　暗褐色土層　パミス５％含む細砂。
Ⅱ層　暗褐色土層　ＢＰ60％含む細砂。
Ⅲ層　暗褐色土層　ＢＰ５％含む細砂。
Ⅳ層　黒褐色土層　ＣＰ３％含む細砂。

Ｃトレンチ

Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土。
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土。
Ⅲ層　黒褐色土層　ＢＰ10％含む細砂。
$Ⅲ_a$層　灰褐色土層　ＢＰ・ash純層。
$Ⅲ_b$層　灰色土層　ＢＰ純層。
Ⅳ層　暗褐色土層　ＣＰ５％含む細砂。
Ⅴ層　黒褐色土層　ＣＰ７％含む細砂。
Ⅵ層　黒褐色土層　ＣＰ２％含む細砂。
Ⅶ層　褐色土層　ソフトローム。
Ⅷ層　黄褐色土層　ハードローム。

Ｎトレンチ

Ⅰ層　黒褐色土層　ＡＰ３％含む細砂。
Ⅱ層　暗オリーブ褐色土層　ＡＰ５％含む細砂。
Ⅲ層　オリーブ黒色土層　ＡＰ３％含む。
Ⅳ層　暗褐色土層　ＡＰ１％含む細砂。
Ⅴ層　暗褐色土層　ＦＰ１％含む細砂。
Ⅶ層　褐灰色土層　焼土含むシルト。
Ⅶ層　黄褐色土層　砂質ローム。

Ｏトレンチ

Ⅰ層　オリーブ黒色土層　のろ状細砂。
Ⅱ層　褐色土層　パミス１％含む細砂。
Ⅲ層　褐色土層　硬質シルト。
Ⅳ層　紫灰色土層　シルト。
Ⅵ層　オリーブ褐色土層　硬質シルト。

V　遺構と遺物

1　Pトレンチ

Pトレンチは本年度調査地の最北端に位置する。西に隣接して八日市場城の溝跡が残る微高地であるが、北、東とも市街化されて旧地形を留めない。

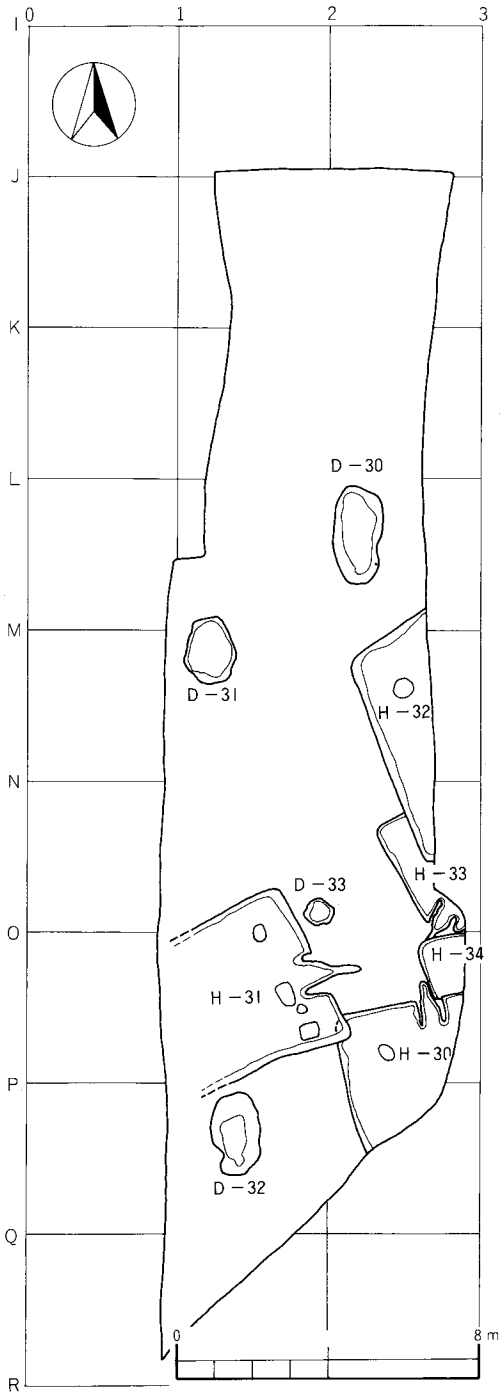
本トレンチは、住居址5軒と土坑4基を確認した。遺構はローム層を掘り込んで作られているが、床面から地表まで浅い所で20cm前後で、耕作による攪乱が各所で見られる。

住居址5軒のうち3軒にカマドが確認され、東カマド、北カマド、南西カマドと方向に統一性は見られなかった。住居形態はすべて方形で切り合い関係があった。

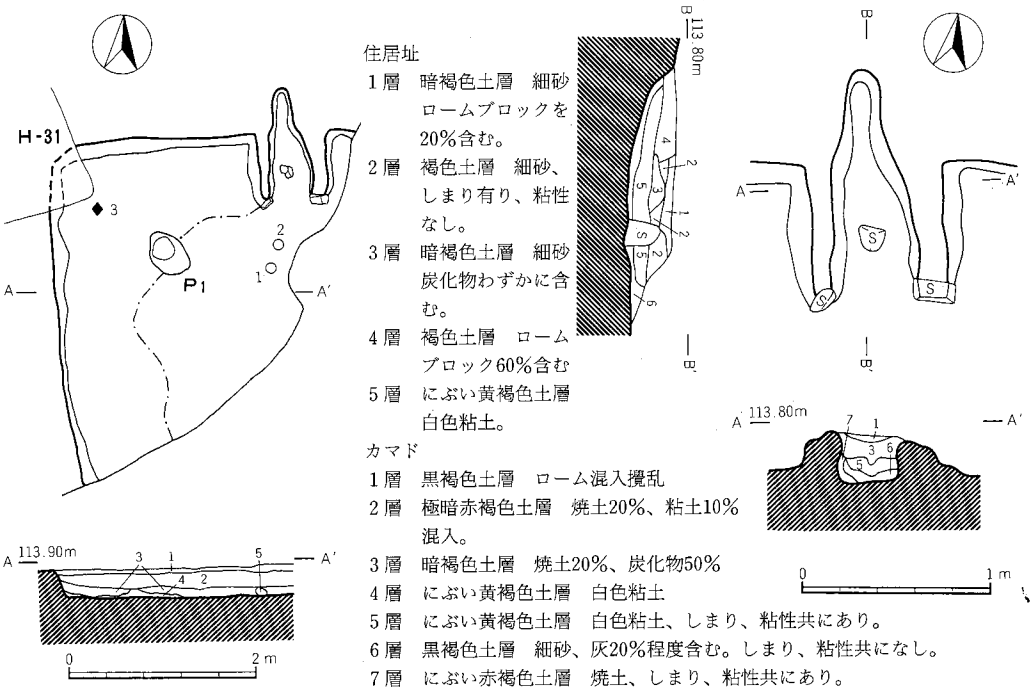
各住居址とも、出土遺物等から6世紀前半、ないしは、6世紀中葉の住居址である。

H—30号住居址

遺構　本住居址は、発掘区域の南東、O・P—2グリッドに位置する。ほぼ正方形と考えられるが、東壁と南壁は生活道路のため確認できなかった。カマドは北壁のほぼ中央に設置される。主軸方位はN—9°—Wを指す。北西コーナーはH—31に切られており、北壁カマド近くではH—34と重複しており、本住居址は同住居址の南・西壁を切って構築されていた。覆土は細かく見れば5層に分けられるが、概ねロームブロックと軽石を斑に含む柔らかい細砂である。確認面からの壁高は平均30cmであった。壁はローム壁で平均の立ち上がり角度は70°である。周溝は確認できなかった。床面はロームブロックを含む褐色土で10cm程度貼床され、平坦



第5図　Pトレンチ全体図（1/200）

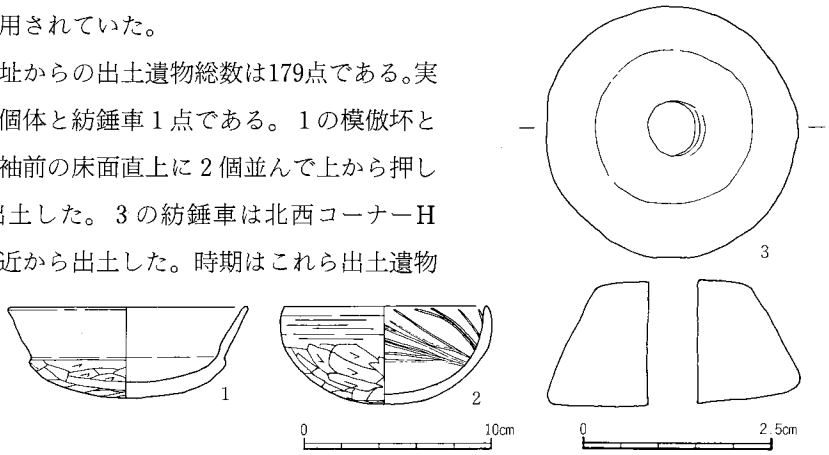


第6図　H－30号住居址とカマド（1/80，1/40）

な面になっている。特に、カマド周辺から住居址中央にかけて堅緻な面が広がっていた。ピットは、住居址北西に主柱穴が1基検出されたが、貯蔵穴は確認されなかった。

カマド　北壁の中央に位置し、主軸方位はN—12°—Wを指す。残存状況は良好で全長120cm、最大幅94cm、焚口部幅34cmの規模で、燃焼部、煙道部とも赤くよく焼けていた。支柱には凝灰岩質の円礫が使われており、火床面から煙道部へ緩やかな傾斜をもって立ち上がる。袖部は白色粘土で造られ、両袖の先端には、凝灰岩質の切り石が埋め込まれ、袖の補強材として使用されていた。

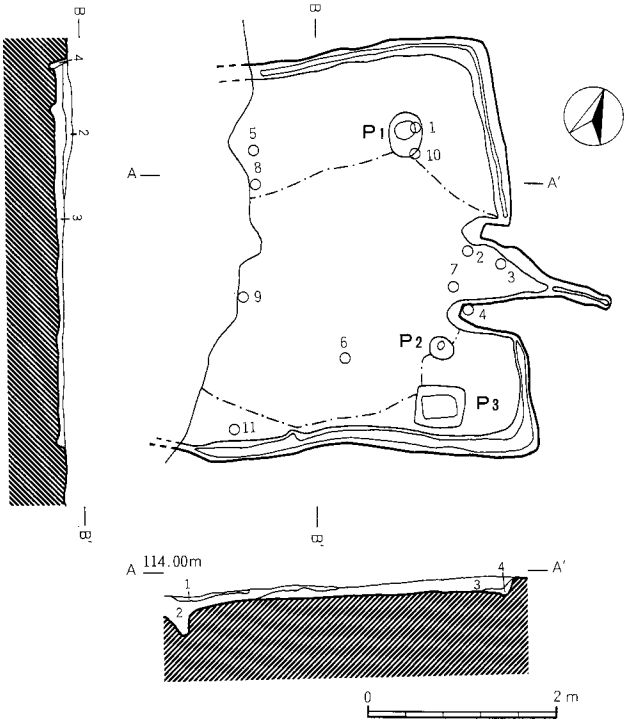
出土遺物　本住居址からの出土遺物総数は179点である。実測可能遺物は、坏2個体と紡錘車1点である。1の模倣坏と2の坏は、カマド左袖前の床面直上に2個並んで上から押しつぶされた状態で出土した。3の紡錘車は北西コーナーH—31との切り合い付近から出土した。時期はこれら出土遺物の器形から、6世紀前半代と考えられる。



第7図　H－30号住居址出土遺物（1/4，1/1）

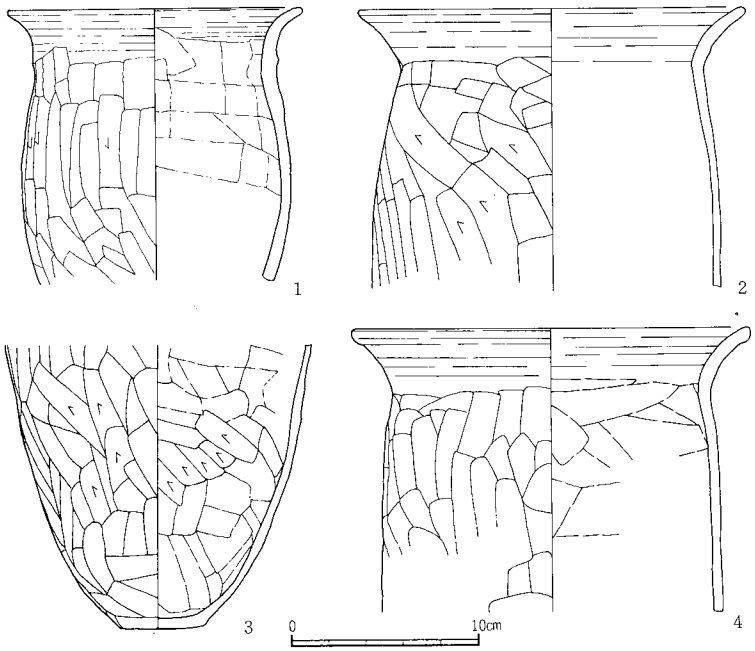
H－31号住居址

遺構　本住居址は、発掘区域の南西N・O・P－1・2グリッドに位置する。東西に長い長方形と考えられるが西壁は、八日市場城の溝及び耕作による攪乱により確認できなかった。カマドは東壁のやや南寄りに設置される。主軸方位はN－64°－Eを指す。南東コーナーではH－30と重複しており、本住居址は同住居址の北西コーナーを切って構築されていた。覆土は細かく見れば、4層に分けられるが、ロームブロックと軽石を含む柔らかい細砂である。確認面からの壁高は平均15cm程で、壁はローム壁で平均の立ち上がり角度は85°である。周溝は西壁を除き、幅10cm、深さ4cm程の規模で周っていた。床面はロームブロックを含む褐色土で10～20cm貼床され、平坦な面になっている。特にカマド付近から中央そして南壁にかけて堅緻な面が広がっていた。掘り方は凹凸の多い不整形な面で西半分がやや深く掘られていた。ピットは南東隅に貯蔵穴が1基、主柱穴が2基検出された。貯蔵穴は南東コーナー南壁際に

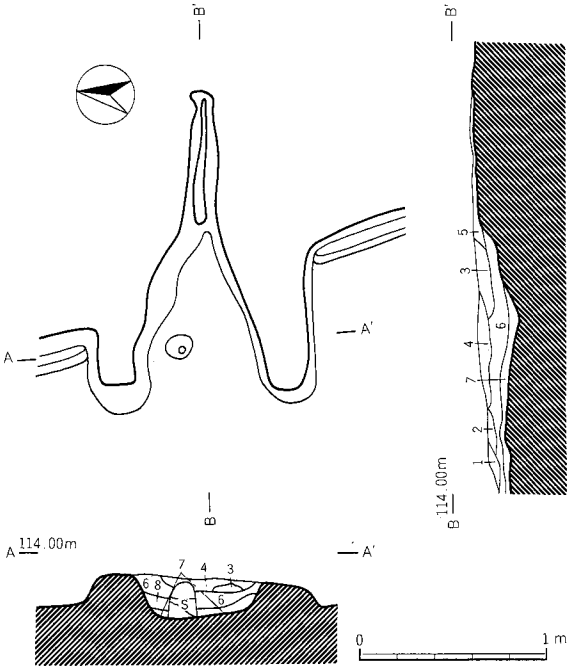


1層　暗褐色土層　細砂、φ2㎜の軽石わずかに含む。
2層　黒褐色土層　軽石、ロームブロック、焼土をわずかに含む。
3層　暗褐色土層　細砂、φ2㎜の軽石わずかに含む。しまり粘性なし
4層　褐色土層　φ20㎜程のロームブロックを20%含む。

第8図　H－31号住居址（1/80）

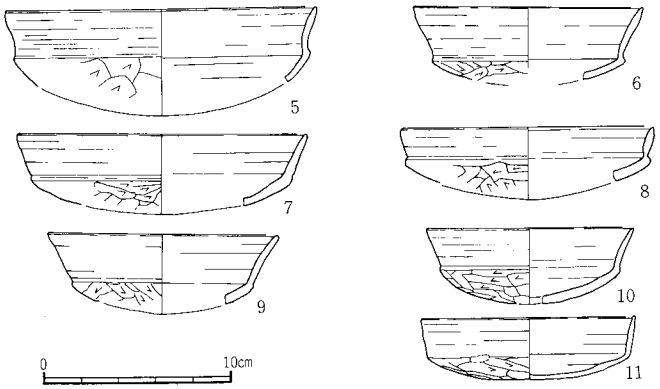


第9図　H－31号住居址出土遺物（1/4）



1層　黒褐色土層　φ1～2㎜の軽石を含む。
2層　黒褐色土層　φ1～2㎜の軽石、焼土を含む。
3層　赤褐色土層　焼土ブロックを含む。
4層　暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石と焼土やや含む。
5層　暗赤褐色土層　φ1～2㎜の軽石と焼土20%含む。
6層　極暗赤褐色土層　焼土30%、ローム粒わずかに含む。
7層　暗褐色土層　細砂、焼土わずかに含む。
8層　黒褐色土層　細砂、焼土10%、灰10%含む。

第10図　H－31号住居址のカマド（1/40）



第11図　H－31号住居址出土遺物（1/4）

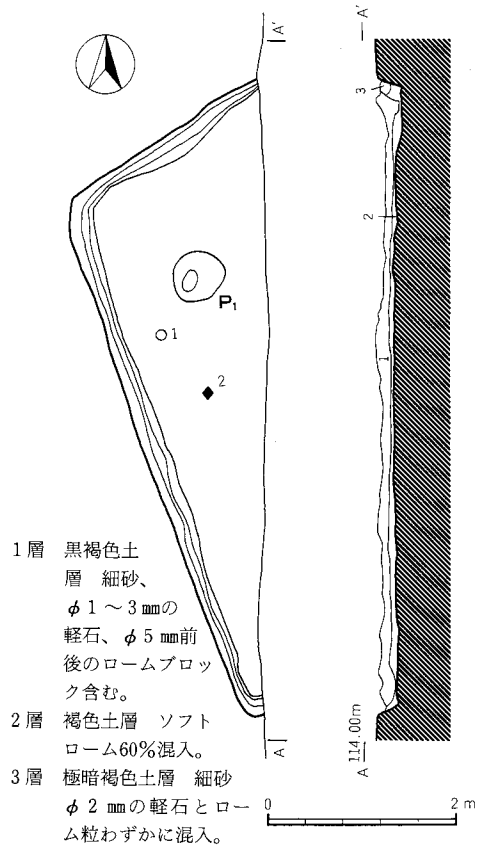
位置し、プランは東西に長い長方形である。長径54cm、短径45cmを測る。なおカマドの前から床下土坑が1基検出された。

カマド　東壁やや中央南寄りに位置し、主軸方位はN－84°－Eを指す。残存状況は良好で、全長170cm、最大幅130cm、焚口部幅56cmの規模で、天井部が崩落したと思われる多量の焼土ブロックが堆積していた。火床部はやや窪み、赤く良く焼けた煙道部へと緩やかに立ち上がる。カマド構築にあたっては、住居壁を掘り込み、燃焼部も10cm前後掘り方を設け、その上にロームで本体を築いている。袖部は、上部が粘土を用いて構築され、基底部は、ロームブロックを含む褐色土が敷かれている。その間に黒褐色土あるいは土器片が充填され、間層をなしている。

遺物出土状態　遺物は遺構全体に広く分布しており、接合された遺物は床面付近が多かった。大きくカマド付近、中央部に集中が見られる。特にカマド付近からは2・3・4の甕が出土しており、これらの破片はカマドの袖部からも出土していることからカマド構築の際補強材として使用されたと思われる。1の甕は主柱穴のP_1にはまり込む形で出土している。甕類がカマド付近から出土しているのに対し、5・6・8・9・11の坏類は住居址中央から西にかけて分布している傾向が見られる。

出土遺物　本住居址からの出土遺物総数は531点で、実測可能となった遺物は11個体であった。土師器甕が4個体、同じく土師器坏が7個体である。坏は全て外稜を有するもので、口縁部は程度の差はあるがみな外傾ぎみで、体部は浅い。年代観は出土遺物からみて6世紀中葉であろう。

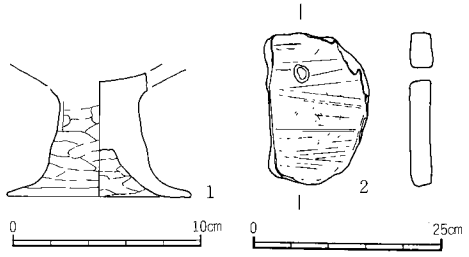
H－32号住居址



第12図　H－32号住居址（1/80）

遺構　本住居址はL・M・N－2グリッドに位置する。大部分が調査区域外にあるため、西壁と北壁の一部しか検出できなかった。南西隅でH－33と重複しており、同住居址を切って構築されている。確認面からの壁高は平均20cmで立ち上がり角度は65°であり、幅5cm前後の周溝が周る。

出土遺物　出土遺物総数は69点で実測可能遺物は高坏脚部1個体と石製模造品1点のみであった。遺物を器形等から総括的に見ると6世紀前半代に比定されよう。

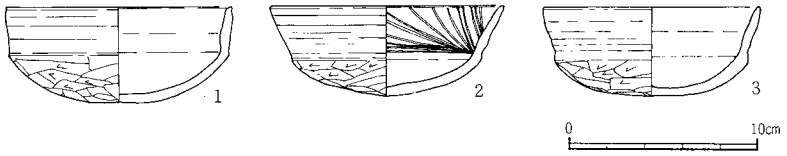


第13図　H－32号住居址出土遺物（1/4，1/1）

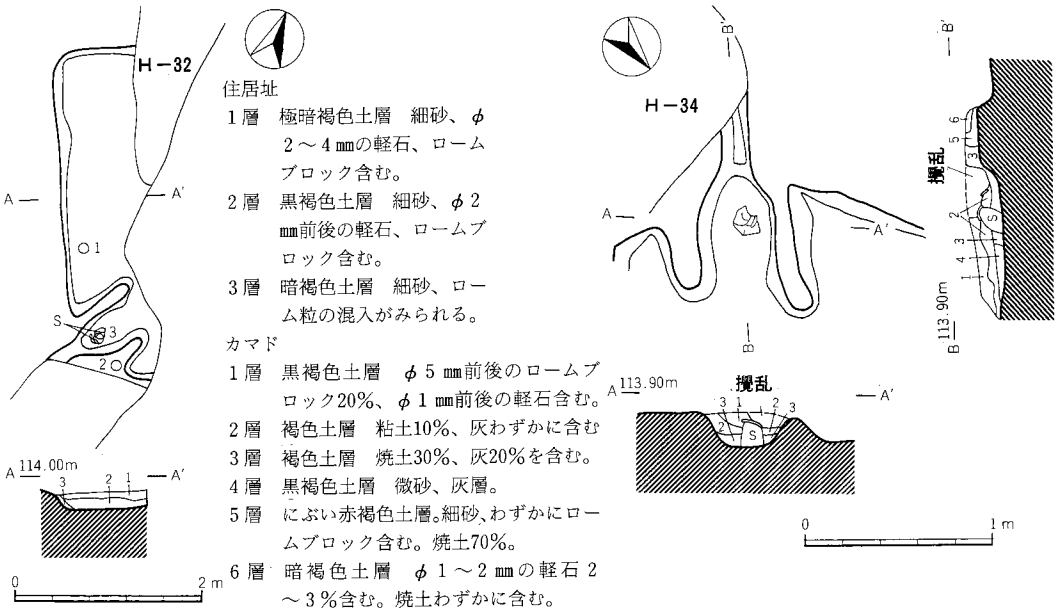
H－33号住居址

遺構　本住居址は、N・O－2グリッドに位置し、主軸方位はN－28°－Wを指す。北東はH－32と南のカマドの一部はH－34と重複しており、それぞれに切られている。また住居址の大部分は調査区域外にあるため確認できなかった。カマドは南西コーナーに設置される。確認面からの壁高は平均10cmで、比較的緩く立ち上がる。周溝は確認できなかった。床面はロームブロックを含む褐色土で貼床され、平坦な面になっている。

カマド　南西のコーナーカマドであり、主軸方位はN－40°－Eを指す。煙道部の一部をH－34に切られているが残



第14図　H－33号住居址出土遺物（1/4）



第15図　H－33号住居址とカマド（1/80，1/40）

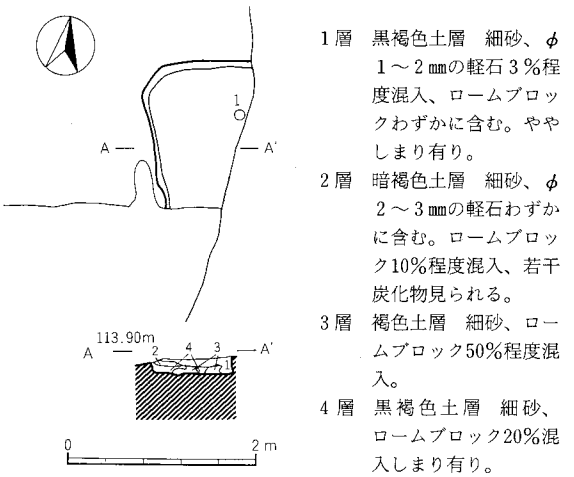
存状態は良好で全長123cm、最大幅85cmの規模で燃焼部、煙道部ともよく焼けていた。支柱には安山岩質の円礫が使われており、火床部は床面よりやや窪み、45°の角度で緩やかに煙道部へと立ち上がる。袖部はロームブロックを含む褐色土で構築されている。

遺物出土状態　遺物は遺構全体に分布しており、接合された遺物はカマド付近が多かった。3の坏は支柱をおおう状態で出土している。

出土遺物　実測可能の3個体はすべて外稜を有し、口縁は外傾する。6世紀前半に比定できる。

H－34号住居址

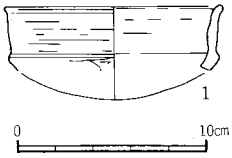
遺構　本住居址は、発掘区域の南東O－2グリッドに位置する。主軸方位はN－20°－Wを指す。南壁付近はH－30に切られており、北壁ではH－33と重複しており、本住居址は同住居址のカマド煙道部を切って構築されていた。覆土は4層に分けられるが、概ねロームブロックを含む細砂である。確認面からの壁高は平均15cmであった。周溝は確認できなかった。床面はロームブロックを含む褐色土層で5～10cm程度貼床され平坦な面になっている。掘り方は凹凸の多い不整形な面が広がっている。カマド及びピットは確認されなかった。



第16図　H－34号住居址（1/80）

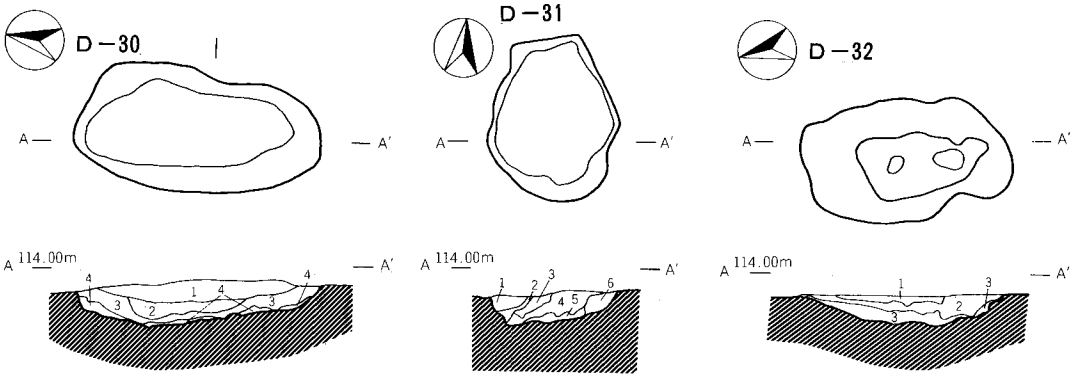
遺物出土状態　遺物は遺構の東、トレンチの壁際に散布する程度であった。1の坏は、トレンチ壁際の床面直上から出土している。

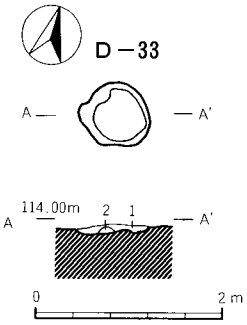
出土遺物　本住居址からの出土遺物は5点と非常に少なく、実測可能となった遺物は坏1個体であった。外稜を有し、わずかに外傾する。以上のような特徴から、本住居址の出土遺物は6世紀前半代に比定できる。



第17図　H－34号住居址出土遺物（1/4）

土　　坑





D－30
1層　黒褐色土層　φ1～2㎜のローム粒5％含む細砂。しまり、粘性なし。
2層　黒褐色土層　φ1～2㎜のローム粒わずかに含む細砂。しまり、粘性なし。
3層　黒褐色土層　ローム3％含む細砂。粘性有。
4層　褐色土層　ソフトローム層。

D－31
1層　暗褐色土層　攪乱。
2層　褐色土層　ロームブロック60％含む攪乱。
3層　暗褐色土層　φ10㎜のロームブロック5％混入する。しまり、粘性なし。
4層　黒褐色土層　φ2㎜の軽石5％、φ5～10㎜の焼土5％含む。しまりあり、粘性なし。
5層　暗褐色土層　ローム粒30～40％含む。
6層　褐色土層　ローム層。

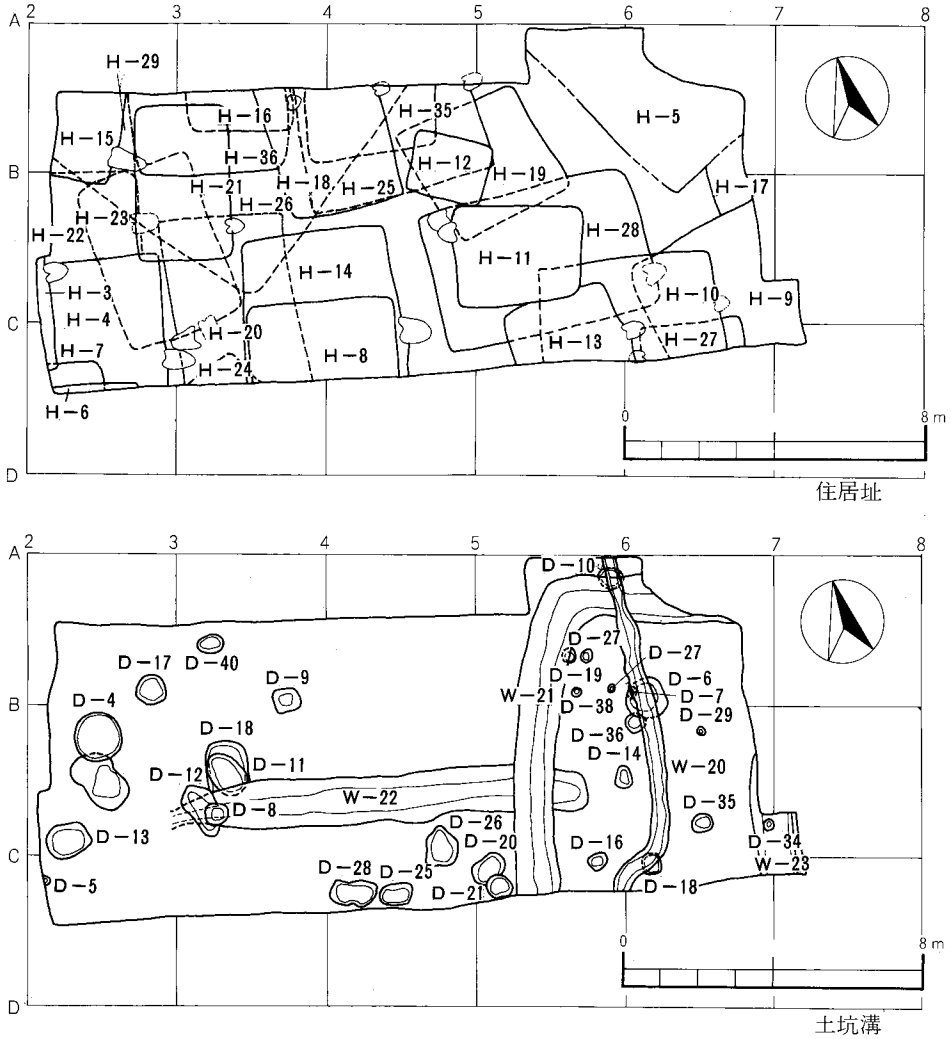
D－32
1層　褐色土層　φ10㎜のロームブロック20％含む細砂。軽石を少量含む。
2層　黒褐色土層　φ5～10㎜のロームブロック10％φ2㎜の軽石を少量含む細砂。
3層　暗褐色土層　ロームブロック70％含む。

D－33
1層　暗褐色土層　φ1～2㎜軽石少量含む細砂。しまり、粘性なし。
2層　褐色土層　φ10～20㎜のロームブロック50％含む細砂。軽石を少量含む。

第18図　D－30～33号土坑（1/80）

土坑は調査区域全域に散在して4基検出した。いずれも不整円形で、これらのうち覆土から新しい様相を呈するのはD－31、32、33の3基であった。D－30は縄文時代の落とし穴的様相を呈し、楕円形プランで長径262cm、短径135cm、深さ45cmを測る。主軸方位はN－11°－Wを指し、遺物の出土はなかった。台地の縁辺部斜面でコンタに対して平行して掘られていた。D－31は主軸方位をN－12°－Wにとる。長径172cm、短径142cm、深さ33cmの規模を有する。D－32は不整楕円形プランを呈し、主軸方位をN－11°－Eにとる。長径226cm、短径130cm、深さ31cmを測る。D－33は、不整円形プランで、主軸方位N－54°－Wを指す。長径79cm、短径68cm、深さ10cmを測る。出土遺物は殆ど無く、二次的混入による小破片が僅かに認められた。

2　9トレンチ

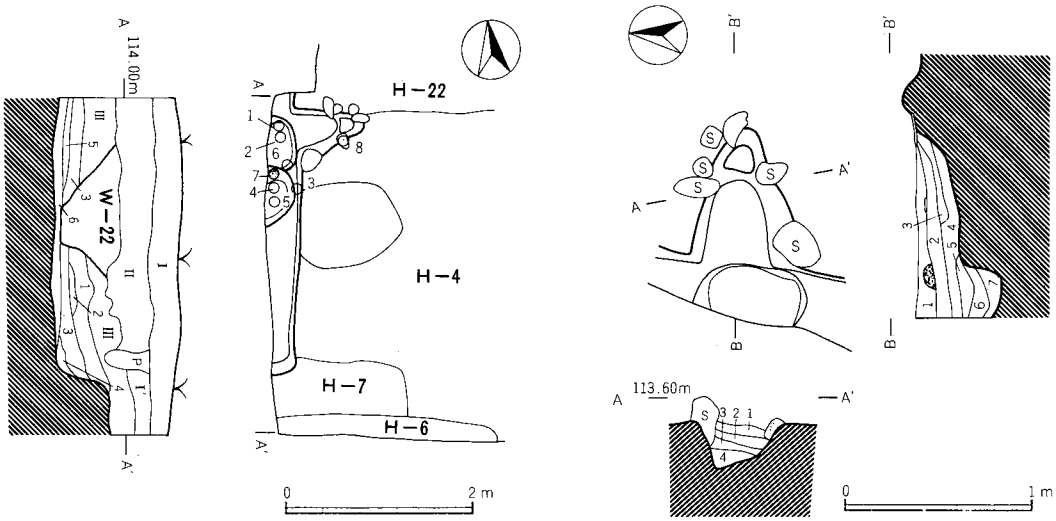


第19図　9トレンチ全体図（1/200）

9トレンチは、天台宗昌楽寺の本殿南方20mに所在する東西方向の調査区である。昭和57・58年度調査の9トレンチの西側延長上に位置する。現地は牛池川左岸の微高地上に当り、近世には八日市場城が郭を構えた生活及び防衛上の好適地であったと推定され、僅かな調査面積中に29軒の竪穴住居址と4条の溝・土坑28基が複雑な切り合いと、多量の土器片を伴って検出された。

住居址は4世紀後半代から11世紀代にまで及び、すべての遺構に重複関係が認められた。本地域は前掲の調査報告書においては国府域内として示された線引きの枠内に収まる地域であるが、律令期以降に相当する住居址の重複関係には方向性等の規則性は認められなかった。又、出土遺物においても直接国府に関連するものは認められなかった。こうした中で特筆されることは、国府周辺域の一般集落の土器様相の一端が明らかになったことであろう。

H－3号住居址



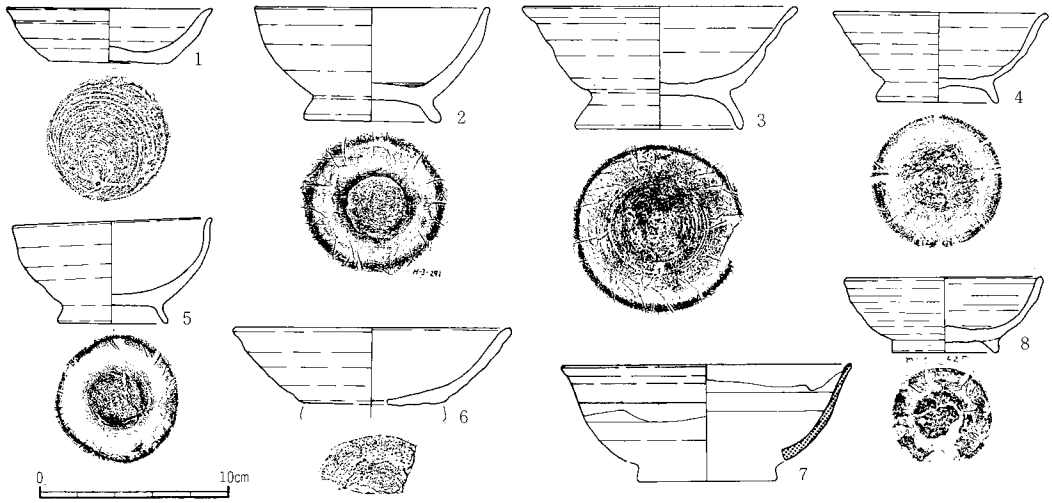
住居址
1層　暗褐色土層　パミス3％、カーボン1％混入する。
2層　褐色土層　シルトブロック70％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス2％、焼土1％混入する細砂。
4層　黒褐色土層　パミス1％、焼土2％混入する細砂。
5層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。
6層　黒褐色土層　パミス1％、焼土5％混入する細砂。
カマド
1層　黒褐色土層　パミス1％、焼土2％混入する細砂。
2層　黒色土層　パミス1％、焼土2％混入する灰。
3層　黒褐色土層　パミス1％、カーボン2％混入する細砂。
4層　黒褐色土層　焼土ブロック2％、カーボン2％混入する細砂。
5層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。
6層　暗褐色土層　パミス1％、カーボン1％混入する細砂。
7層　黒褐色土層　焼土1％混入する細砂。

第20図　H－3号住居址とカマド（1/40，1/80）

遺構　9トレンチの西壁付近に住居址東端とカマドが検出された。遺構の大半は調査区域外であったが、カマドと貯蔵穴が調査できたので遺物は多数出土した。重複関係からH－4・7・22に後出し、D－5・13、W－22に先行する。カマド主軸方位N－90°－E、壁高28cmを測る。

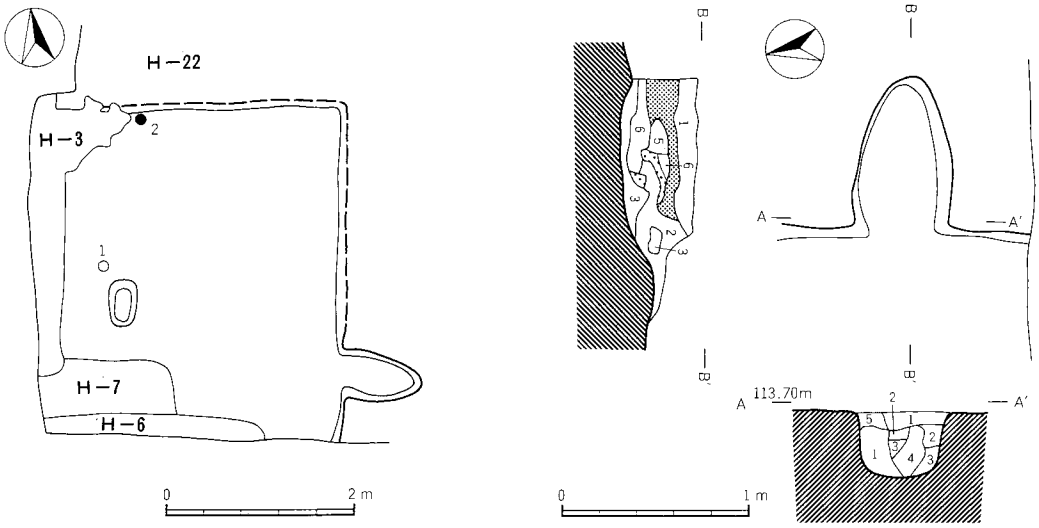
カマド　カマドは破壊され、一部石を抜き取られていたが、河原石を竈壁に組んだ石組みカマドであったと考えられる。貯蔵穴はカマド右脇に築かれ、多量の灰・炭化物とともに土器を出土している。床面からの深さ40cmの隅丸方形を呈する。住居址の床面は本台地を構成する硬質の火山灰質シルト層上に厚さ4～5cmに黒褐色土を貼床して非常に堅緻な面を構築している。

出土遺物　遺物は総数298点の土器破片を検出している。これらの殆どがロクロ使用、酸化焔焼成の須恵器小破片で、一部灰釉陶器片も出土している。接合を経て原型を復しえるものは図示した通りである。1は橙色を呈す底部右回転糸切未調整の坏で、体部も全面回転ヘラケズリが施される。2・5は体部に丸味を帯びた酸化焔焼成の須恵器で、内面もロクロ使用により滑らかに仕上げている。器形や調整からみて漆器の模倣であると推測される。3の足高高台埦も酸化焔焼成で淡橙色を呈し、左回転ロクロ使用である。7の灰釉陶器埦は、高台部を欠損しているが、胎土、調整から猿投窯の製品と考えられる。猿投窯の編年に同定すると(註1)O－53号窯址の4段階、11世紀前半代に比定されよう。



第21図　H－3号住居址出土遺物（1/4）

H－4号住居址

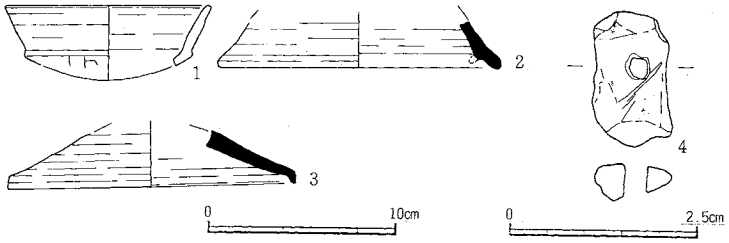


カマド
1層　暗褐色土層　パミス2％、焼土1％混入。若干しまる。
2層　暗褐色土層　粘土ブロック3％混入。若干しまる。
3層　黒褐色土層　焼土2％、灰ブロック5％パミス1％混入。
若干しまる。
4層　褐色土層　焼土ブロック30％、カーボン1％、パミス2％、混入。細砂。固くしまる。
5層　黒褐色土層　焼土2％、パミス2％混入。細砂。固い。
6層　灰黄褐色土層　パミス2％、焼土ブロック2％カーボン1％混入。細砂。若干しまる。

第22図　H－4号住居址とカマド（1/40，1/80）

遺構　9トレンチ南西隅に位置する。南壁は調査区域外にあり、西壁はH－3・6・7によって壊されているが、全体の8割は調査できた。重複関係はH－3・6・7より古く、H－20・22・23より新しい。平面形は隅丸の方形を呈すると推定され、主軸方位はN－88°－Eをとる。カマドは東壁よりに構築されていた。なお、床面上からは網代状の敷き物が検出されている。

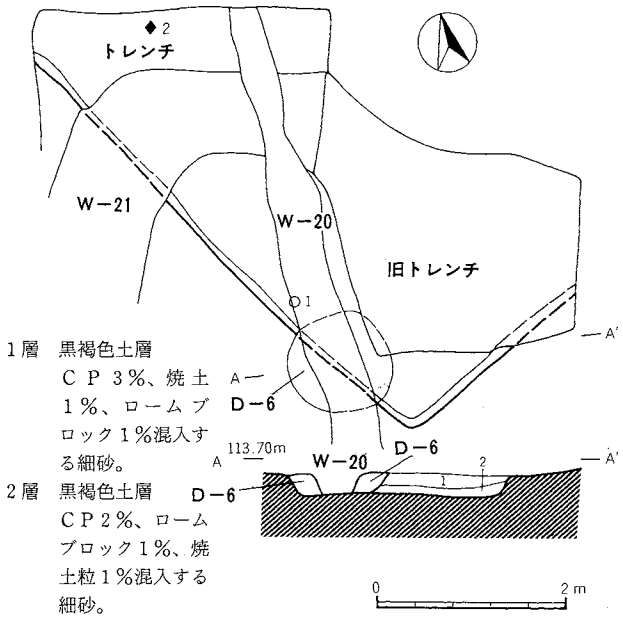
カマド　東壁から壁外に突出して煙道を出している。焚口部は流出した粘土が厚く堆積していたが、袖は検出できなかった。立ち割りの断面から天井部は崩落していることが明らかになった。規模は全長80cm、焚口幅50cmで東壁直交角より5°南偏して主軸方位をとる。燃焼部の立ち上がりはゆるやかで灰は殆ど残存していなかった。



第23図　H－4号住居址出土遺物（1/4, 1/1）

出土遺物　遺物は総数1,799点出土しているが後世の攪乱が著しく、図示できたものは土器3点と滑石製模造品1点のみである。1は土師器坏で外稜をもって大きく外反する。体部は手持ちヘラ削りで口縁部ナデ。2の須恵器坏蓋は大半を欠損するものの7世紀中葉の所産と推定され、3の坏蓋と時期を異にしている。出土状態を見ると、3・4は埋土であるので他遺構の混入であろう。

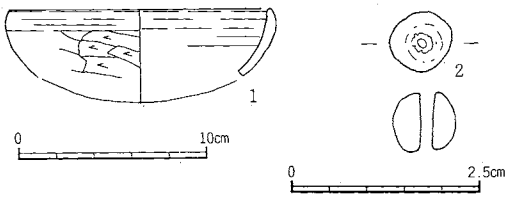
H－5号住居址



第24図　H－5号住居址（1/80）

遺構　9トレンチ北東隅に検出された。大半は調査区域外で住居の南端部のみ調査できた。W－20・21より古く、H－17より新しい。平面形は正方形を呈すると推定される。周溝・カマド・柱穴等は調査区内では検出されなかった。床面は地山の火山灰質硬質シルト層上に部分的に黒色土を貼床して平坦に仕上げていた。規模は一辺が6mを越える大型の住居と推定される。

遺物出土状態　遺物は遺構内に後世の掘り込みが多かったため総数で163点であった。これらの殆どが土師器の小破片であったが接合されたものは少なく、図示できた土器は1点のみであった。



第25図　H－5号住居址出土遺物（1/4, 1/1）

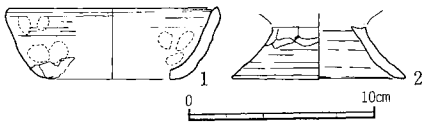
出土遺物　1は土師器素口縁坏で下半部を欠損するが丸底で全面ヘラケズリが施されていたと推定される。2のガラス製小玉は床面付近で出土したもので、コバルトブルーを呈す。断面隅丸方形で中央部に円孔を有する。

H－6号住居址

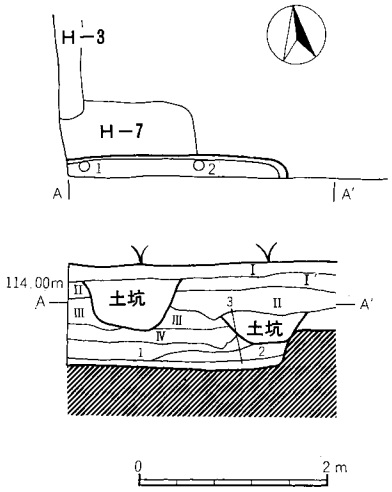
遺構　9トレンチ南西隅に住居の北壁が確認された。従って遺構の殆どは調査区域外にある。重複関係はH－4・7を破壊して構築されている。周溝はなく、床面の貼床も施されていない。壁高は40cm残存し、覆土は黒褐色土を主体として、大きく3層に分類された。住居の方位は北壁の確認部分からはN－82°－Wを示した。

出土遺物　遺物は総数で38点出土した。それらの殆どは床面直上からの出土であったが、接合されたものは少なかった。

1は土師器の坏で粘土円板を手でおこした指頭圧痕の顕著なものである。2は台付椀の脚部で9世紀後半代の所産であろう。この他に丸瓦が1点床面から出土している。



第26図　H-6号住居址出土遺物（1/4）



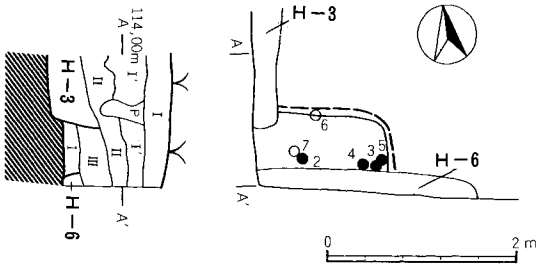
1層　黒褐色土層　パミス2％、カーボン1％、焼土1％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス2％、焼土3％混入する細砂。粘性有す。
3層　黒褐色土層　パミス1％、シルトブロック3％混入する細砂。

第27図　H－6号住居址（1/80）

H－7号住居址

遺構　9トレンチ西南隅で住居址の北東隅部のみが検出された。西側大部分は調査区域外で他はH－3・6で破壊されており、H－4を壊して構築されている。周溝はなく、柱穴も調査区域内では検出されなかった。住居址の方位は北壁をN－80°－Wの方向にとる。

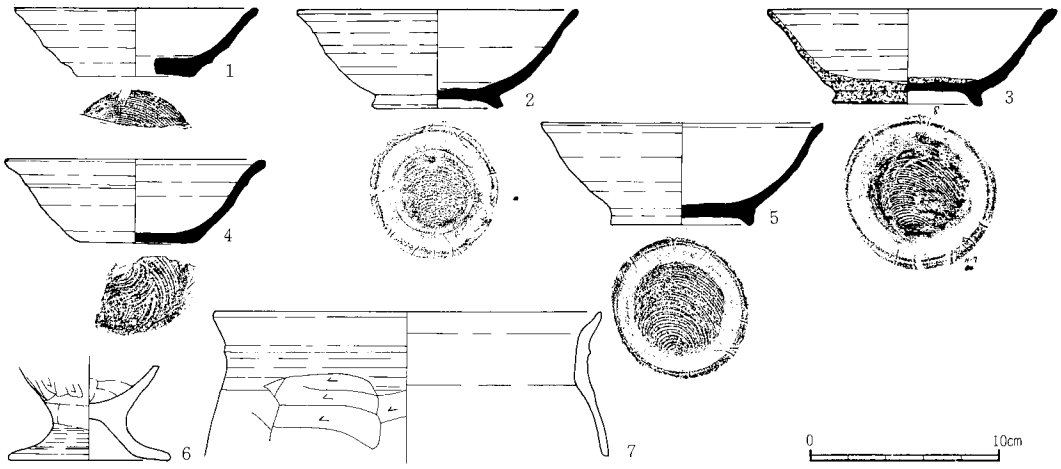
遺物出土状態　遺物は総数95点出土している。それらの殆どは床面直上からの出土で完存しているものも多かったが、無作為的な出かたは破棄の状況を示すものであろう。なお廃棄後火を受けているものもあった。



1層　黒褐色土層　パミス1％、カーボン1％、焼土1％混入する細砂。若干しまる。

第28図　第28図　H－7号住居址（1/80）

出土遺物　出土須恵器はいずれも還元焰焼成によるものである。坏1は体部が直線的に外反するのに対し、4は体部中位が若干膨らみ、口縁部が反り気味に開く器形である。いずれも底部糸切り未調整である。高台椀2・3・5は体部中位に膨らみを持ち、口径が大きい器形で底部右回転糸切り未調整で高台を付けている。これらのうち2・3は開いた形状の高台であるが断面形は前者は角張り、後者は丸く仕上げている。6は土師器台付椀の脚部で上半部を欠損する。体部下



第29図　H－7号住居址出土遺物（1/4）

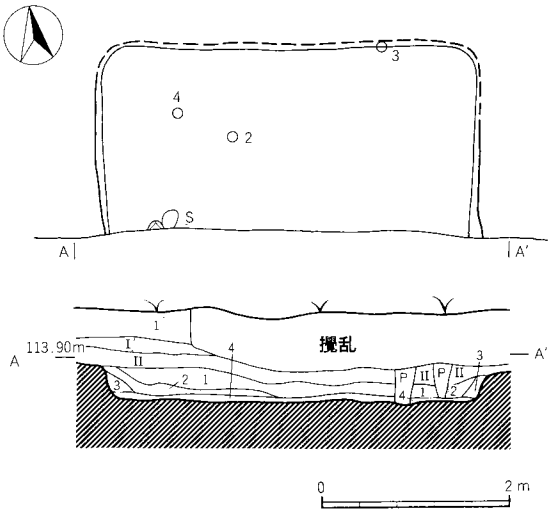
半縦方向へラケズリを施し、器肉を薄く仕上げる。脚部は横方向ナデで胎土中に絹雲母片岩を混入する。7は土師器の所謂「コ」の字状口縁甕で胴下半部を欠損する。胎土中にやはり多量の雲母片を混入し注目される。以上いずれも9世紀後半代の土器セットと捉えて問題ないと思われるが、台付埦脚部を見るとむしろH－6の方が前代的なものであり、切り合い関係で本遺構の方が先行するが、その変遷は比較的短期間に行なわれたものと推測したい。

H－8号住居址

遺構　9トレンチ南端、C－3・4グリッドに所在する。遺構北半分のみ調査できた。BP下40cmでH－14・20が完全に埋没後その上に床面を構築している。平面形は方形を呈すると推定され、北壁をN－80°－Wの方位にとる。壁高は36cmを測り周溝はない。柱穴も検出されなかった。カマドは調査区域外につくと推定される。

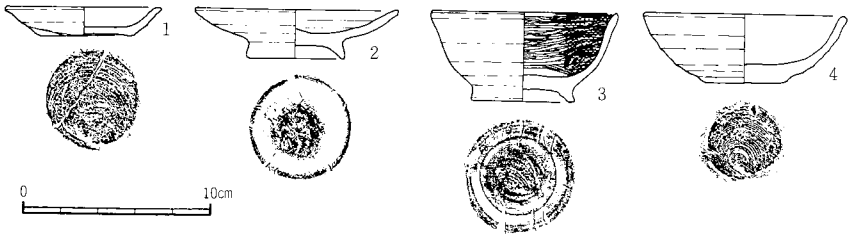
遺物出土状態　遺物は総数825点出土している。分布は住居全域に亘り、床面上30cmまでの範囲に集中している。その殆どは酸化焔焼成の須恵器小破片で他に所謂カワラケ皿の破片も際立っていた。

出土遺物　1はカワラケ皿底部右回転



1層　黒褐色土層　パミス3％、焼土2％、ロームブロック1％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％、カーボン1％、焼土1％混入する細砂。
3層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。
4層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。

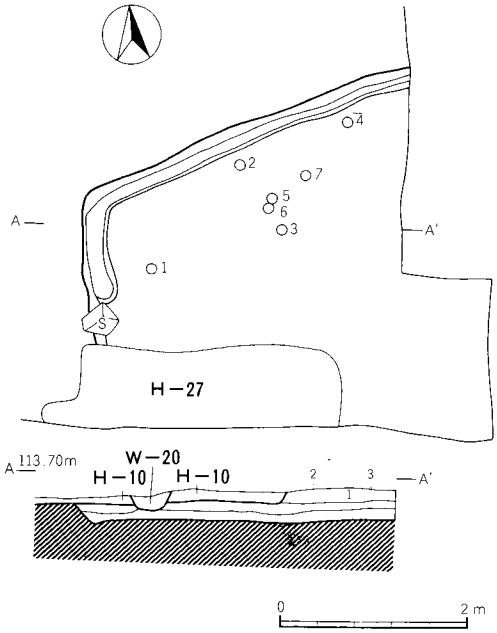
第30図　H－8号住居址（1/80）



第31図　H－8号住居址出土遺物（1/4）

糸切り未調整。2・3・4はいずれも酸化焔焼成で3は内面黒色処理後ミガキを施す。11世紀前半代に比定されよう。

H－9号住居址



1層　黒褐色土層　CP 2％、カーボン、焼土2％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　CP2％、カーボン1％混入する細砂。
3層　パミス、CP3％、焼土粒、カーボン粒含む細砂。

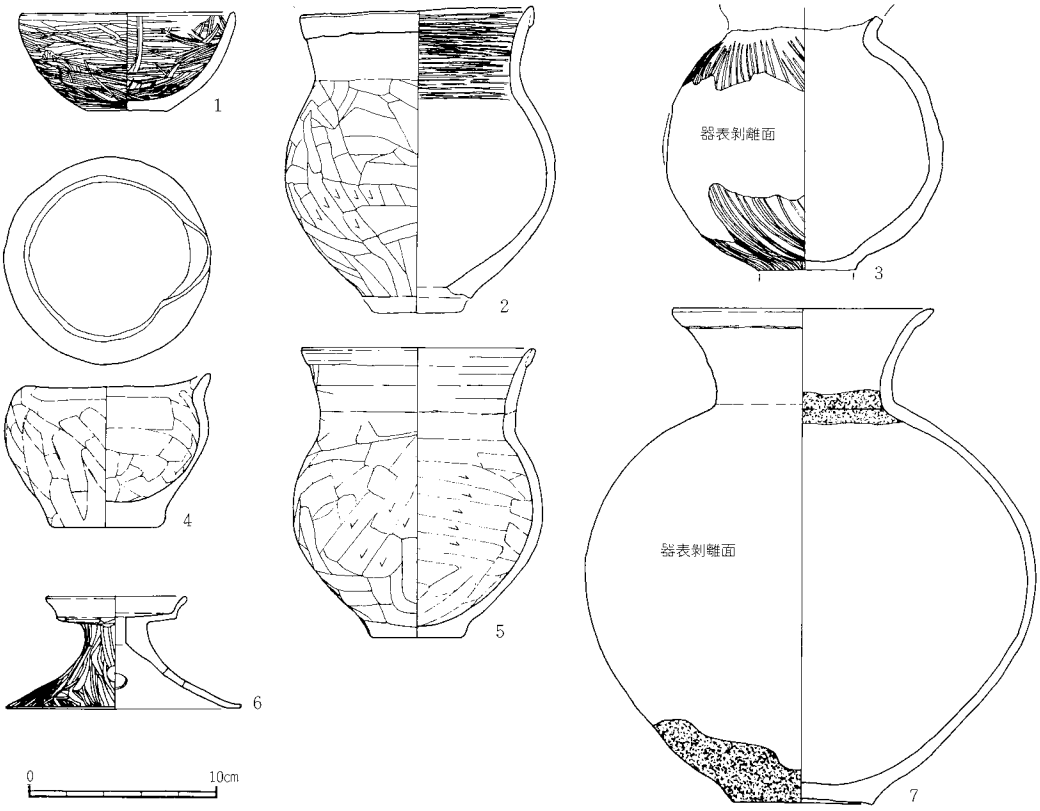
第32図　H－9号住居址（1/80）

遺構　9トレンチ南東隅に検出された。住居北の北西約4分の1を調査した。後世の遺構によりかなり攪乱されていたが、床面付近は比較的良好に残存していた。隅丸方形のプランが推測され、北壁をN－73°－Eの方位にとる。残存壁高は28cmで周溝は確認されている。床面はCP混り黒褐色土で貼床されていた。柱穴は調査範囲では確認できなかった。H－10・13・27・28・W－21・23・D－34・35より古く、H－17よりも新しい。

遺物出土状態　総数255点検出された遺物は殆どが土師器の小破片であった。遺構上半部では他の遺構により攪乱されていたが床面直上で古式土師器の良好なセットが出土した。

出土遺物　1の坏は内外面ともに全面ミガキを施す半球形の器形で平底。2と5は共に折り返し口縁の甕で外面調整体部ヘラ削り、内面調整は2ではミガキ、5はナデによる。3は外面調整がハケメで石田川式の台付甕に類似する。外面器表の剝離が著しい。4の片口は粘土紐巻き上げによって成形され、内外面ナデ調整で仕上げている。注口の部分も手捏ねにより突出させている。6は器台で脚部に四孔の透し孔を穿ける。口唇部は外方につまみ上げ、端部は丸みを帯びる。7の壺は折り返し口縁で器表全面にミガキを施す。外面は剝離が著しく二次焼成を受ける。

年代は住居覆土にCPの二次堆積土が入ることからCP降下以降と推察され、明らかに古墳時代前期のセットと捉えられる。この段階の住居址は一般的にはS字状口縁台付甕が出土するのであるが、本遺構からは1片も出土していない。4世紀後半代に比定されよう。



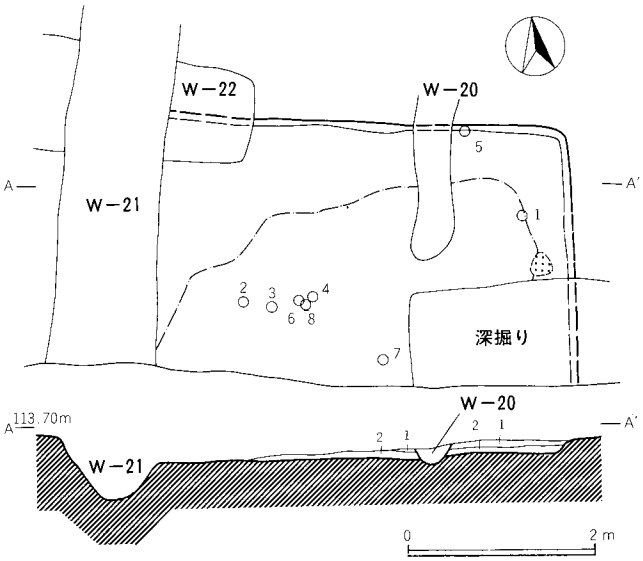
第33図　H－9号住居址出土遺物（1/4）

H－10号住居址

遺構　9トレンチ南東部に位置する。重複関係はH－9・13・27・28より新しく、H－11・W－20・21・22・D－14・16・18・35より古い。

平面形は東西方向に長い方形と推定され、北壁をN－80°－Wの方位にとる。壁高は確認面で16cmと浅く遺存状態は悪かった。

カマド　東壁の北壁よりに付されていたと推定される。遺構確認面では明確にしがたく、床面直上に焼土の集積が認められているの



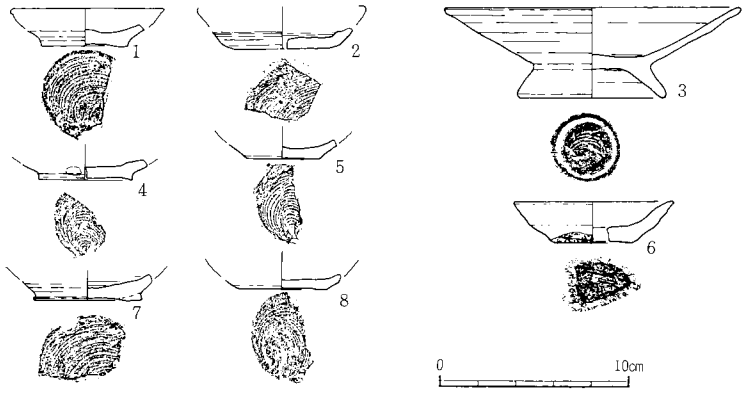
1層　暗褐色土層　パミス2％、焼土粒、カーボン粒混入する細砂。

2層　褐色土層　パミス1％、焼土粒、カーボン粒混入する細砂。

第34図　H－10号住居址（1/80）

で何らかの関連性を持つものか？

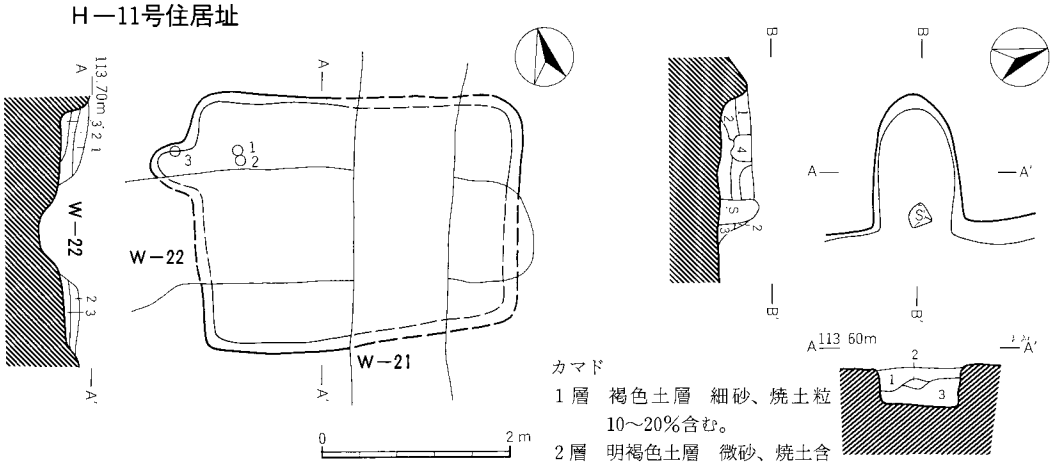
出土遺物　遺物は総数401点出土している。その殆どは酸化焔焼成須恵器小破片で遺構の残存状態が悪かった割には遺存度は良い。3は酸化焔焼成の足高高台埦で、直線的に外反する浅身の器形は皿と呼ぶべきかもしれない。右回転ロクロ使用による。その他はすべてカワラケ皿の破片で油煙の付着は灯明皿として用いられたものと考えられる。底部はいずれも右回転ロクロ糸切り未調整である。胎土が1・2・6・7・8ではざんぐりした鈍い黄橙色を呈すのに対して、4は褐色でやや粗い胎土を用いる。5は橙色で緻密な軟質な胎土で雲母粒を混入する。



第35図　H－10号住居址出土遺物（1/4）

年代については、足高高台とカワラケ皿のセットから11世紀前半代と考えられ、重複する3軒の住居址の時間差はあまりないと推定される。

H－11号住居址



住居址
1層　黒褐色土層　カーボン粒、パミス、ローム粒混入。
2層　黒褐色土層　カーボン粒、焼土粒、パミス混入する細砂。
3層　黒色土層　カーボン粒、ロームブロック、パミス含む細砂。

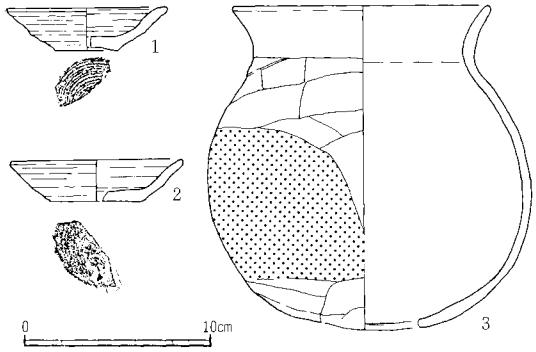
カマド
1層　褐色土層　細砂、焼土粒10～20%含む。
2層　明褐色土層　微砂、焼土含む。
3層　褐色土層　細砂、パミス含む。
4層　赤褐色土層　微砂、純焼土層。

第36図　H－11号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　9トレンチ中央東寄りB－4・5グリッドに所在する。H－13・19・28と重複し、そのいずれよりも新しくW－21・22に住居中央部を破壊される。平面形は東西に長い矩形で主軸方位をN－76°－Wにとる。カマドは西壁の中央より北寄りに持つ。覆土は大きく3層に分類され、床面

直上では炭化物が多く認められた。壁高は32cmを測り周溝はない。床面は若干しまっているが貼床は確認できなかった。

カマド　西壁に付す。壁面より約50cm突出する。南3分の1をW—22によって破壊される。底面はあまり焼けていないが天井部は崩落している。全長74cm最大幅48cmを測りN—71°—Wに主軸方位をとる。煙道部の立ち上がり角は62°である。



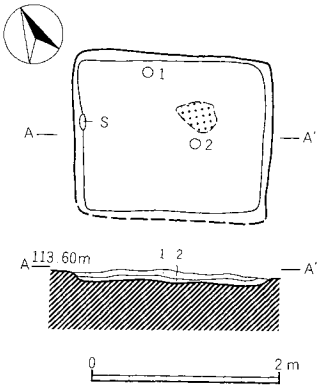
第37図　H－11号住居址出土遺物（1/4）

遺物出土状態　総数264点の出土遺物の大半は酸化焔焼成須恵器小破片であった。溝による攪乱が著しかったためもあり接合されたものは少なかった。しかし、床面直上から出土したものには完存しているものもあった。

出土遺物　1はカワラケ皿の破片で全体の4分の1程度残存する。色調は鈍い黄橙色で胎土は粗い。底部右回転ロクロ使用による糸切り未調整。2は橙色を呈するカワラケ皿で、全体の6分の1程度残存する。底部糸切り未調整。3はカマド材に用いられていた土師器甕で球胴形を呈す。外面調整はヘラケズリにより、胴部には一面に焼土が付着していた。出土状態から見て付近の住居の遺物を材に転用したものであろう。本遺構の年代観は11世紀前半代と推定されるH—10を壊しているが、出土したカワラケ皿の比較ではH—10と大差はなく、住居址の方位もほぼ同じであることから、あまり時間差を置かずに建て替えが行なわれたと推定される。以上のことから本遺構も11世紀前半代に比定できよう。

H—12号住居址

遺構　9トレンチ中央部に位置する。H—19・25・35と重複し、そのいずれよりも新しい。平面形は東西方向にやや長い方形で軸長2×1.8mの小型住居址である。規模から住居址とするには疑問であったが(註2)、遺物の出土状態と床面から判断して住居址と断定した。方位は西壁でN—25°—Eの方向にとっている。壁高は確認面で約10cmを測る。周溝はない。床面は固くしまっていた。カマドは確認されなかったが、遺構中央部より焼土の集積が検出された(註3)。焼土ピットやヘッツイ状の施設は確認されていないが焼け石と多量のスラグを含む銅片・鉄片の出土は注目される。

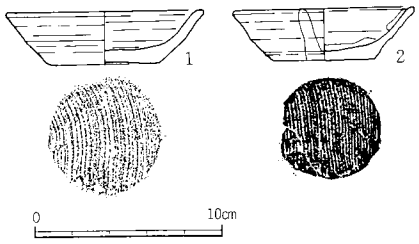


1層　暗褐色土層　細砂、φ2～4㎜の軽石5％含む。
2層　極暗褐色土層　細砂、φ2㎜の軽石、炭火物、焼土粒含む。

第38図　H－12号住居址（1/80）

遺物出土状態　総数450点出土している。土器はいずれも酸化焔焼成須恵器の小破片で、鉄滓・銅滓とともに混じって出土し

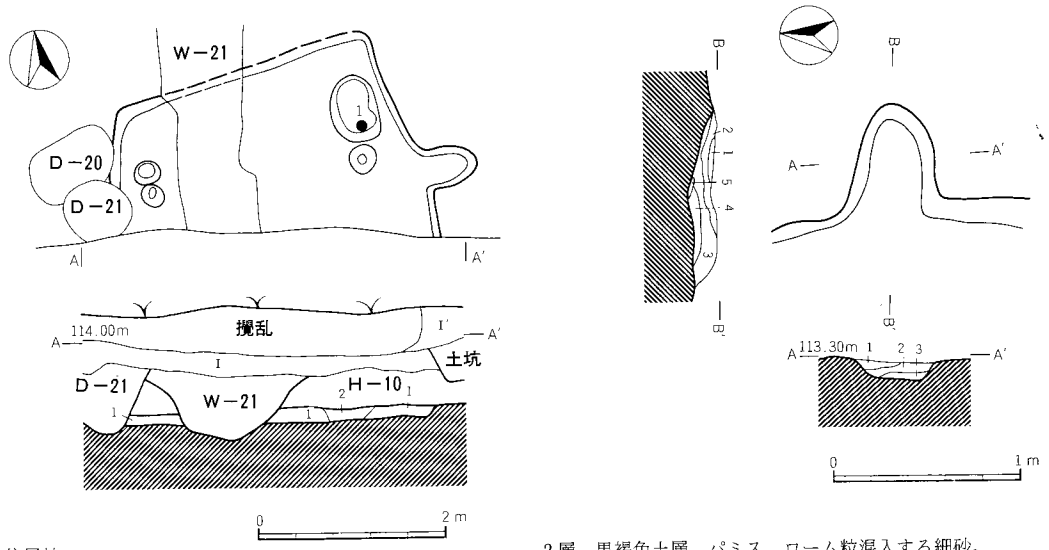
た。その出土状態は投棄された様相を呈しており、接合されたものは少なかった。



第39図　H－12号住居址出土遺物（1/4）

出土遺物　1は灰白色を呈すカワラケ皿である。胴中位が若干膨らみ直線的に外反する。底部静止糸切り未調整。2は淡黄色を呈すカワラケ皿で、直線的に外反する。内面に燈心の痕跡と思われる油煙の付着がある。底部はやはり静止糸切りである。金属遺物は整理の途中で銹落し等が行なわれていないため詳細は語れないがスラグが多いようであり、数点は製品の可能性があるものも見られた。住居構造が竈屋的(註4)であり、出土遺物から11世紀前半代に比定したい。

H－13号住居址



住居址
1層　黒褐色土層　パミス、焼土粒、カーボン粒含む細砂。
2層　黒褐色土層　パミス、焼土粒、カーボン粒含む細砂。
カマド
1層　極暗赤褐色土層　カーボン粒、焼土、パミス含む混土。
2層　黒褐色土層　パミス、ローム粒混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス、焼土粒、ローム粒混入する細砂。
4層　黒褐色土層　カーボン粒、灰、焼土粒混入する細砂。
5層　褐色土層　ローム粒、焼土、パミス含むシルト。

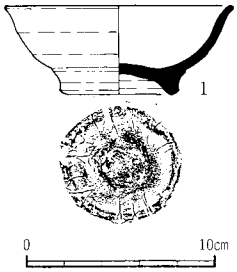
第40図　H－13号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　9トレンチ南東部で検出され、住居址の北半分を調査した。H—27・28より新しく、H—10・11・W—20・21・22・D—15・16・20・21に壊される。平面形は方形でカマドを東壁に持つ。主軸方位をN—82°—Eにとり、壁高は確認面で16cmを測る。周溝はない。床面は非常に固くしまり黒色土を貼床している。カマド左脇に貯蔵穴を持つ。ピットは貯蔵穴に接してカマド前面に一箇所と住居北西隅に二個が接して確認されたが配列は不規則で柱穴としては疑問である。

カマド　東壁に付く。焼けは弱く全長60cm、最大幅50cmでN—90°—Eの方向をとり、壁外に50cm突出させる。煙道部の立ち上がりはゆるやかで、すでに消失している上半部で急激に立ち上がるものと推察される。壁面は焼けて橙色を呈するが崩落土には殆ど焼土ブロックは含まれておら

ず、灰の量も少なかった。

出土遺物　遺物は総数513点出土したが接合されたものは少なかった。1の須恵器高台埦は貯蔵穴内より出土した。還元焰焼成の堅緻なもので底面は右回転ロクロ使用でナデ調整後、高台を付けている。体部に丸味を持つ器形で漆器の色彩が濃いものと推定される。10世紀後半代の所産であると考えられる。



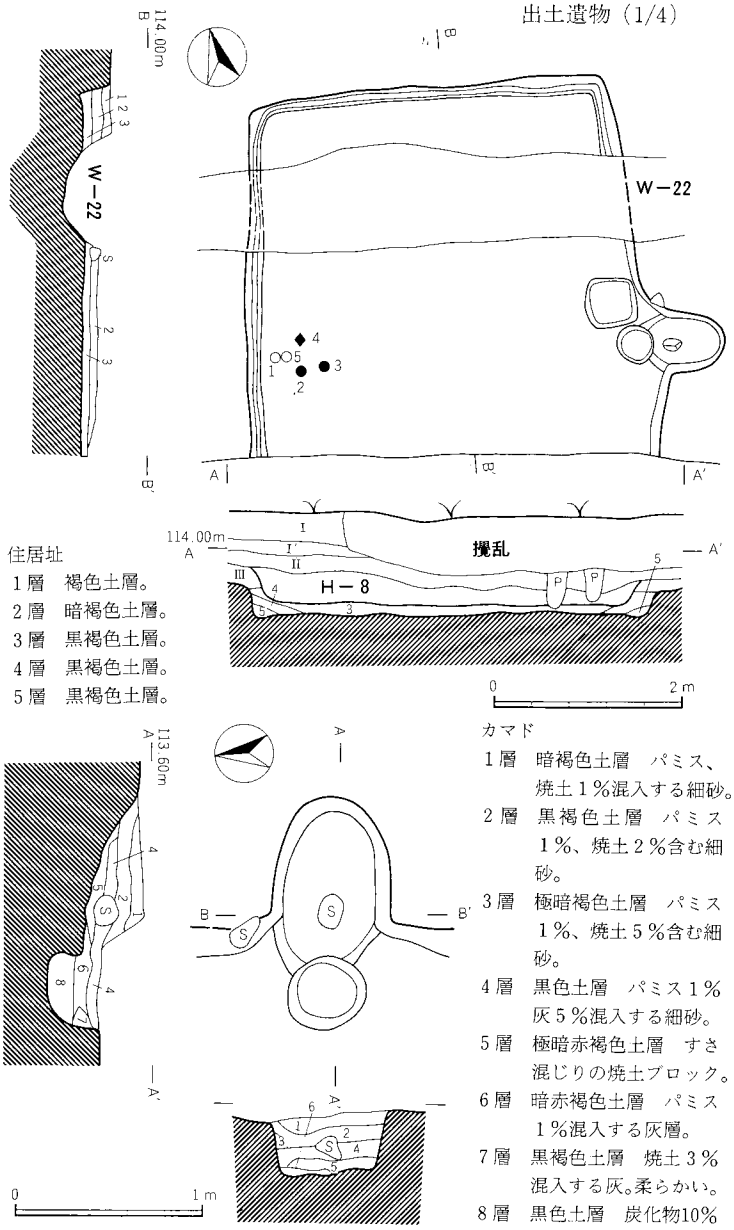
第41図　H－13号住居址出土遺物（1/4）

H－14号住居址

遺構　9トレンチ中央南寄りで検出された。H－8・D－25・28より古く、H－20・24・26より新しい。平面形は方形でカマドを東壁に付す。主軸方位はN－100°－Eにとり、東西軸長4.24mを測る。壁高は確認面で4.28cmを測り周囲には矢板の痕跡と推定される周掘状の掘り込みが巡る。床面は固くしまっており、若干貼床されていた。柱穴は確認されなかったがカマド左脇に貯蔵穴を検出した。

カマド　重複がなかったため遺構に比してカマドの遺存状況は良好であった。主軸方位をN－82°－Eにとる。中央部に河原石製の支柱と左袖に袖石を持つ。焚口部手前には灰かき穴が穿く。残存長124cm、焚口幅64cm、煙道部の立ち上がり角度36°を測る。

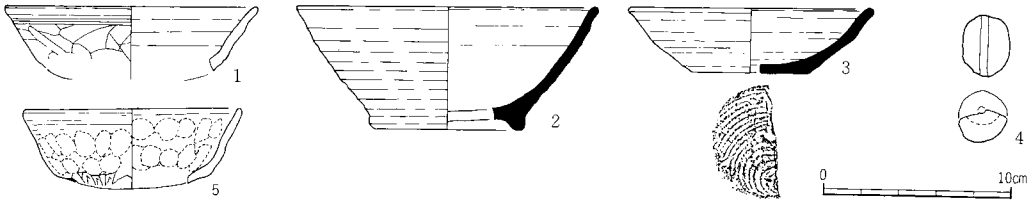
出土遺物　遺物は総数1,241点出土した。大半は土師器及び須恵器の小破片であったが



住居址
1層　褐色土層。
2層　暗褐色土層。
3層　黒褐色土層。
4層　黒褐色土層。
5層　黒褐色土層。

カマド
1層　暗褐色土層　パミス、焼土1％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス1％、焼土2％含む細砂。
3層　極暗褐色土層　パミス1％、焼土5％含む細砂。
4層　黒色土層　パミス1％灰5％混入する細砂。
5層　極暗赤褐色土層　すさ混じりの焼土ブロック。
6層　暗赤褐色土層　パミス1％混入する灰層。
7層　黒褐色土層　焼土3％混入する灰。柔らかい。
8層　黒色土層　炭化物10％焼土5％混入する灰。

第42図　H－14号住居址とカマド（1/80，1/40）

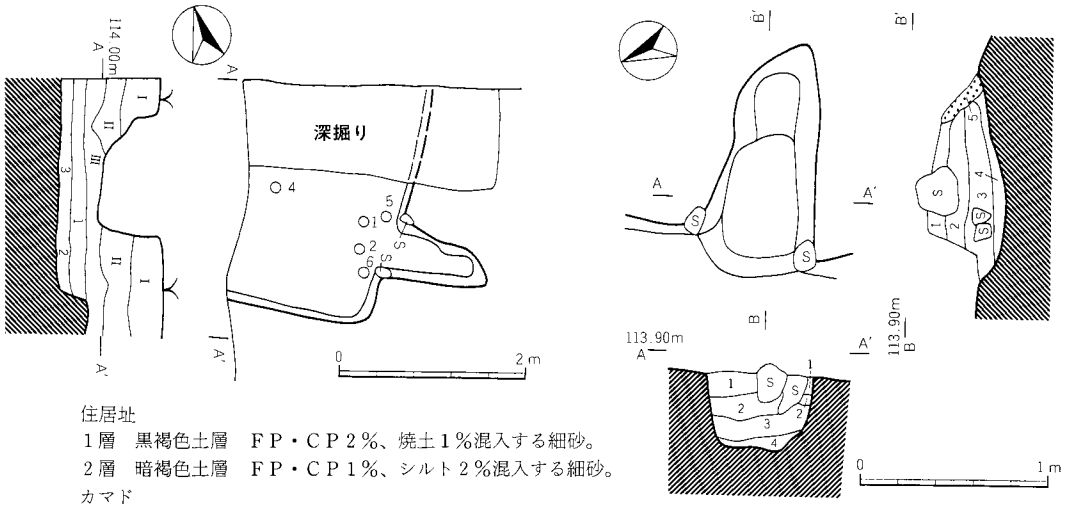


第43図　H－14号住居址出土遺物（1/4）

瓦片・スラグを含む金属類、灰釉陶器小破片なども数点出土した。図示できた5点はいずれも住居西壁中央部の床面付近で出土したもので、他の小破片がランダムに出土するのと異なっていた。1・5は土師器の坏で粘土円板を指でおこして口縁部をつくるもので、全体に指頭圧痕が明瞭に残っている。2は体部に僅かな膨らみを持つ深身の須恵器高台付椀で、高台は開いて付く。3は須恵器右回転ロクロ使用糸切り未調整の坏で、体部は中位に膨らみをもち反り気味に外反する。4は土錘で約半分を欠損する。外面に赤彩された痕跡を持つ。

全体に9世紀第II～III四半期に比定されよう。

H－15号住居址



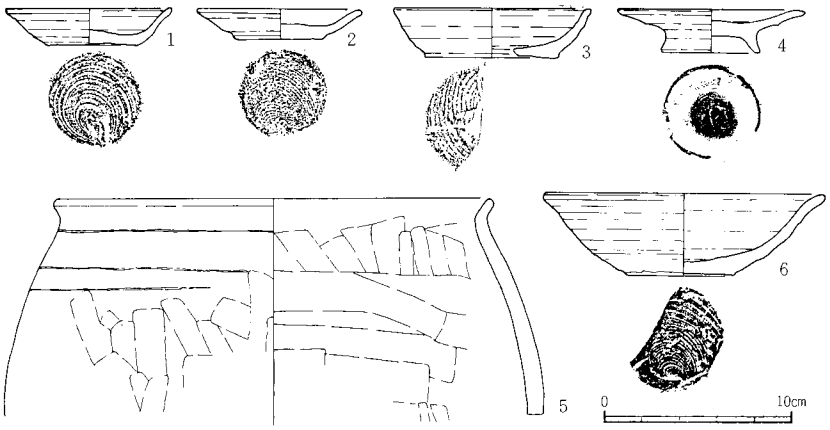
住居址
1層　黒褐色土層　FP・CP2%、焼土1%混入する細砂。
2層　暗褐色土層　FP・CP1%、シルト2%混入する細砂。
カマド
1層　暗褐色土層　焼土3%混入する細砂。
2層　黒褐色土層　焼土5%混入する細砂。
3層　黒褐色土層　焼土1%混入する細砂。
4層　黒褐色土層　焼土2%含む灰。やわらかい。
5層　焼土。

第44図　H－15号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　9トレンチ北西部に位置する。H—21・22・23・26・29・36と重複し、そのすべてより新しいがカマド煙道部はD—17によって破壊されている。平面形は方形と推定され、N—117°—Eに主軸方位をとる。カマドは東壁南寄りに付いていた。壁高は確認面で32cmを測り周溝はない。床面は厚さ数cmで地山ブロックを混入する黒色土を貼床していた。

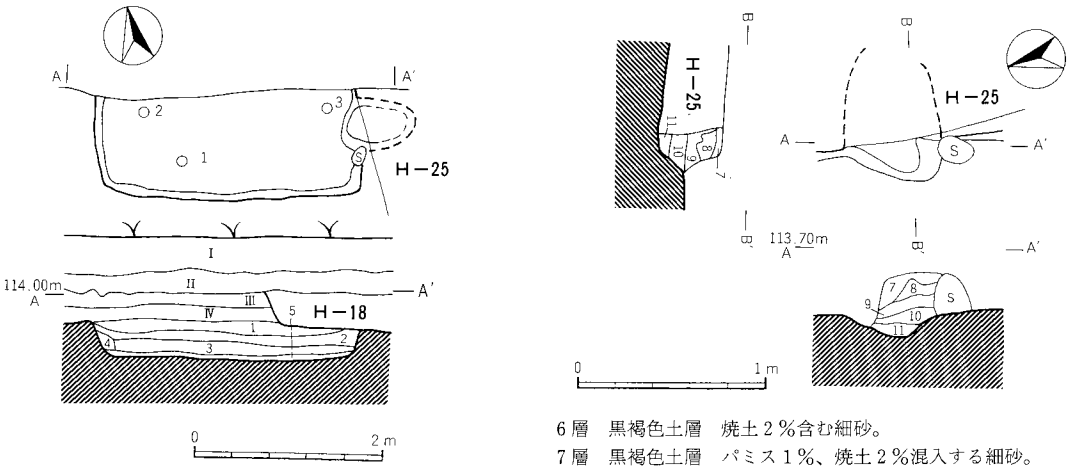
カマド　残存長110cm、焚口幅72cmで主軸をN－92°－Eにとる。両袖石に前橋台地産出の凝灰岩質切石を用いている。

出土遺物　遺物はカマド付近の床面直上で良好な物を多数出土した。総数348点である。1のカワラケ皿は酸化焔焼成底部右回転糸切り未調整である。2は1に比して浅身で大きく外反する。底部糸切り未調整である。3はやや深身で口径も大きい。4は高台付の皿で、酸化焔焼成による非常に浅身の器形で托の可能性(註5)を持つ。5は土師器甕の所謂土釜と呼ばれている物で、下半部の大半を欠損する。内外面ともにナデ調整で胎土は粗く小砂粒を多量に混入する。6の須恵器坏は酸化焔焼成で口径が大きい。底部右回転糸切り未調整である。遺構は10世紀後半代のH—21を壊しており、出土遺物の特徴からみて11世紀前半代に位置付けたい。



第45図　H－15号住居址出土遺物（1/4）

H－16号住居址



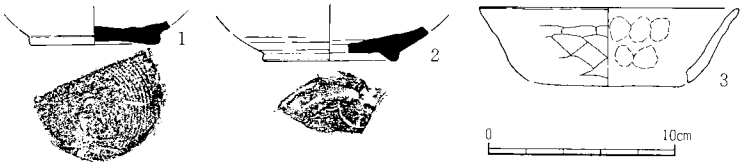
1層　暗褐色土層　FP・CP2%、カーボン1%混入する細砂。
2層　褐色土層　FP・CP2%、焼土1%混入する細砂。
3層　黒褐色土層　FP・CP3%、焼土5%混入する細砂。
4層　黒褐色土層　FP・CP5%、焼土1%混入する細砂。
5層　暗褐色土層　FP、CP3%、焼土1%混入する細砂。
6層　黒褐色土層　焼土2%含む細砂。
7層　黒褐色土層　パミス1%、焼土2%混入する細砂。
8層　暗褐色土層　パミス2%、カーボン1%混入する細砂
9層　黒褐色土層　カーボンを含む灰層。焼土5%含む。柔かくしまりなし。
10層　極暗褐色土層　パミス2%、灰5%混入する細砂。
11層　黒褐色土層　カーボン、焼土1%、シルトφ3cmを混入する細砂。

第46図　H－16号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　9トレンチ北端のA－3グリッドに所在する。遺構はH－18・21、D－40より古く、H－26・36より新しい。平面形は北半分が調査区域外であるが方形と推定され、東壁南端にカマドを付す。主軸方位をN－100°－Wにとり、東西軸長2.8mを測る。壁高は西壁確認面が40cmで周溝は無い。覆土は大きく4層に分層される。

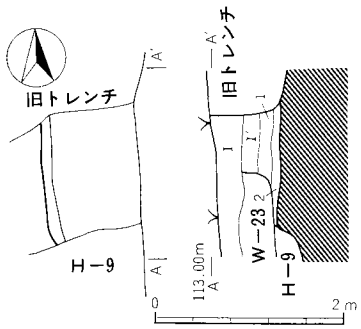
カマド　焚口付近を僅かに残してH－25に破壊されている。袖は右袖のみ転石利用の袖石が残存していたが左袖は既に抜かれていた。焚口の幅50cmで、壁は殆ど焼けていない。

出土遺物　遺物は総数250点で分布は住居全域にわたっているが接合されたものは僅かであった。1は還元焰焼成の須恵器坏底部であるが製作技法が特異である。粘土円板状の底部に体部を貼り付けナデで接合しているもので、薮田遺跡の報告(註6)で指摘している「底部円柱づくり」の技法と思われる。底部右回転ロクロ糸切り未調整で、接合部を剝いで観察の結果、内面にはネガティブの左回転糸切り痕が明瞭に残っていた。2は須恵器の高台埦で、上半部を欠損する。還元焰焼成でやや外方に開いた弛れた高台を持つ。胎土には雲母粒を多量に混入する。3は底部を欠損する土師器の坏で、体部下半部にヘラケズリ、上半部は内外面ともに指頭圧痕を施す。胎土に金雲母を多量に混入する。本遺構の年代観は10世紀後半代のH－21より古く、底部の円柱づくり技法は本県では9世紀中頃から認められており、本品もそれ以降の所産と考えられるが、高台埦の高台部の形が崩れていることから若干年代観を下げて考えたい。9世紀後半～10世紀前半代に比定されよう。



第47図　H－16号住居址出土遺物（1/4）

H－17号住居址



1層　黒褐色土層　CP 3%、ローム2%混入する細砂。
2層　黒褐色土層　CP 1%、ローム3%、焼土1%混入する細砂。若干しまる。

第48図　H－17号住居址（1/80）

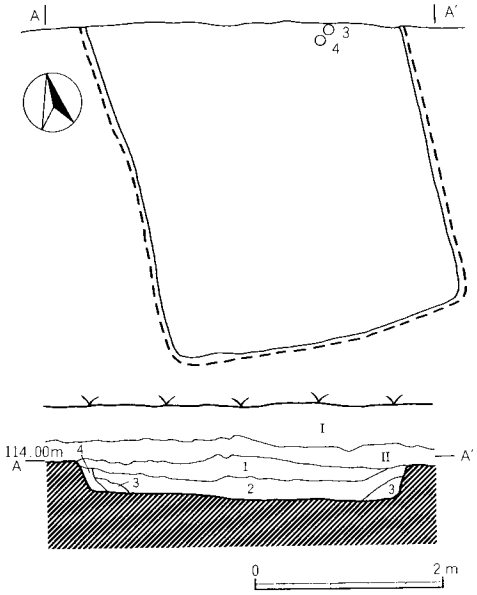
遺構　9トレンチ東端に位置する。住居北の東側大半を調査区域外におき、北側及び南側はH－5・9によって切られている。故に平面形は不明で住居方位は西壁の残存部分でN－1°－Wを測り、確認壁高15cmであった。床面は本遺跡のこの時期の遺構に共通しており、後世の遺構よりも高い位置に築かれていた。部分的に地山ブロックとCPを混入する厚さ数cmの黒色土を貼床して堅緻な面を造っており、周溝・柱穴等は確認されなかった。

出土遺物　遺物は総数で9点出土しているが、攪乱による中世陶器片等を含んでおり、僅かに古式土師器小破片が認められた。年代はH－9より古いがCP降下以降であるので本遺構も4世紀後半代に位置付けたい。

H－18号住居址

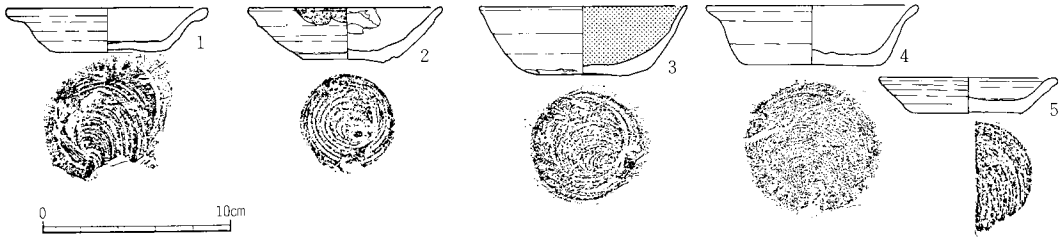
遺構　9トレンチ北側中央部に位置する。切り合いはH－16・25・26・35・36よりも新しくD－9よりも古い。平面形は南北に長い方形を呈し南壁で軸長3.2m、N－92°－Eの方位を測る。カマド位置は東壁に付くと推定され、中央より北側に寄っていると考えられる。壁高は32cmで周溝は確認されなかった。

出土遺物　遺物は総数1,095点出土している。大半は酸化焔焼成須恵器かカワラケ類の小破片であったが、瓦類・スラグを含む金属類も数点出土している。図示できたものはいずれもカワラケ類の皿で、底部右回転ロクロ使用糸切り未調整であった。口縁形態や器高等で若干のバリエーションを持つようであるが、口縁部に油煙の付着した2の例から機能的には灯明皿として用いられたものと推定したい。年代については、10世紀後半代のH－35より新しいことと、出土遺物のカワラケ類のセットからみて11世紀前半代に比定したい。



1層　暗褐色土層　焼土、カーボン、BP2％含む細砂。
2層　暗褐色土層　FP、焼土3％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　FP1％、焼土2％混入する細砂。
4層　黒褐色土層　FP、CP1％、焼土2％含む細砂。

第49図　H－18号住居址（1/80）

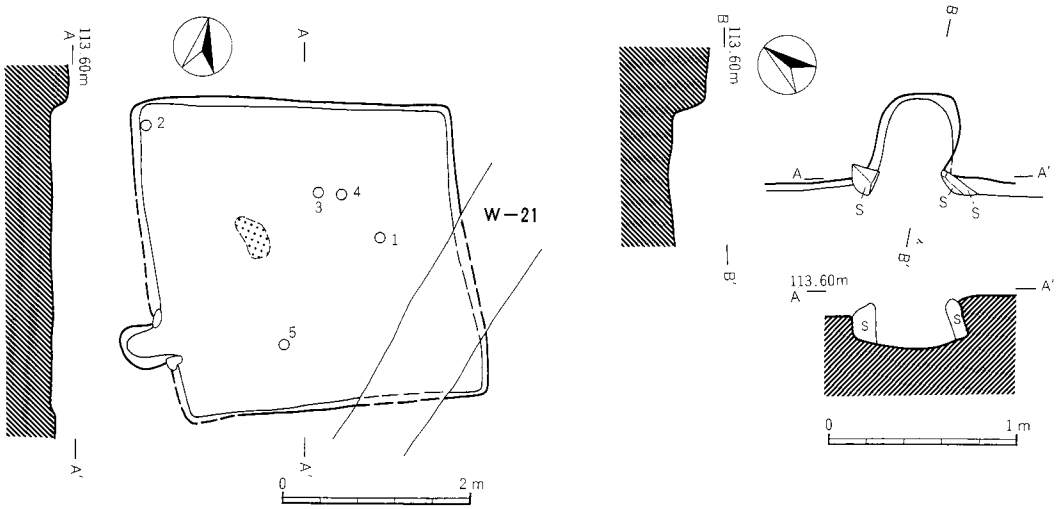


第50図　H－18号住居址出土遺物（1/4）

H－19号住居址

遺構　9トレンチ北端中央部に位置する。重複関係はH－11・12・25・35・W－21に切られ、H－28を切って構築されていた。平面形は西壁・北壁のやや長い歪んだ方形で西壁にカマドを付していた。主軸方位N－109°－Wにとり、東西軸長3.4m、壁高は北壁確認面で20cmを測る。周溝・ピットはなく床面はCP混りの黒褐色土を貼床していた。

カマド　西壁の南寄りに構築されており、凝灰岩質の切石を両袖石に据えて粘土で竈壁を構築

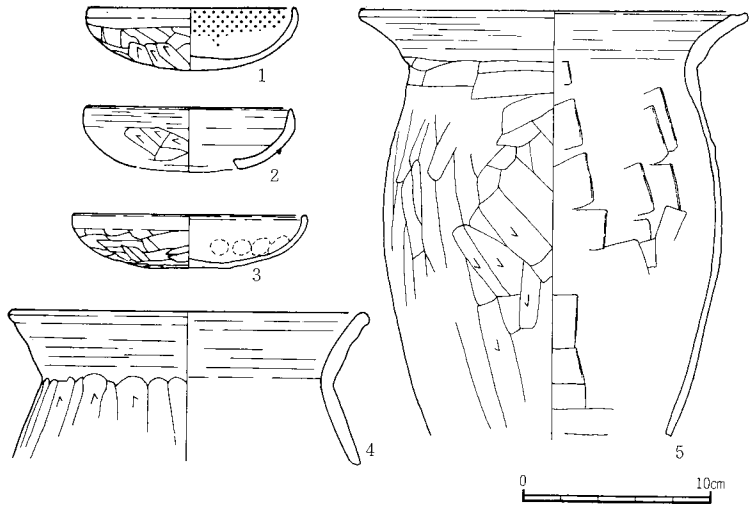


第51図　H－19号住居址とカマド（1/80，1/40）

していた。焼けは弱く壁面以外には殆ど焼土は認められなかった。残存長54cm、焚口幅34cmを測る。主軸方位はN－115°－Wにとり、煙道の立ち上がり角度は68°であった。

遺物出土状態　遺物は総数で379点出土した。そのうちの14％にあたる53点が鉄滓・銅滓を含む金属製品であったことは特筆されよう。床面中央部に若干の焼土は認められ、フイゴの小破片は1点のみ出土しているが精錬の遺構を推定するまでには至らなかった。又、出土遺物の6％にあたる23点に滑石の原石が含まれており、製品は皆無であったが遺構の性格を考える上で重要な問題を提起している。出土状況は土器・金属・原石ともに破棄された様相を示していた。

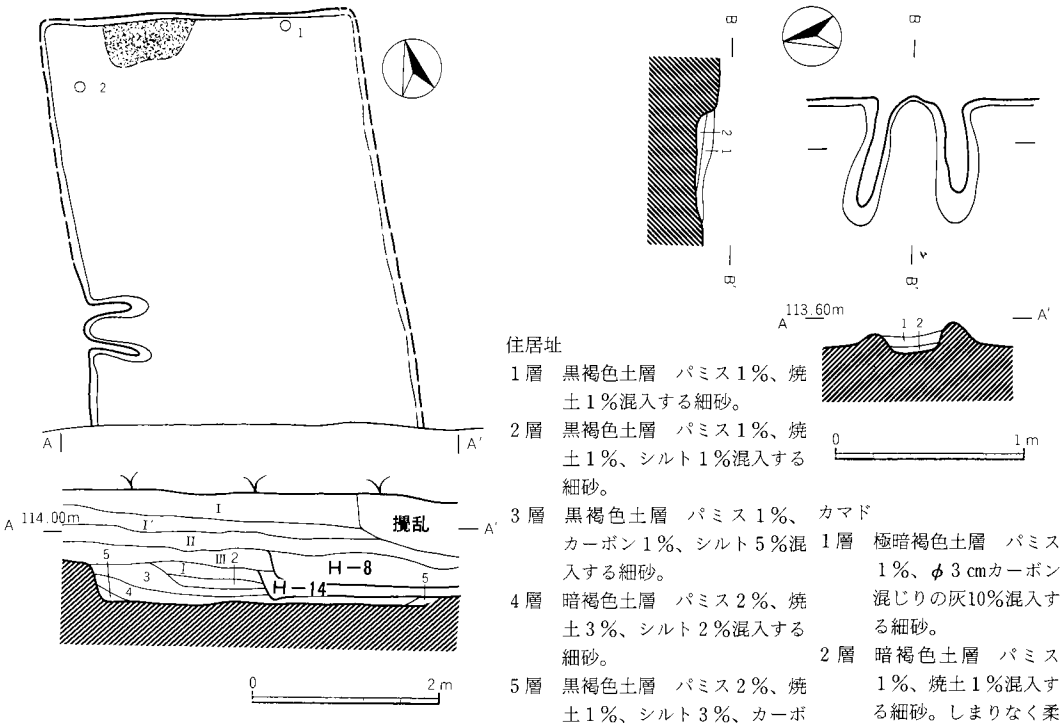
出土遺物　これらの遺物中土器のみを図示することができた。1は土師器の坏で丸底で体部が内湾する。内面に赤色顔料の付着が認められる。2は底部を欠損するが口縁部はほぼ直立する。



第52図　H－19号住居址出土遺物（1/4）

3は土師器の盤で、やや平底気味の底部から外反する体部に至り、口縁部はやや直立気味に反る。4・5はいずれも土師器の甕で、下半部を欠損するが、かなり長胴化したものと推定される。時期は外稜を残すものはないが、7世紀後半代第III～IV四半世紀に位置付けられよう。

H－20号住居址



住居址

1層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。

2層　黒褐色土層　パミス1％、焼土1％、シルト1％混入する細砂。

3層　黒褐色土層　パミス1％、カーボン1％、シルト5％混入する細砂。

4層　暗褐色土層　パミス2％、焼土3％、シルト2％混入する細砂。

5層　黒褐色土層　パミス2％、焼土1％、シルト3％、カーボン2％混入する細砂。粘性あり。

カマド

1層　極暗褐色土層　パミス1％、φ3cmカーボン混じりの灰10％混入する細砂。

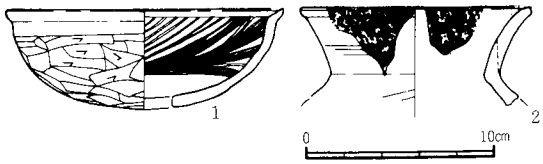
2層　暗褐色土層　パミス1％、焼土1％混入する細砂。しまりなく柔らかい。

第53図　H－20号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　9トレンチ南端B－3・C－3グリッドに所在する。重複関係は、H－4・8・14・21・W－22・O－8・11・12・18より古く、H－23・24・26よりも新しい。平面形は確認状態では南北に長い方形を示しており、長軸である西壁にカマドを付けている。但し東壁は殆ど推定線であり、東側にのびる可能性もある。主軸方位はN－89°－Wで、壁高はトレンチ南壁で44cmを測り、周溝は確認されていない。床面は若干貼床が施されていた。

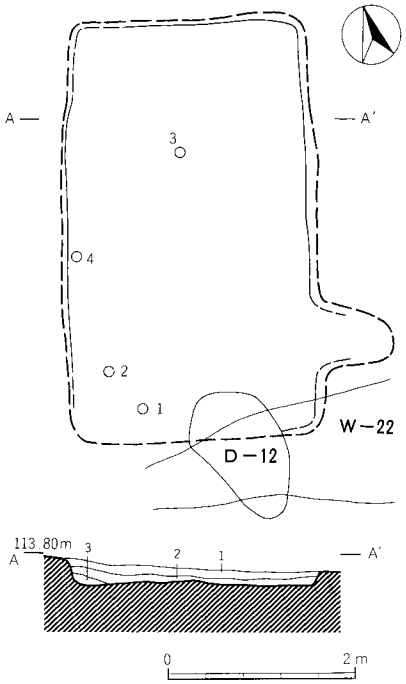
カマド　西壁中央よりやや南側に位置する。焼けは弱く遺存状況は良好である。規模は残存長68cm、袖部幅42cmで主軸方位をN－100°－Eにとる。煙道部の立ち上がり角度は63°で両袖は粘土を固めて構築されていた。天井部は崩落していると推定されるが焼土ブロックは殆ど出ない。

出土遺物　遺物は総数526点出土している。それらの大半は土師器の小破片であった。1は土師器内斜口縁坏で底部を若干欠損し、内面放射状暗文を施す。2は土師器壺の口縁部で下半部大半を欠損する。内外面ともに二次焼成を受ける。遺構の年代はH－23・24より新しいことと遺物の編年観からみて6世紀初頭頃に比定されよう。



第54図　H－20号住居址出土遺物（1/4）

H—21号住居址



1層　黒褐色土層　パミス2％、焼土1％混入する細砂。若干しまる。
2層　黒褐色土層　パミス、焼土、カーボン、ローム各1％混入する細砂。
3層　黒褐色土層　焼土、カーボン1％、ローム2％混入する細砂。

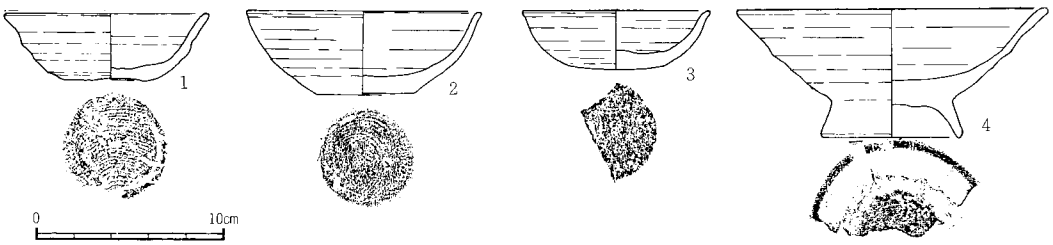
第55図　H－21号住居址（1/80）

遺構　9トレンチ北西部に位置する。重複関係はH—4・16・20・22・23・26・29・36より新しく、H—15・D—8・11・12・17・18・40よりも古い。平面形は南北方向に長い方形で、カマドは破壊されていたが東壁に持つと推定される。主軸方位はN—79°—Wで壁高は西壁確認面で28cmを測る。

遺物出土状態　遺物は総数で325点出土した。その大半は酸化焔焼成の須恵器小破片であるが、僅かに灰釉陶器片、鉄器片等も出土している。

出土遺物　1は酸化焔焼成で橙色を呈す須恵器坏で底部右回転ロクロ糸切り未調整、体部は直線的に外反しロクロが顕著に残る。2・3はともに浅黄橙色を呈す酸化焔焼成須恵器坏である。体部が丸味を帯び口縁で小さく外反する。4は酸化焔焼成灰白色を呈す須恵器足高高台埦で半分近くを欠損する。右回転ロクロ使用回転ナデ調整による。底部はロクロ痕が明瞭で胴中位に若干の膨らみを持つ、

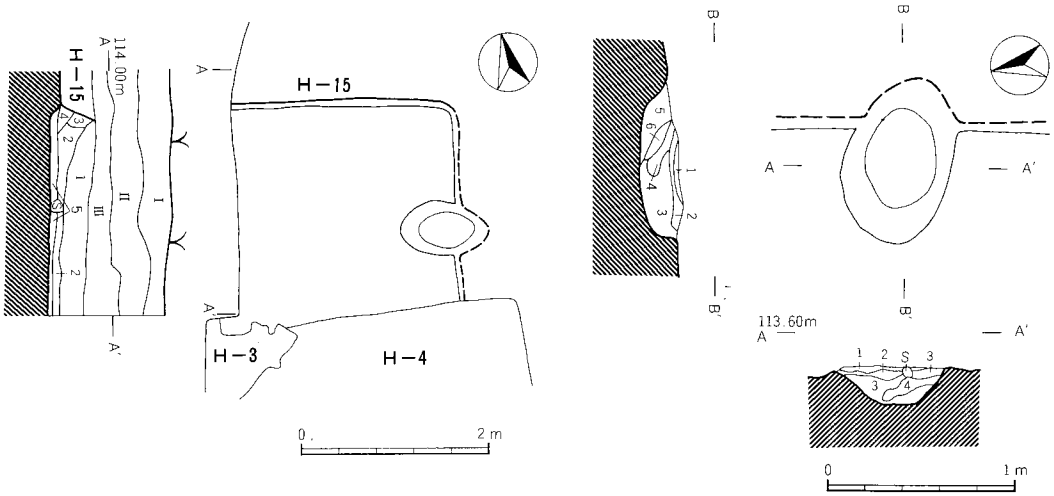
年代観はH—15に先行し、足高高台埦の出土から10世紀後半代に比定されよう。



第56図　H－21号住居址出土遺物（1/4）

H—22号住居址

遺構　9トレンチ西壁中央部B—2グリッドに位置する。遺存状況は悪く、西壁を調査区域外におき、他をH—3・4・15・21・D—4・55により破壊されていた。僅かにH—21床面下東壁下部が残存しておりカマド下半が調査できた。遺構はH—23・26・29の廃棄後構築されている。



住居址
1層　暗褐色土層　パミス２％、焼土１％混入する細砂。
2層　暗褐色土層　パミス１％、焼土１％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス２％、焼土１％混入する細砂。
4層　暗褐色土層　パミス１％、焼土１％混入する細砂。
5層　暗褐色土層　パミス３％、シルト３％混入する細砂。

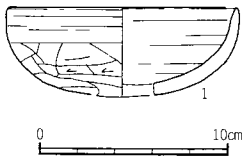
カマド
1層　黒褐色土層　パミス１％、粘土５％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス１％、焼土１％混入する細砂。
3層　黒褐色土層　パミス２％、焼土１％混入する細砂。
4層　褐色土層　パミス１％、焼土30％混入する細砂。
5層　黒褐色土層　パミス１％、焼土１％混入する細砂。
6層　黄褐色土層　粘土、焼土１％含む。

第57図　Ｈ－22号住居址とカマド（1/80，1/40）

平面形は方形で、主軸方位をＮ―104―Ｅにとる。壁高は11cmで周溝・柱穴は検出されなかった。

カマド　東壁中央部に付される。上半をＨ―21により破壊され、カマド下部のみ調査できた。袖はすでに削平され痕跡すら確認できなかった。残存長88cm、最大幅56cmで、煙道部の立ち上がり角度40°を測る。焼けは弱く構築材には白色粘土を用いていた。

出土遺物　遺物は総数99点出土した。その大半は土師器の小破片であったが、調査しえたのが僅かな層位であり、接合されたものは殆どなかった。１は土師器の素口縁で、丸底、半球形を呈す。口縁部はほぼ直立し、ヨコナデを施す。体部は外面ヘラケズリ、内面ナデ調整で仕上げる。年代は６世紀初頭のＨ―23・29を壊しており、鬼高期初頭の遺物を出土することから６世紀の前半代で、Ｈ―23・29と大差ない時期の所産と考えられる。

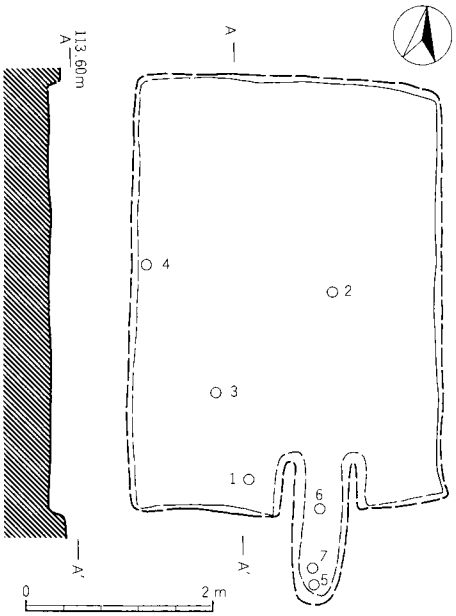


第58図　Ｈ－22号住居址出土遺物（1/4）

Ｈ―23号住居址

遺構　９トレンチ西側中央部に位置する。重複関係はＨ―26より新しく、Ｈ―４・15・20・21・22・29・Ｗ―22・Ｄ―４・８・11・12・17・18・55よりも古い。平面形は南北に長い方形で、主軸方位Ｎ―175°―Ｅ、東西3.25m、南北4.6mの規模を有する。カマドは南壁中央部に付されていた。壁高は北壁確認面で12cmを測り、周溝・柱穴等は検出されなかった。

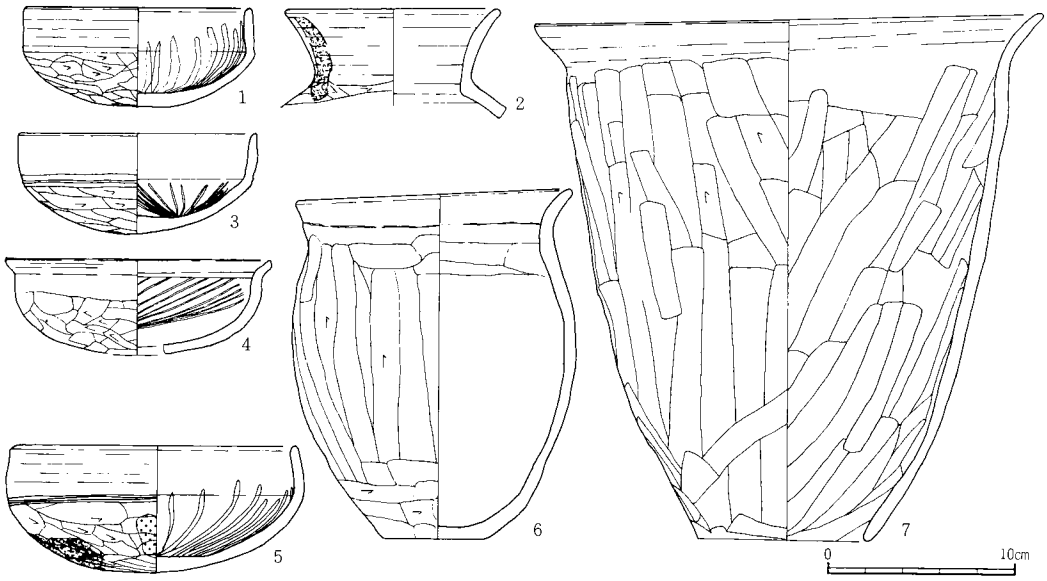
カマド　Ｈ―20床面により殆ど破壊され、僅かにカマド掘り方から範囲を推定しうるにとど



第59図　H－23号住居址（1/80）

まった。焼けは弱く袖も平夷されていたが、基底面からまとまった土器片の出土があり、一部は構築材として用いられていた可能性がある。

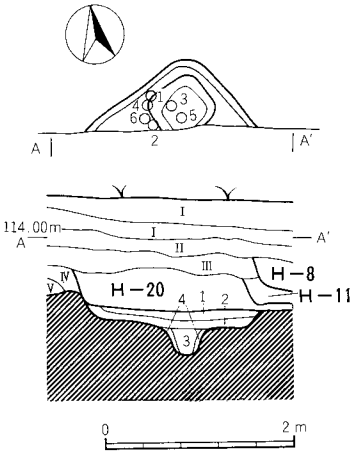
出土遺物　遺物は総数で210点出土した。殆どが土師器の小破片で接合されたものは少なかった。カマド内から出土したのは5・6・7で6の小型甕は出土位置と状態からカマド支柱と推定される。器表面には焼けた粘土と二次焼成が残る。7の甑は推定煙道最深部でつぶれた状態で出土した。内外面ともにヘラケズリが顕著で一部に二次焼成がある。1・3・4は模倣坏であるが、外稜が沈線状になるのを特徴とし内面にミガキが施される。2は小型の壺でH—20の出土品と類似するが別個体である。4の内斜口縁坏等からみて5世紀終末に位置付けられる。



第60図　H－23号住居址出土遺物（1/4）

H—24号住居址

遺構　9トレンチ南端のC—3グリッドに住居北西隅が僅かに検出された。確認面がH—20の床面下であり当然H—8・14にも先行する。主軸方位は北壁でN—64°—Eを測り、残高はトレンチ南壁で28cmであった。周溝・柱穴はなかったが貯蔵穴をほぼ全掘することができた。床面は若干黒色土を貼床している。カマドは調査区域外であるが、貯蔵穴の位置から見て東壁の中央よ



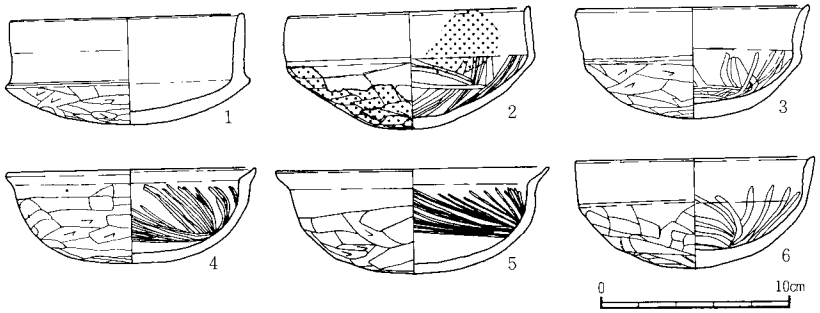
1層　黒褐色土層　パミス1％、シルト3％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス1％、カーボン1％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス2％、カーボン1％混入する細砂。
4層　黒褐色土層　パミス1％、シルト3％混入する細砂。

第61図　H－24号住居址（1/80）

りやや北側にあるものと推定される。

遺物出土状態　遺物は貯蔵穴が調査できたので面積の割には良好なものを多く出土した。総数28点で約半数は貯蔵穴内より出土している。殆どが完存していたため接合状態は明らかでない。

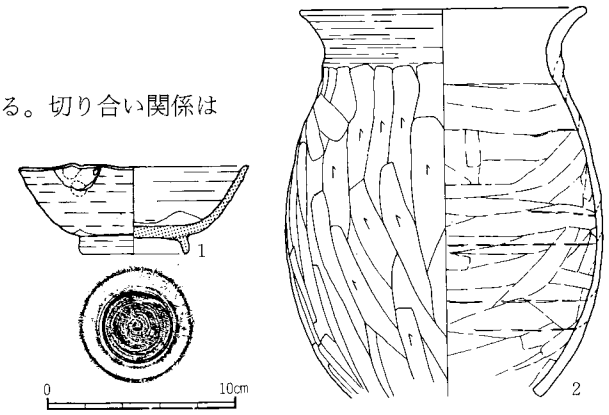
出土遺物　1は模倣坏で、丸底から極端に突出した外稜に至り口縁は直立する。口唇も面取りがされ胎土中に雲母粒を多量に混入する。2はやや尖り気味の底部から沈線状の外稜に至り、口縁をやや内傾させる模倣坏で口唇端部は丸く仕上げる。外面体部手持ちヘラケズリ、内面ミガキ、内外面一部に赤彩あり。3はやや深身の模倣坏で外稜は2条の沈線状を呈し、口縁をやや外反する。体部外面ヘラケズリ。内面はミガキによる。4は内斜口縁の坏で底部はやや平底で丸味を帯びて口縁に至る。外面は細かい単位のヘラケズリ、内面は暗文状ミガキによる。5は4より口縁部が長くやや内傾する。外面ヘラケズリ、内面は暗文状ミガキによる。6はやや深身の模倣坏で外稜は沈線状を呈す。体部ヘラケズリ、内面はミガキによる。口縁部はやや外反気味に直立する。模倣坏の出現段階のセットと考えられ、5世紀終末に比定したい。



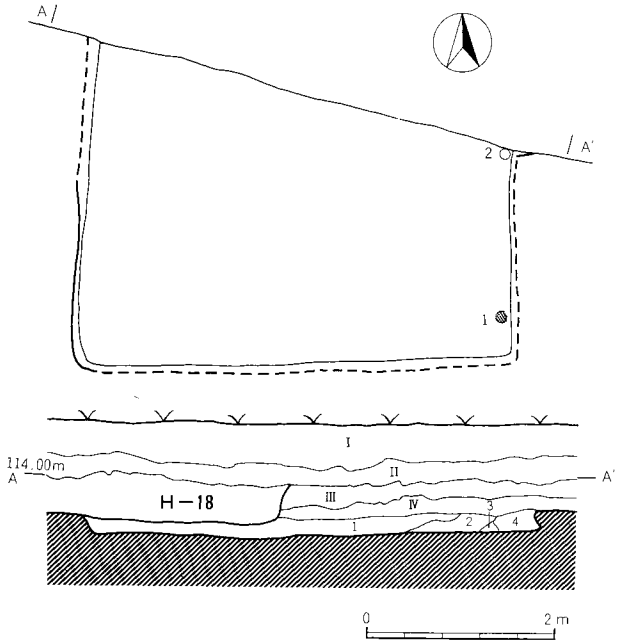
第62図　H－24号住居址出土遺物（1/4）

H－25号住居址

遺構　9トレンチ北端中央部に位置する。切り合い関係はH－12・18より古く、H－19・35よりも新しい。北半分を調査区域外におき、カマドは東壁の中央部に付き、トレンチ北壁断面に僅かに掛った。主軸方位はN－88°－Eで東西軸長4m76cm、東壁壁高20cmを測る。周溝・柱穴は確認されていない。



第63図　H－25号住居址出土遺物（1/4）



1層　黒褐色土層　ＦＰ、ＣＰ３％、焼土、カーボン１％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　ＦＰ２％、焼土１％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス１％、粘土３％、灰５％混入する細砂。
4層　オリーブ褐色土　灰混じりの粘土。若干しまり粘性大。

第64図　Ｈ－25号住居址とカマド（1/80，1/40）

カマド　東壁中央部に位置する。一部断面を調査。粘土と焼土が若干流出して検出された。

出土遺物　遺物は総数524点出土した。大半は須恵器の小破片で接合されたものは少なかった。銅滓、鉄滓、滑石原石等も出土している。又２の土師器甕はカマド付近から出土したもので、年代的にも異なり、器表面に粘土と焼土、二次焼成が認められることからカマド材として用いられていた可能性が高い。体部は全面ヘラケズリで内面はナデによる。

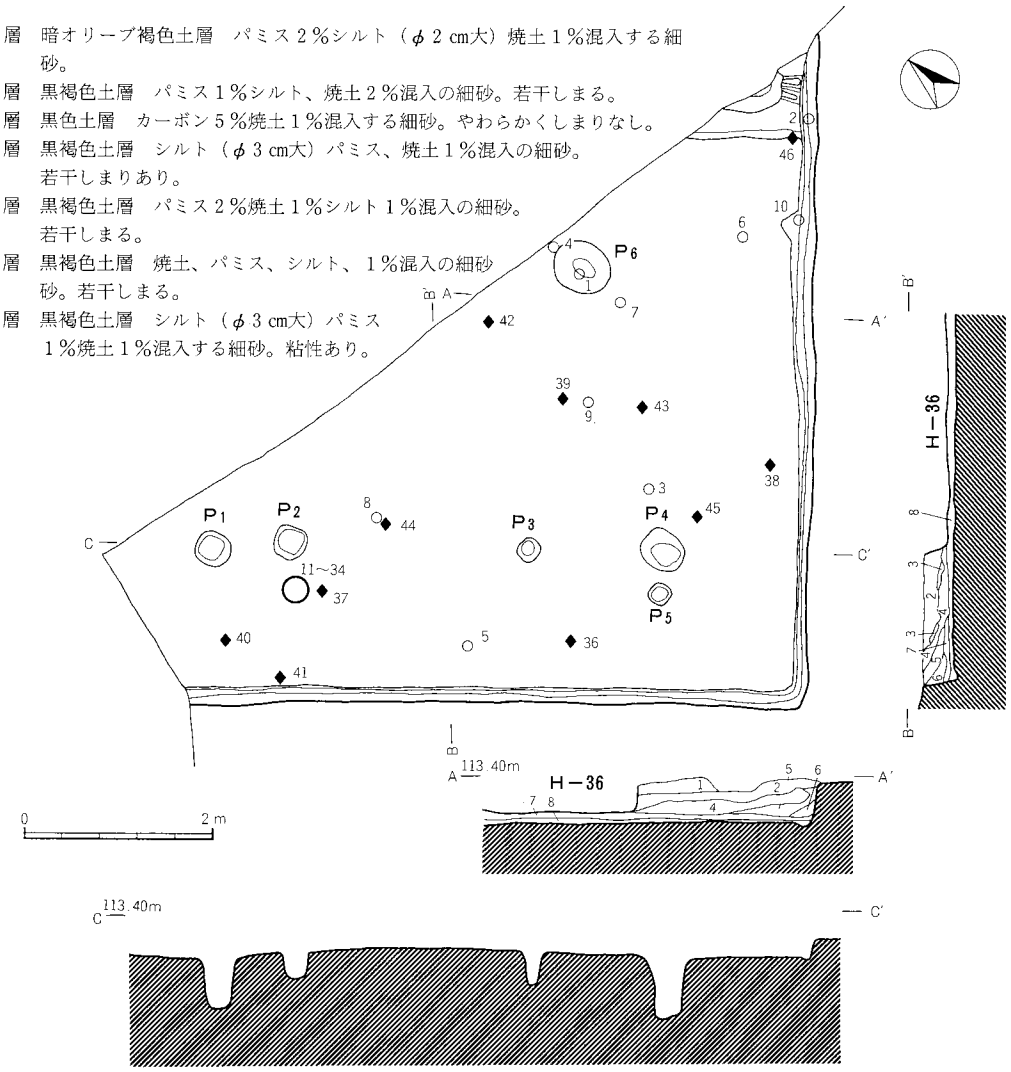
１は灰釉陶器高台埦で、比較的口縁の小さい深埦である。体部は丸味を持って外反し、口縁部は直線的に伸びる。底部は三日月状高台を付し、右回転ロクロ使用、施釉は漬け掛けによる。口縁部に焼成前の補修の痕跡があり、ロクロ整形の失敗を埋めたものか、他の要因によるかは定かでない。灰釉陶器の編年では大原２号窯に比定され10世紀前半代に位置付けられる。

Ｈ－26号住居址

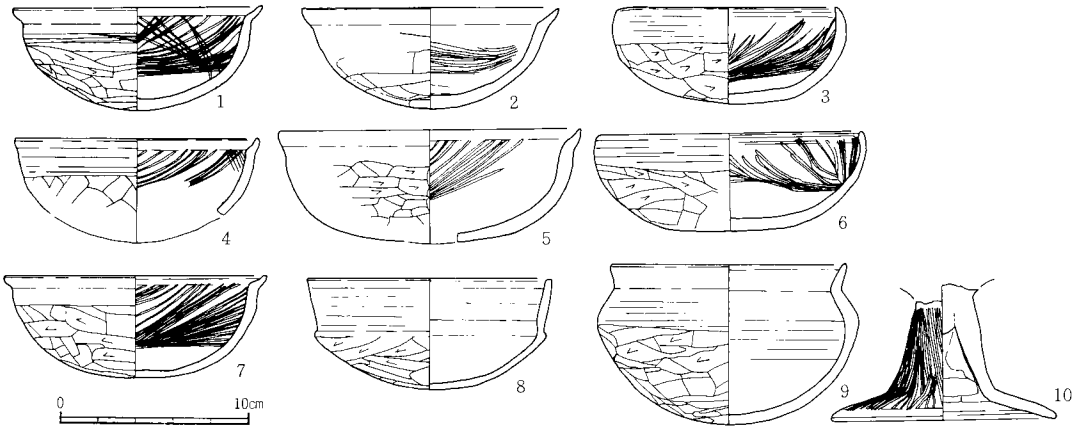
遺構　９トレンチ北西部に位置する。遺構はＨ－14・15・16・18・20・21・22・23・25・29・35・36・Ｗ－22・Ｄ－４・８・９・11・12・17・18・44と重複し、その全てよりも古い。規模は確認長、南壁で６m60cm、東壁で７m20cmを測るが、調査面積は半分以下であったと推定される。東壁北端隅の床面上に間仕切り状の高まりが検出され、カマドは東壁に付くと思われる。主軸方位は、Ｎ－139°－Ｅで、壁高は東壁中央部で44cmを測る。周溝は巡っており貼床も部分的に施されていた。ピットは６個検出され、南壁から１m60cm内側でP_1～P_4が４個並んでいた。このうち両端のP_1、P_4は主柱穴の可能性がありP_4に付属して南側には支柱穴P_5があった。P_6はこれらの並びとは不規則で掘り方形状も異なっており、柱穴ではないと考えられる。

遺物出土状態　遺物は総数で741点出土した。大半は土師器の小破片であったが、36点の滑石製品の出土は注目される。９トレンチ全般に滑石の原石の出土が際立っていたが、本遺構からの出土はなかった。又、未製品の出土も皆無であった。土師器は接合されたものは少なかったが図示できたものは床面直上での出土品が多かった。

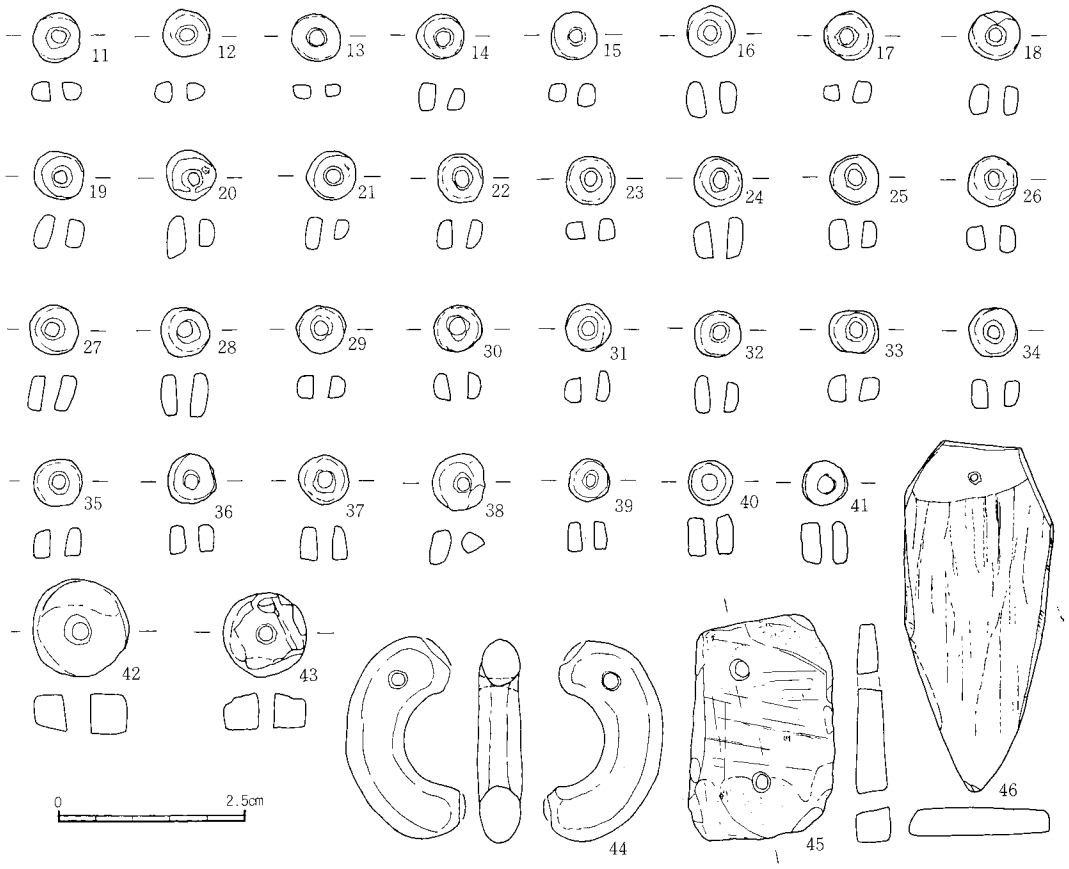
1層　暗オリーブ褐色土層　パミス２％シルト（φ２cm大）焼土１％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス１％シルト、焼土２％混入の細砂。若干しまる。
3層　黒色土層　カーボン５％焼土１％混入する細砂。やわらかくしまりなし。
4層　黒褐色土層　シルト（φ３cm大）パミス、焼土１％混入の細砂。若干しまりあり。
5層　黒褐色土層　パミス２％焼土１％シルト１％混入の細砂。若干しまる。
6層　黒褐色土層　焼土、パミス、シルト、１％混入の細砂砂。若干しまる。
7層　黒褐色土層　シルト（φ３cm大）パミス１％焼土１％混入する細砂。粘性あり。



第65図　Ｈ－26号住居址（1/80）



第66図　Ｈ－26号住居址出土遺物（1/4）

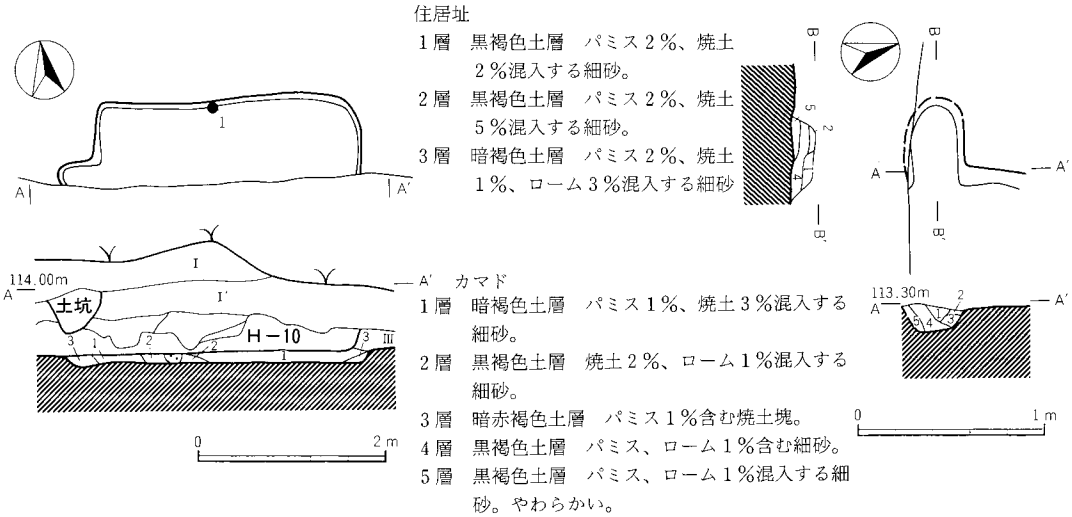


第67図　H－26号住居址出土遺物（1/1）

出土遺物　1は内斜口縁の坏で、口唇の端部は若干内湾する。外面調整は細かい単位のヘラケズリで内面は放射状の暗文状のミガキを施す。2は、口縁部を直線的に外反する内斜口縁坏で体部はヘラケズリ、内面は暗文状ミガキによる。器表面は摩耗が著しい。3は半球状を呈す素口縁坏で、口縁部は内湾する。体部外面ヘラケズリ、内面は放射状ミガキを施す。4は、下半部を欠損する内斜口縁の坏で、口縁部は立ち気味に外反する。体部外面ヘラケズリ、内面暗文状ミガキ。5は直立して尖った口縁部を持ち、体部は丸味を帯びる内斜口縁坏で外面は横方向ヘラケズリ、内面は暗文状ミガキによる。6の素口縁坏はやや扁平気味の底部から丸味を帯びて、口唇でやや内湾する。体部外面ヘラケズリ、内面は暗文状ミガキによる。7は、口縁部が短かく内湾する内斜口縁坏で、体部外面ヘラケズリ、内面は暗文状ミガキを施す。8は本遺構唯一の模倣坏で体部ヘラケズリ、口縁部はほぼ直立し端部は面取りを施す。9は土師器の短頸壺で、丸底から胴上半部に最大径を持ち、頸部でくびれてやや外反する口縁に至る器形で、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整による。10は土師器高坏の脚部で坏部を全く欠損する。外面放射状ミガキ、内面ナデ調整、坏部との接合は出枘による。時期は以上の特徴と重複関係から5世紀終末に位置付けられる。

石製模造品は小玉31点、臼玉２点、勾玉１点、剣形品１点、その他１点が出土している。小玉は西南隅床面直上で23点まとまって出土している。小玉はいずれも側面に細かい単位の縦方向削痕があり、表裏面は平滑に仕上げている。中央部には同径穿孔がある。臼玉は滑石でもやや白っぽい石材で、平滑に仕上げる。同径穿孔で側面は斜方向の研磨痕が残る。勾玉は表面、腹面ともに光沢研磨され側面には削り痕が見られる。46の剣形品は両面ともにしのぎのない扁平なもので、表裏面を研磨して平滑整形する。側面も斜方向に削痕が認められる。穿孔は両面から施されている。

Ｈ－27号住居址

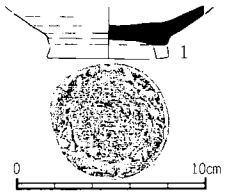


第68図　Ｈ－27号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　９トレンチ南東隅に検出された。切合いはＨ－９より新しく、Ｈ－10・13・Ｗ－20・Ｄ－18よりも古い。住居南側を調査区域外に置き、北側もＨ－10の床面下で上半部を破壊されていた。東西軸長２m80cmでＮ－80°－Ｗに方位をとる。カマドは西壁北寄りに付し、煙道先端はＨ－13によって破壊されていた。壁高はトレンチ南壁断面で12cmを測り周溝はない。

カマド　Ｈ－10の床面下で基底部から14cm残存していた。従って上部構造の殆どは明らかでない。焼けは弱く、壁面に若干焼土が認められる程度であった。残存部で壁面から36cm突出させる。袖はなく壁面には若干粘土が用いられていた。主軸方位はＮ－80°－Ｗで残存長44cm、焚口幅34cmを測る。

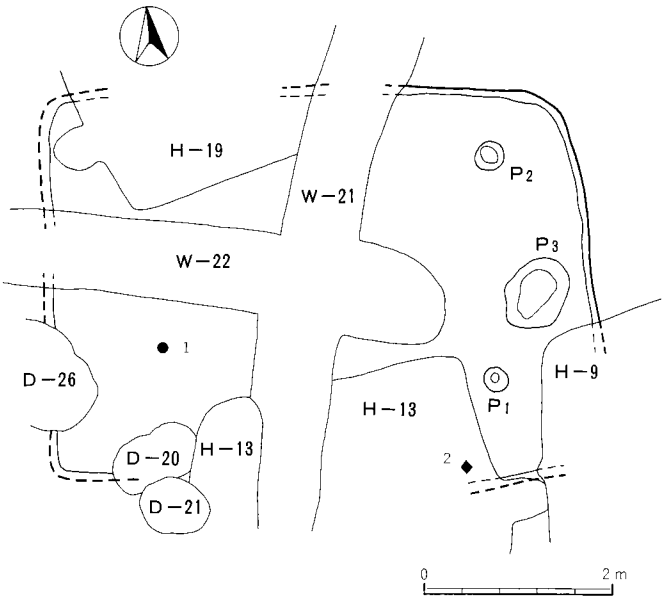
出土遺物　遺構の覆土が薄かったため遺物は良好な物はなく、破片を含めて３点のみであった。１の須恵器高台埦底部は、上半部及び高台部を欠損する。還元焔焼成で、底部右回転ロクロ使用糸切り後に高台を付す。Ｈ－10貼床土の付着が著しい。年代は10世紀後半代のＨ－13に先行する。９世紀後半代～10世紀前半代が妥当であろう。



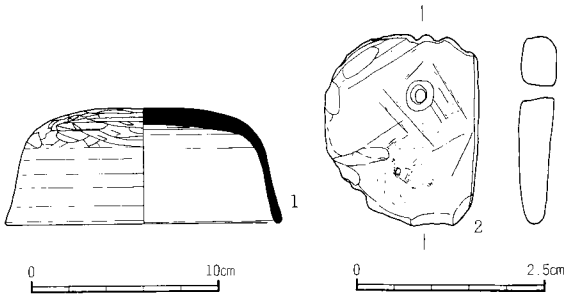
第69図　Ｈ－27号住居址出土遺物（1/4）

H—28号住居址

遺構　9トレンチ東寄りに位置する。H—9より新しくH—10・11・12・13・19・W—20・21・22・D—14・20・26・36よりも古い。東西軸長5m80cm、主軸方位をN—95°—Wにとる。平面プランは東西方向に長い方形で、カマドを東壁南寄りに付していたと推定される。壁高は東壁の一部では10cm前後を測ったが、他では殆ど残っていない。周溝はなくピットは主柱穴2、貯蔵穴1の3個確認された。P_1・P_2は主柱穴で径約30cm、深さ25cmで掘り方は地山を掘り込んでいた。P_3は貯蔵穴と推定され、深さ20cm、長径80cmを測る。このことからカマドは消滅しているが東壁に付いていたことが伺い知れた。



第70図　H－28号住居址（1/80）



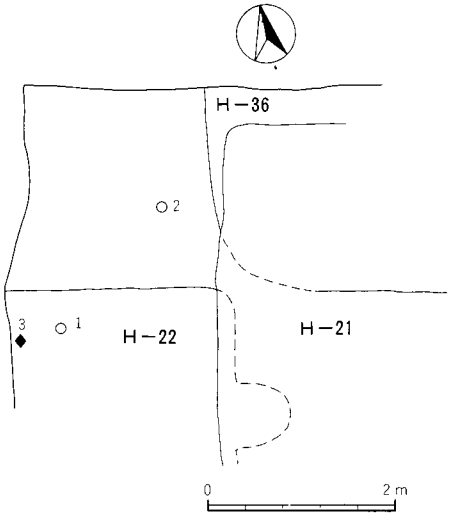
第71図　H－28号住居址出土遺物（1/4，1/1）

出土遺物　総数132点出土している。大半は須恵器か土師器の破片であったが、鉄滓・銅滓等も7点出土した。1は須恵器坏蓋で、やや扁平な天井部から丸味を帯びて口縁部に至り直線的に外反する。端部は丸く仕上げており右回転ロクロ使用による。外面天井部は手持ちヘラケズリ、口縁及び内面は回転ナデ調整による。2は石製模造品の扁平な有孔円板で滑石製、半円形を呈す。円孔は一孔で同径の片面穿孔による。表裏面は粗研磨で、側面は縦方向の研磨、一部削りが認められる。

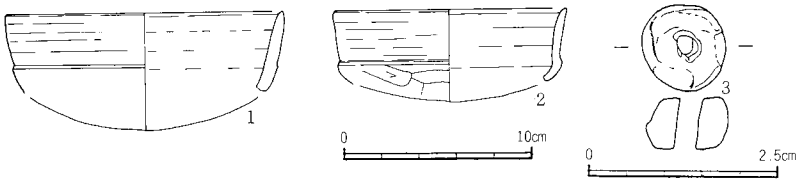
H—29号住居址

遺構　9トレンチ北西部で検出された。H—15の床面下で面的に捉えることはできたが、H—21・22・23によって削平され独自の壁高は持たなかった。従って、平面形・主軸長・方位等は一切不明で、カマド・柱穴・周溝等も確認されなかった。遺構構築面はH—26廃棄埋没後であり、明らかにそれよりは後出している。床面はCPと地山ブロックを混入する黒色土を貼床し、表面は非常に堅緻な面を作っていた。

出土遺物　遺物総数438点であったが、それらの中にはH—15・21の貼床下遺物もかなりの数混入していると思われ、明らかに時期の異なった物が含まれていた。1は土師器模倣坏の破片で、全体の10分の1程度が残存する。赤橙色を呈する脆弱な胎土で、雲母粒をかなり混入し、器表面にはH—15貼床土の付着が著しかった。体部はヘラケズリで肉厚な造りを呈し丸味を帯びる。2は土師器模倣坏で、丸底の体部から明瞭に突出して面取りをされた外稜に至り、口縁部は直立気味に外反する。体部外面ヘラケズリ。口縁部及び内面はナデ調整による。胎土中に絹雲母片岩を混入している。模倣坏は比較的初源段階の形態と思われ、切り合いからH—26とH—23の間に位置付けられ5世紀終末に比定される。



第72図　H－29号住居址（1/80）

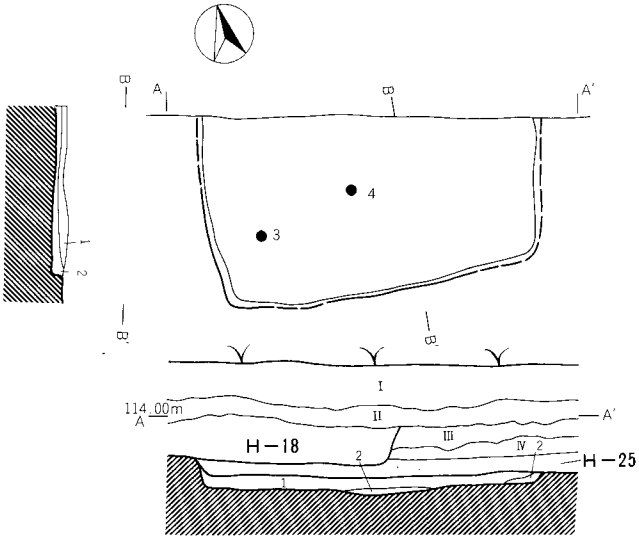


第73図　H－29号住居址出土遺物（1/4，1/1）

H—35号住居址

遺構　9トレンチ中央のA—3・4グリッドに位置する。重複関係は、H—12・18・25に先行し、H—19・26に後出する。住居北側は調査区域外でほぼ半掘できた。平面形は方形で、東西軸長3m36cm、方位は南壁でN—94°—Eを測る。壁高はトレンチ北壁で28cmで周溝・ピット・カマド等は確認されなかった。

遺物出土状態　遺物は総数で130点出土した。大半は土師器・須恵器の小破片であったがスラグ5点・滑石3点等の出土をみた。図示した3・4は床面直上の出土である。

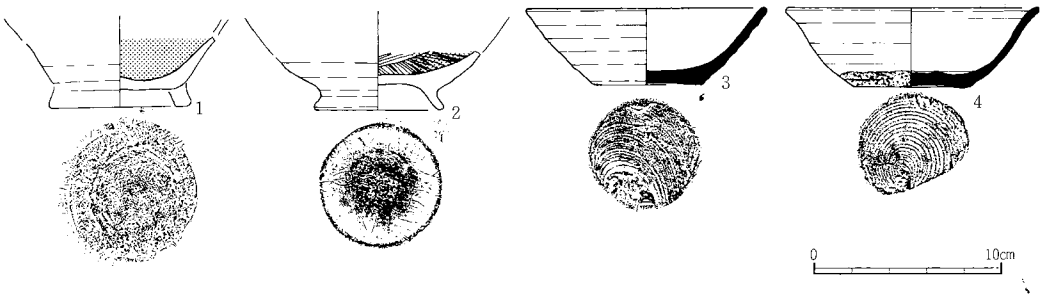


1層　暗褐色土層　パミスCP2％カーボン1％焼土1％混入の細砂固くしまる。

2層　黒褐色土層　パミス3％カーボン1％ローム3％混入する細砂。固くしまる。

第74図　H－35号住居址（1/80）

出土遺物　1は酸化焔焼成須恵器高台埦で上半部と高台を欠損する。内面は黒色処理され、底部右回転糸切り後高台部を貼り付ける。2は高台部を長く外反する酸化焔須恵器高台埦で、内面黒色処理後全面ミガキ調整を施す。比較的丸味を持った体部であるが、上部は欠損するため不明。右回転ロクロ使用による。3は須恵器の坏で底部右回転糸切り未調整、体部回転ナデ調整で体部はほぼ直線的に外反する。4は底部内外面に二次焼成を受けた須恵器の坏で、底部右回転糸切り未調整、体部はやや丸味を持ち口唇付近で外反する。年代観は切り合い関係と出土遺物から9世紀後半代と推定される。



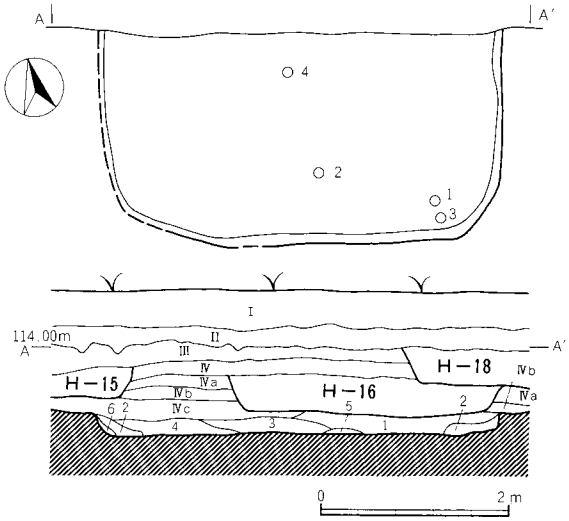
第75図　H－35号住居址出土遺物（1/4）

H－36号住居址

遺構　9トレンチ北端A－2・3グリッドに位置する。切り合いはH－15・16・18・21・23・D－9・40よりも古く、H－26より新しい。平面形は、北半分が調査区域外に出るが隅丸方形と推定され、東西軸長4m32cm、方位は南壁でN－102°－Eを指す。壁高はトレンチ北壁断面で16cmで、周溝・ピット・カマド等は検出されなかった。

遺物出土状態　遺物は総数342点出土した。大半は土師器小破片であるが、炭化した桃の種子2点が注目される。

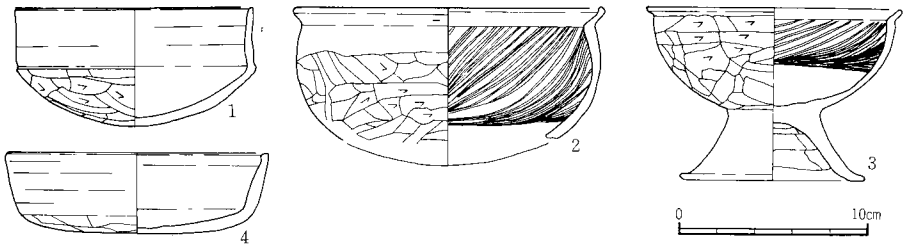
出土遺物　1は土師器の模倣坏で丸底の体部から明確な外反をもって直立し、端部でやや外反する。2は深身の内斜口縁坏で口縁部をナデることにより、端部が若干屈曲して直立気味になる。体部外



1層　黒褐色土層　シルト30%パミス2%焼土カーボン1%混入の細砂。固くしまる。
2層　黒褐色土層　シルト10%CP3%カーボン2%混入の細砂。
3層　黒褐色土層　パミス3%シルト（φ7cm）20%混入の細砂。
4層　黒褐色土層　パミス2%焼土1%カーボン3%混入の細砂。
5層　にぶい褐色土層　焼土（φ3cm大）10%混入の粘土。
6層　黒褐色土層　パミス1%シルト5%焼土1%混入の細砂。

第76図　H－36号住居址（1/80）

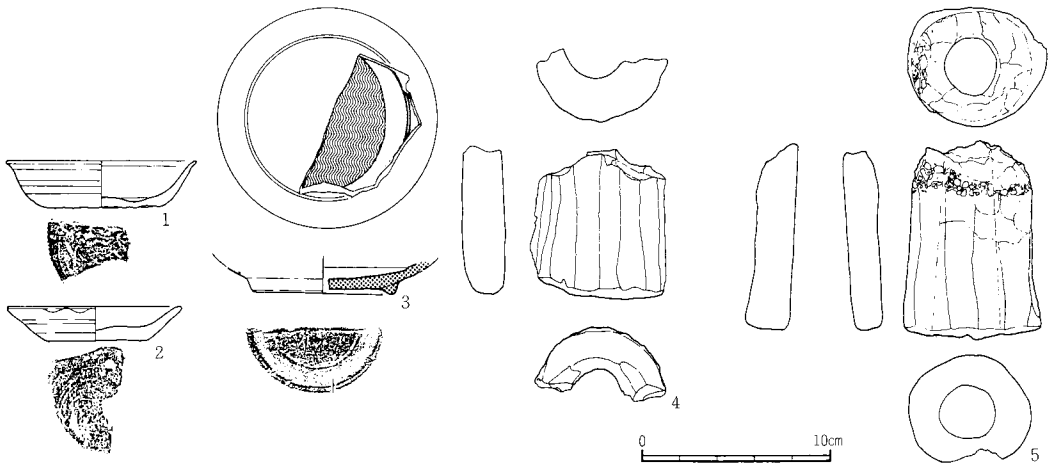
面手持ちヘラケズリ。内面放射状ミガキによる。3は内斜口縁の高坏で、体部外面ヘラケズリ、内面放射状ミガキ、脚部は外面ヨコナデ、内面ヘラケズリによる。内面の剝離著しい。4は浅身の坏でやや異形である。底部は比較的扁平で、外稜はなく丸味を帯びて口縁部に至る。口縁端部は面取りをしてしっかり作る。形態的に異形で、体部の扁平な部分と口縁端部の面取りは須恵器のTK208期坏蓋に形態的に類似するが、外稜がない点が異なる。年代的には5世紀後半代が妥当であろう。



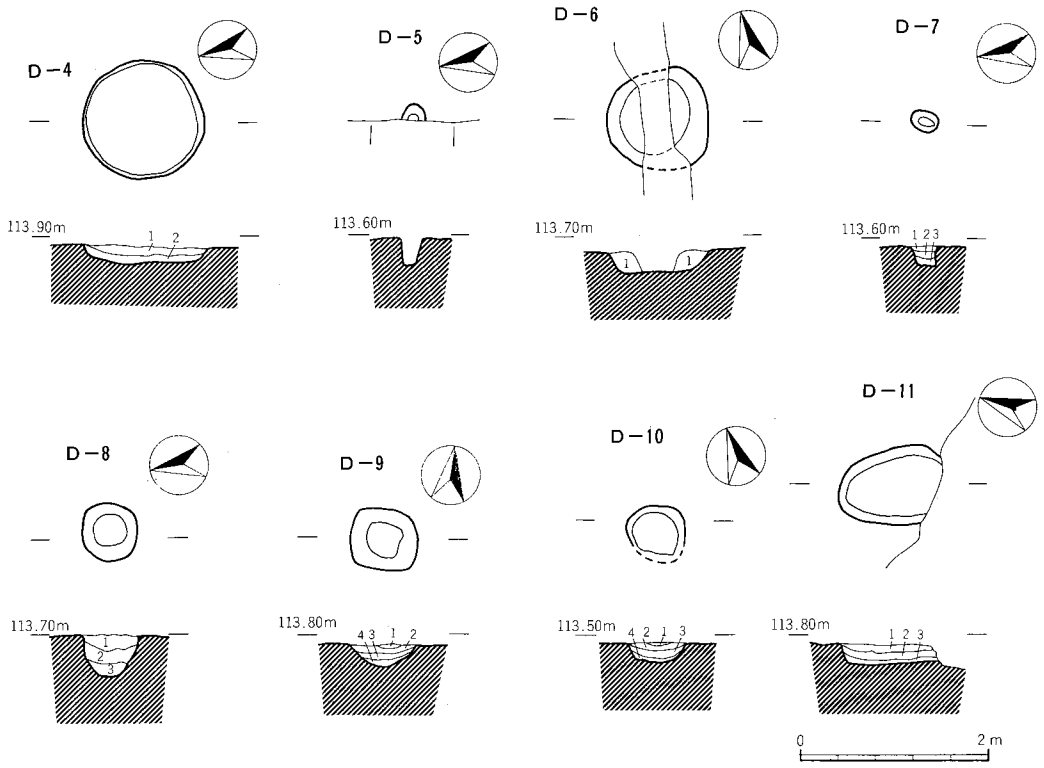
第77図　H－36号住居址出土遺物（1/4）

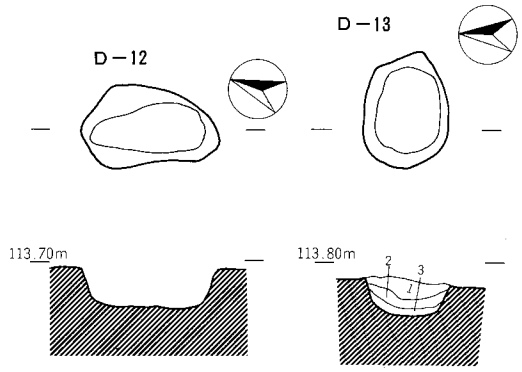
土　　坑

9トレンチ内で30基の土坑が調査された。分布は全域に広がり大型の土坑は西側のB－2・3グリッドに集中していた。形状は円形が多いが隅丸方形のD－9・15・18、楕円形のD－11・20・25・40、不整形のD－12・26・28・55等が見られた。時期的には殆どが中世以降でBP降下以降が多いと思われるが、中には、D－6・9・10・11・14・17・25・55のように古代にまで遡る物もあった。出土遺物は殆ど無いものが多く、出ても土器小破片の二次的混入が多いが、D－4出土のカワラケ皿、D－9・11出土のスラグ等は注目される。又、D－25出土の焼骨は、鹿の骨であるという鑑定結果を得た。(註7) 共伴の遺物から10世紀代と推定され、出土遺構の性格が、特に注目される所である。閑泉樋遺跡の1号溝からも同時代の鹿骨の出土があった。(註8)



第78図　9トレンチ出土遺物（1/4）





D－4
1層　黒褐色土層　二次堆積のＢＰ50%、ロームブロック72%、カーボン粒1%混入細砂。
2層　黒褐色土層　ＢＰ75%、焼土5%混入細砂。

D－6
1層　黒褐色土層　ＣＰ1%焼土1%カーボン1%混入細砂。

D－7
1層　黒褐色土層　ＢＰ（二次堆積か）50%ローム塊2%混入細砂。
2層　暗褐色土層　ＢＰ10%ローム粒1%カーボン2%混入細砂。
3層　黒褐色土層　ＢＰ5%ローム粒1%混入細砂。

D－8
1層　黒褐色土層　ＢＰ2%焼土粒1%カーボン1%混入細砂。
2層　黒褐色土層　ＢＰ1%焼土粒1%混入細砂、締まり無し。
3層　黒色土層　ＢＰ1%シルト塊1%細砂。若干締まる。

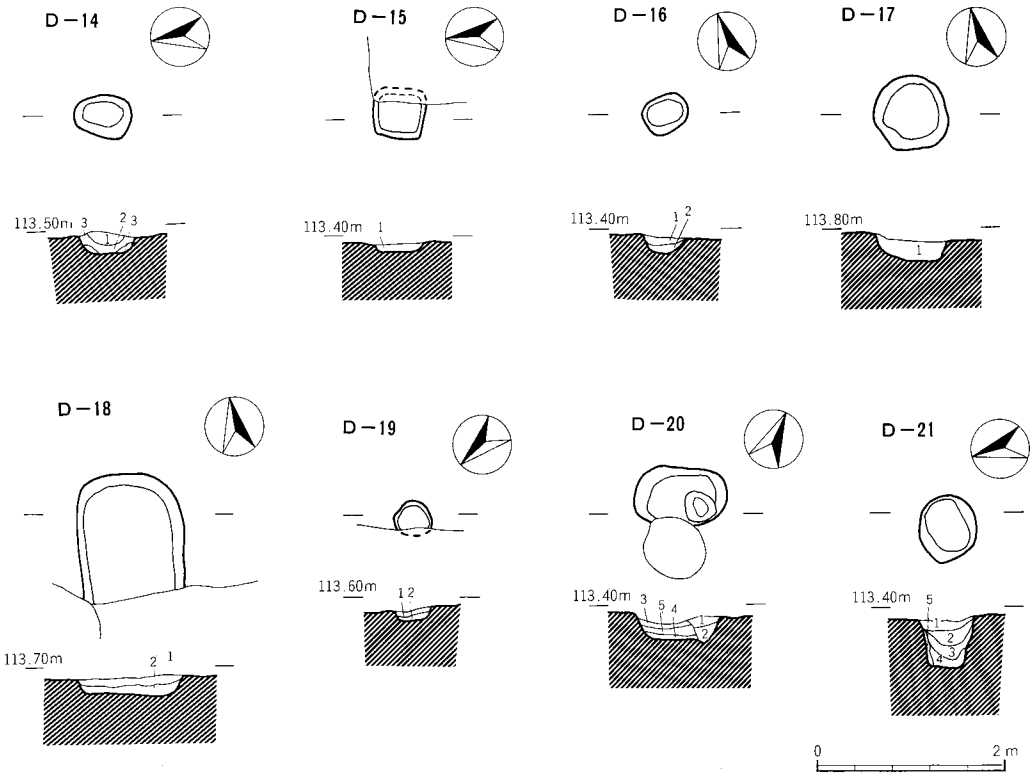
D－9
1層　黒色土層　黒色灰カーボン堆積の混土層。
2層　黒褐色土層　カーボン2%ローム粒1%パミス1%。
3層　黒褐色土層　カーボン焼土粒ローム粒混入細砂粘性大
4層　黒褐色土層　焼土粒ローム粒ＣＰ混入細砂。粘性大。

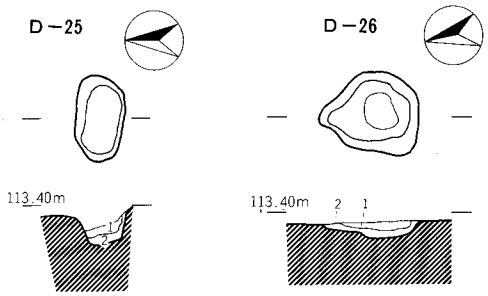
D－10
1層　黒褐色土層　カーボンＣＰ焼土粒混入細砂。粘性弱
2層　黒褐色土層　カーボンＣＰ焼土粒混入細砂。粘性弱
3層　黒褐色土層　カーボンＣＰローム粒混入細砂。固く締っている。
4層　黒色土層　ロームブロックϕ1.5cm、焼土粒1%混入するもの弱、固く締る。

D－11
1層　黒褐色土層　焼土粒2%カーボン粒1%ＣＰ1%ローム粒1%混入細砂。粘性、締りを持つ。
2層　黒褐色土層　カーボン粒3%ＣＰ1%ローム粒1%混入細砂。粘性有り。
3層　黒褐色土層、ＦＰ1%ＣＰ1%ローム粒1%カーボン1%混入細砂。締り有り。

D－13
1層　黒褐色土層　ＢＰ1%、焼土粒1%、混入する。若干締る。
2層　黒褐色土層　焼土粒1%、パミス1%、混入する細砂。若干締る。
3層　黒褐色土層　ロームブロック2%、混入する細砂。固く締る。

第79図　9トレンチの土坑A（1/80）





D－14

1層　黒色土層　　ＣＰ２％焼土粒１％混入細砂粘性有。

2層　黒褐色土層　ＣＰ１％ローム塊３％混入細砂。

3層　黒褐色土層　ＣＰ２％焼土粒１％ロームブロック２％、混入細砂。粘性有。若干締る。

D－15

1層　黒褐色土層　ＢＰを多量に混入細砂柔かい。

D－16

1層　黒褐色土層　ＢＰ２％カーボン粒２％焼土粒１％混入する細砂若干締り粘性有。

D－17

1層　暗褐色土層　ＦＰ、ＣＰ混入炭化物有粘性有。

D－18

1層　暗オリーブ褐色土層　粘性やや有、締り有。軽石粒５～７％、炭化物を２～３％含む。細砂

2層　黒褐色土層　粘性締り有。軽石粒10％焼土５％。

D－19

1層　暗オリーブ褐色土層　パミスカーボン焼土粒を混入細砂。

2層　黒褐色土層　焼土粒カーボン粒混入細砂。若干締る。

D－20

1層　黒褐色土層　焼土粒パミス混入細砂、若干締る。

2層　黒褐色土層　カーボン粒パミス焼土粒混入細砂、若干締る。

3層　黒褐色土層　パミスカーボン粒焼土粒混入細砂。固く締る。

4層　黒褐色土層　パミス焼土粒混入細砂。若干締る。

5層　褐色土層　　パミスカーボン粒混入細入細砂。締り粘性有。

D－21

1層　黒褐色土層　パミスカーボン粒焼土混入細砂。若干締る。

2層　暗褐色土層　焼土粒ローム粒パミス混入細砂。粘性少し有。

3層　黒褐色土層　カーボン粒焼土粒ローム粒混入締り粘性有。

4層　黒褐色土層　焼土粒１％含む、固く締り有。

5層　暗褐色土層　二次堆積な砂質ロームブロック状を余す。若干締り有。

D－25

1層　極暗褐色土層　焼土粒カーボン粒パミス混入細砂。粘性有。

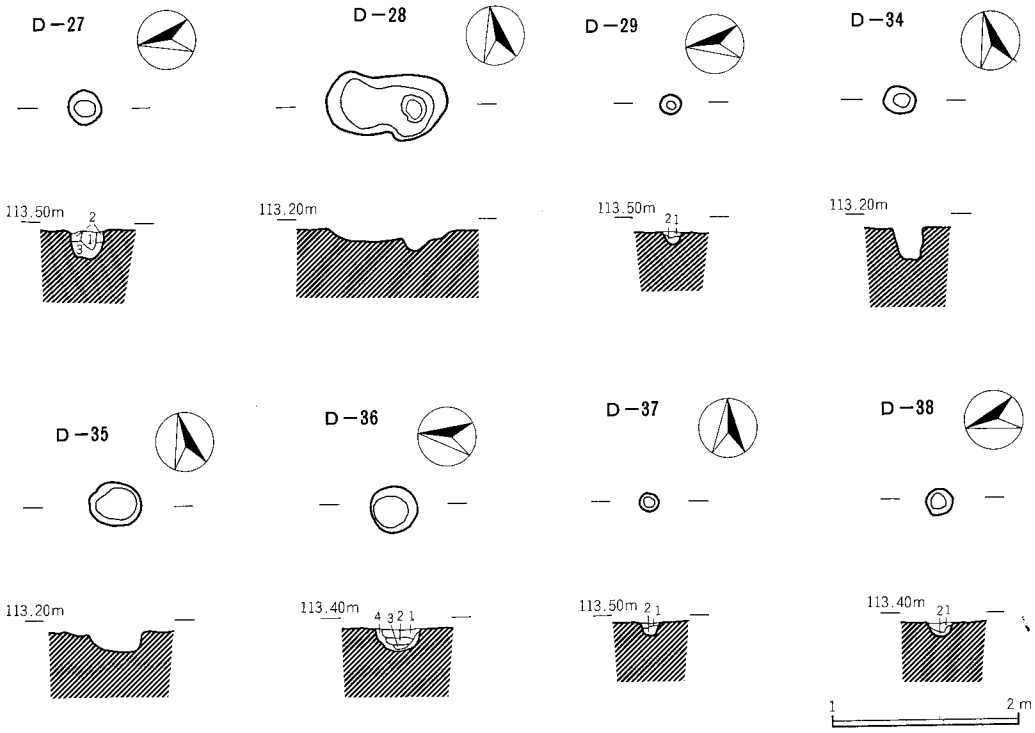
2層　黒色土層　焼土粒１％カーボン粒５％混入細砂。粘性有。

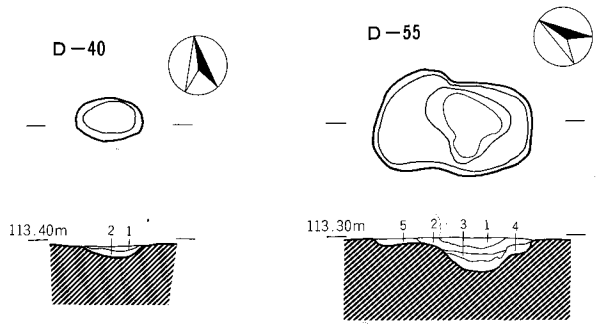
D－26

1層　黒褐色土層　焼土粒１％、カーボン粒１％、ローム粒１％を混入する細砂。若干締る。

2層　黒褐色土層　パミス２％、カーボン粒１％を混入する細砂。固く締る。

第80図　９トレンチの土坑Ｂ（1/80）





D—27

1層　黒褐色土層　ＢＰ５％、カーボン粒１％を混入する細砂。やわらかく若干粘性有り。

2層　黒褐色土層　パミス１％、カーボン粒２％を混入する細砂。若干締る。

3層　黒褐色土層　パミス１％、焼土粒１％、カーボン粒１％を混入する細砂。若干締る。

D—29

1層　黒褐色土層　パミス１％を混入する細砂。若干締る。

2層　黒褐色土層　ローム粒１％、焼土粒１％混入細砂。若干締る。

D—36

1層　暗褐色土層　パミス３％、ローム３％…焼土粒１％、小砂粒を混入する細砂。若干締る。

2層　黒褐色土層　パミス１％、焼土粒１％混入細砂。締り粘性有り

3層　にぶい黄褐色土層　ローム粒２％、パミス１％混入する細砂。

4層　黒褐色土層　パミス１％、焼土粒混入細砂。若干締り粘性有り。

D—37

1層　にぶい黄褐色土層　パミス１％、焼土１％混入する細砂、若干締る。

2層　黒褐色土層　パミス１％混入、若干締る。

D—38

1層　黒褐色土層　パミス１％混入。若干締る細砂

2層　黒褐色土層　カーボン粒１％、パミス２％混入する細砂、若干締る。

D—40

1層　黒褐色土層　パミス１％、焼土粒１％、ローム粒１％混入する細砂、若干締る。

2層　黒褐色土層　パミス３％、カーボン粒１％、焼土粒１％混入する細砂。若干締る。

D—55

1層　暗褐色土層　焼土20％、パミス３％混入する細砂。若干締り粘性有り。

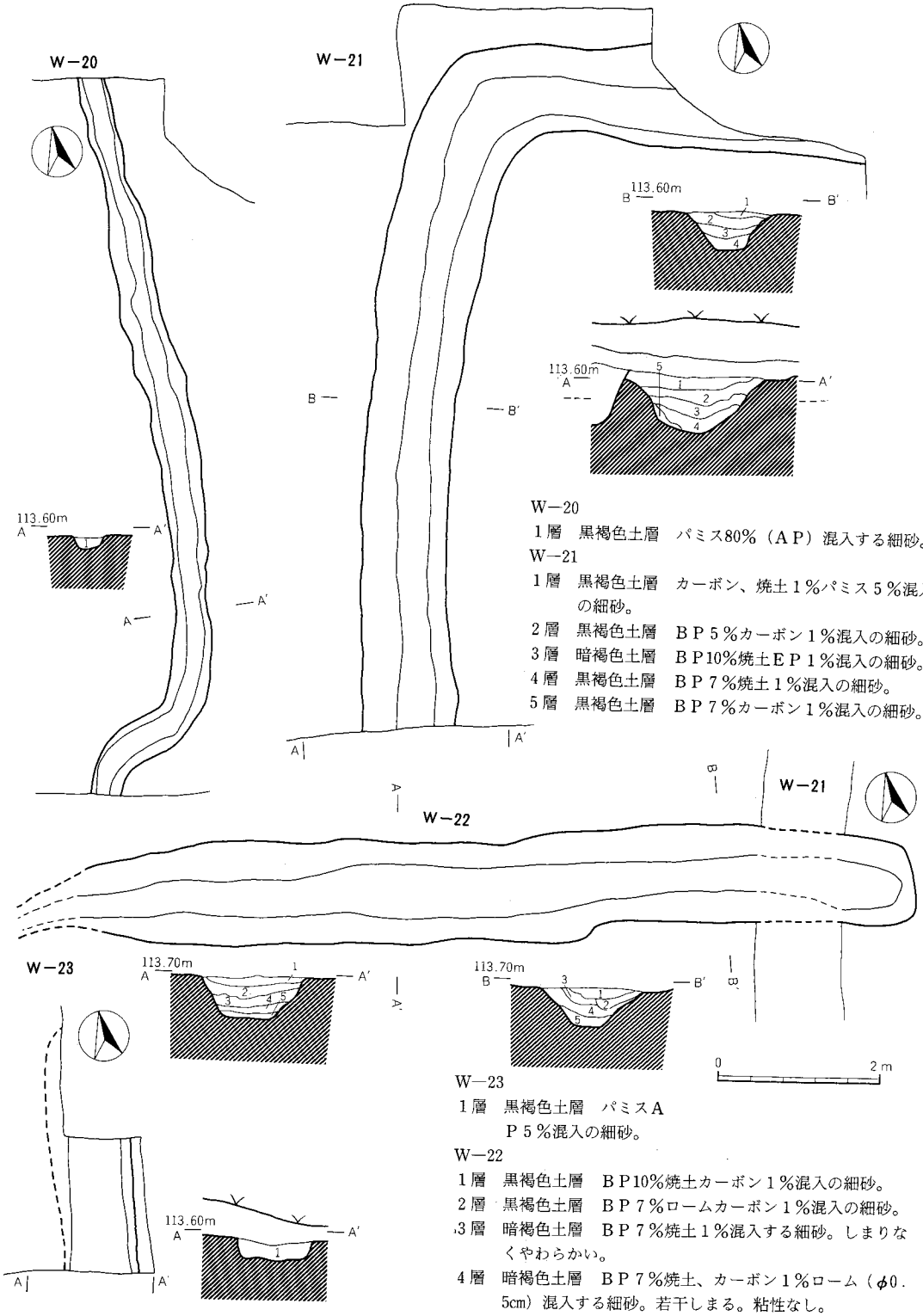
2層　黒褐色土層　焼土粒３％、パミス２％、カーボン粒１％混入する細砂。若干締る。

3層　黒色土層　ＣＰ３％、焼土粒１％、シルト３％混入する細砂。若干締り粘性有り。

4層　黒褐色土層　ＣＰ１％、灰２％、焼土２％混入する細砂。若干締り粘性有り。

5層　暗赤褐色土層　カーボン粒１％、パミス１％混入する細砂。若干締る。

第81図　９トレンチの土坑Ｃ（1/80）



W－20
1層　黒褐色土層　パミス80%（AP）混入する細砂。
W－21
1層　黒褐色土層　カーボン、焼土1%パミス5%混入の細砂。
2層　黒褐色土層　BP5%カーボン1%混入の細砂。
3層　暗褐色土層　BP10%焼土EP1%混入の細砂。
4層　黒褐色土層　BP7%焼土1%混入の細砂。
5層　黒褐色土層　BP7%カーボン1%混入の細砂。

W－23
1層　黒褐色土層　パミスAP5%混入の細砂。
W－22
1層　黒褐色土層　BP10%焼土カーボン1%混入の細砂。
2層　黒褐色土層　BP7%ロームカーボン1%混入の細砂。
3層　暗褐色土層　BP7%焼土1%混入する細砂。しまりなくやわらかい。
4層　暗褐色土層　BP7%焼土、カーボン1%ローム（φ0.5cm）混入する細砂。若干しまる。粘性なし。
5層　黒褐色土層　BP5%焼土、カーボン、ローム1%混入する細砂。若干しまる。

第82図　W－20、21、22、23号溝（1/80）

9トレンチ内では4条の溝状遺構が調査された。ここでは、出土遺物、土層等から遺構の年代観について検討してみたい。

W—20　トレンチ東側を北から南へと走行する。C—6グリッドで若干湾曲している。遺構覆土の所見から近世以降に耕作等の理由で掘削されたものと推定される。

W—21　トレンチ東方からほぼ東西方向を走行し、A—5グリッドで直角の折を持ち、南方へと向きを変えている。切り合い関係はW—20より古く、重複するすべての住居址とD—10・19W—22よりも新しい。本遺構はすでに57年度調査で検出済の9W—3の西延長上であり、トレンチ東北隅で既調査部分を再発掘し、同一であることを確認している。底面形状は逆台形で、溝内には水流の痕跡は無い。出土遺物として、常滑焼を中心とした中世陶器片があり、遺物の下限は14世紀前半代と推定される。

W—22　トレンチ中央部を東西方向に走行する。B—2～5グリッドに位置し、W—21との重複部分付近で立ち上がり、東端部になっている。西側もB—3グリッドで土が乱れ不明瞭になるが、トレンチ西壁断面では確認されており、若干、基底部レベルを上げて走行していたものと推定される。切り合い関係でW—21より古いことが確認されているが、出土する遺物からは時間差は認められない。

W—23　トレンチ東端の拡張部分で検出した。覆土の状況は新しく、最近の耕作に伴うものと推定される。遺物はH—9の攪乱遺物が出土している。

註

註1　前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』(1984)

2　この種の小型住居址は58年度調査でも検出している。5トレンチH—4号住居址で規模は2.3×2mであった。

3　福田健司「南武蔵における平安後期の土器群——11世紀代の土器群——」『神奈川考古』21号(1986)のカマド分類Eに相当する。同分類ではカマドの終末段階とされ、11世紀代に位置付けられる。

4　(註3)文献では14世紀頃の絵巻物「日本絵巻物全集、春日権現験記」を引用して11世紀中頃以降に竈屋的なものが存在したことを指摘している。

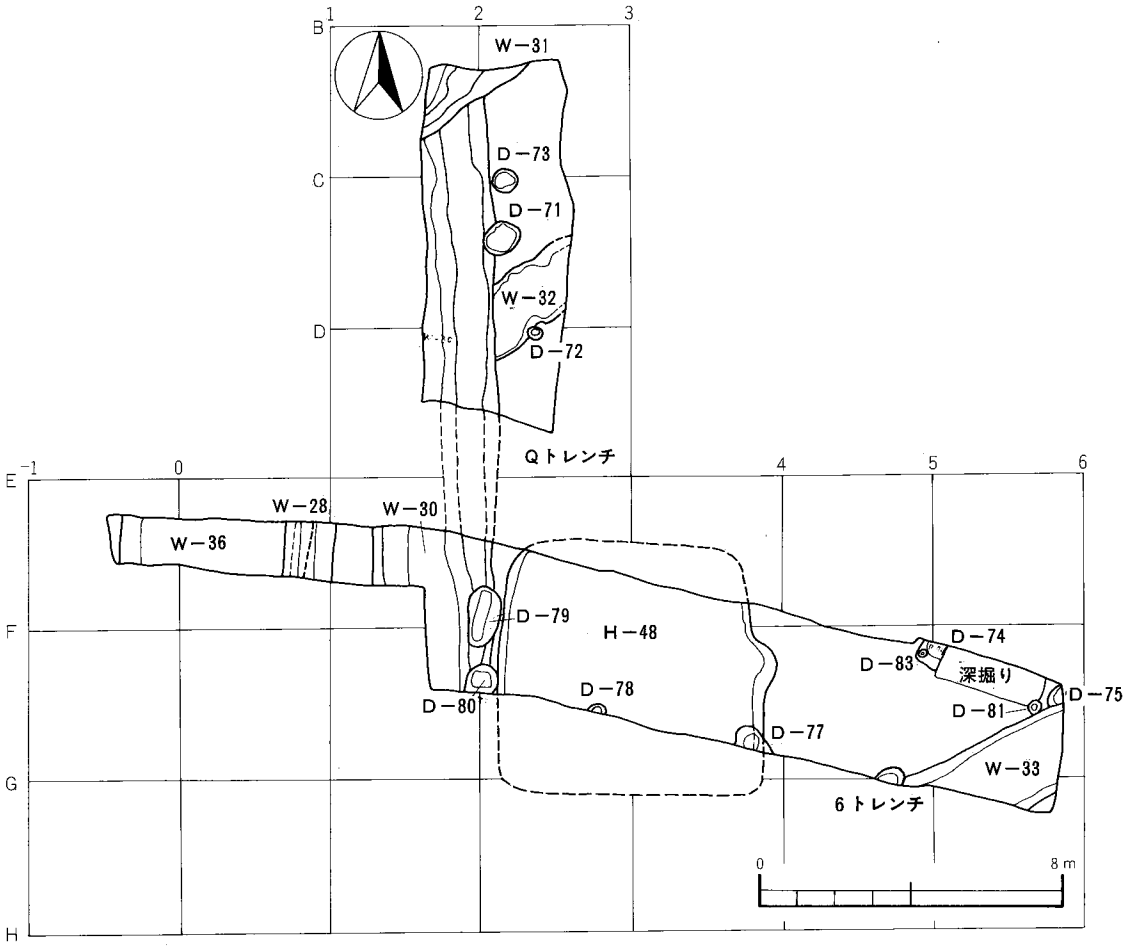
5　綿貫綾子氏の御教示による。前年度の調査でも柱状高台の同器形が出ている。

6　関晴彦「奈良平安時代の土器」『薮田遺跡』(1985)群馬県埋蔵文化財調査事業団。

7　宮崎重雄氏の御教示による。

8　前原豊「閑泉樋遺跡」『文化財調査報告書』第13集(1983)前橋市教育委員会。

3　6・Qトレンチ

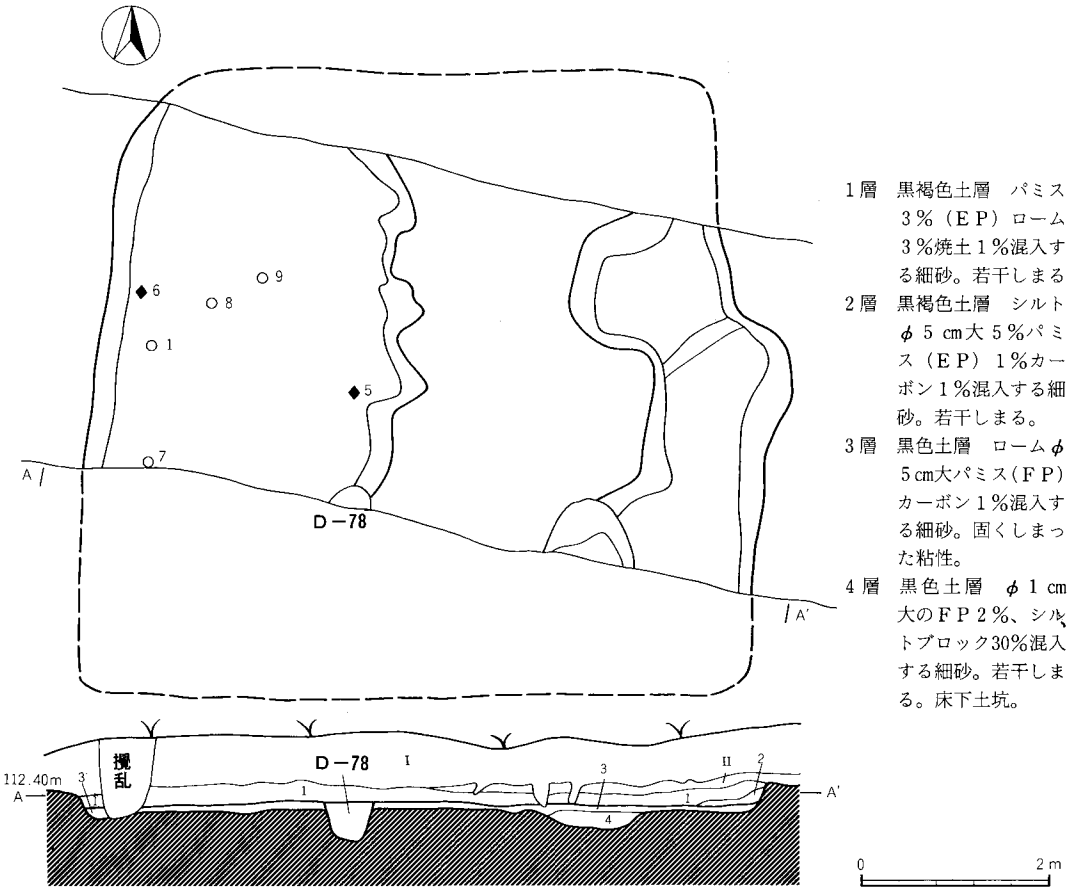


第83図　6・Qトレンチ全体図（1/200）

6・Qトレンチは、本年度調査地点のほぼ中央部に位置する。Qトレンチの北には、八日市場城の溝跡の凹地が直線的に北へ延びる。両トレンチとも、中央から東が生活道路にあたり、後世の削平を受けている。標高は113m前後で、地形は北から南へ緩やかに傾斜する。

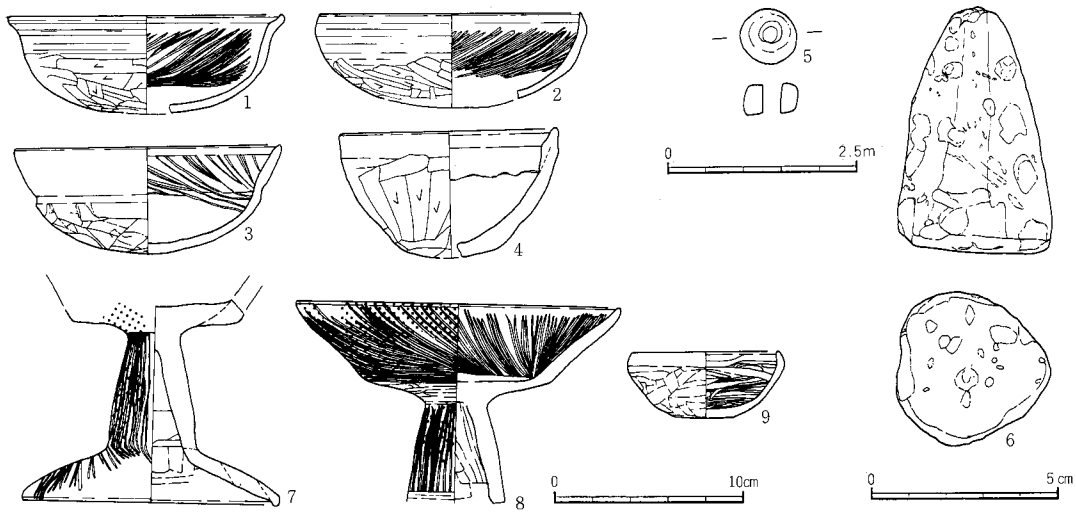
本トレンチからは、住居址1軒、土坑12基、溝6条を確認した。各遺構ともローム層を掘り込んで構築されているが、東側では床面から地表まで20～30cm程度であり、耕作や道路工事等により、全体にわたって攪乱が見られる。

住居址は掘り方でしか確認できなかったが東壁にカマドを有する方形プランであった。溝は比較的大規模なものが多く、他のトレンチ、他の遺跡と関係の見られる溝など重要なものが検出された。以下住居址から説明していきたい。



第84図　Ｈ－48号住居址掘り方（1/80）

遺構　本住居址は、発掘区域の中央、Ｅ・Ｆ・Ｇ－２・３グリッドに位置する。平面形は東西に長い方形を呈すると考えられる。北壁及び南壁は、調査区域外のため完掘できなかった。調査した範囲での規模は東西軸7.24m、南北軸(3.87m)であり、各辺とも直線的に構成され、コーナーは隅丸になると推定される。主軸方位はＮ－88°－Ｅを指す。本遺構は、生活道路の直下にあり、プラン確認の段階で床面は南壁付近の一部にしか見られず、ほぼ全面的に攪乱を受けていた。カマドは東壁中央に設置される。覆土は、攪乱を受けていない南壁地断で見るかぎり、２層に分けられ、概ねパミス（ＦＰ）をわずかに含む黒褐色の細砂である。南壁地断より壁高は24～27cmを測り、63°で立ち上がる。周溝は確認できなかったが、床面は、南壁中央付近に残ったのを見るかぎり、ロームブロックを含む黒色土で、６～10cm貼床され、ほぼ平坦に構築されており、堅緻な踏み固めが広がっていたと推定される。掘り方は、全体的に凹凸の多い不整形な面であるが、中央部に南北の高まりが見られ、カマド付近、西壁付近では低くなっている。また南壁際やや東寄



第85図　H－48号住居址出土遺物（1/4, 1/2, 1/1）

りの位置に床下土坑１基が検出された。規模は東西軸98cm南北軸（64cm）、深さ18cmを測る。

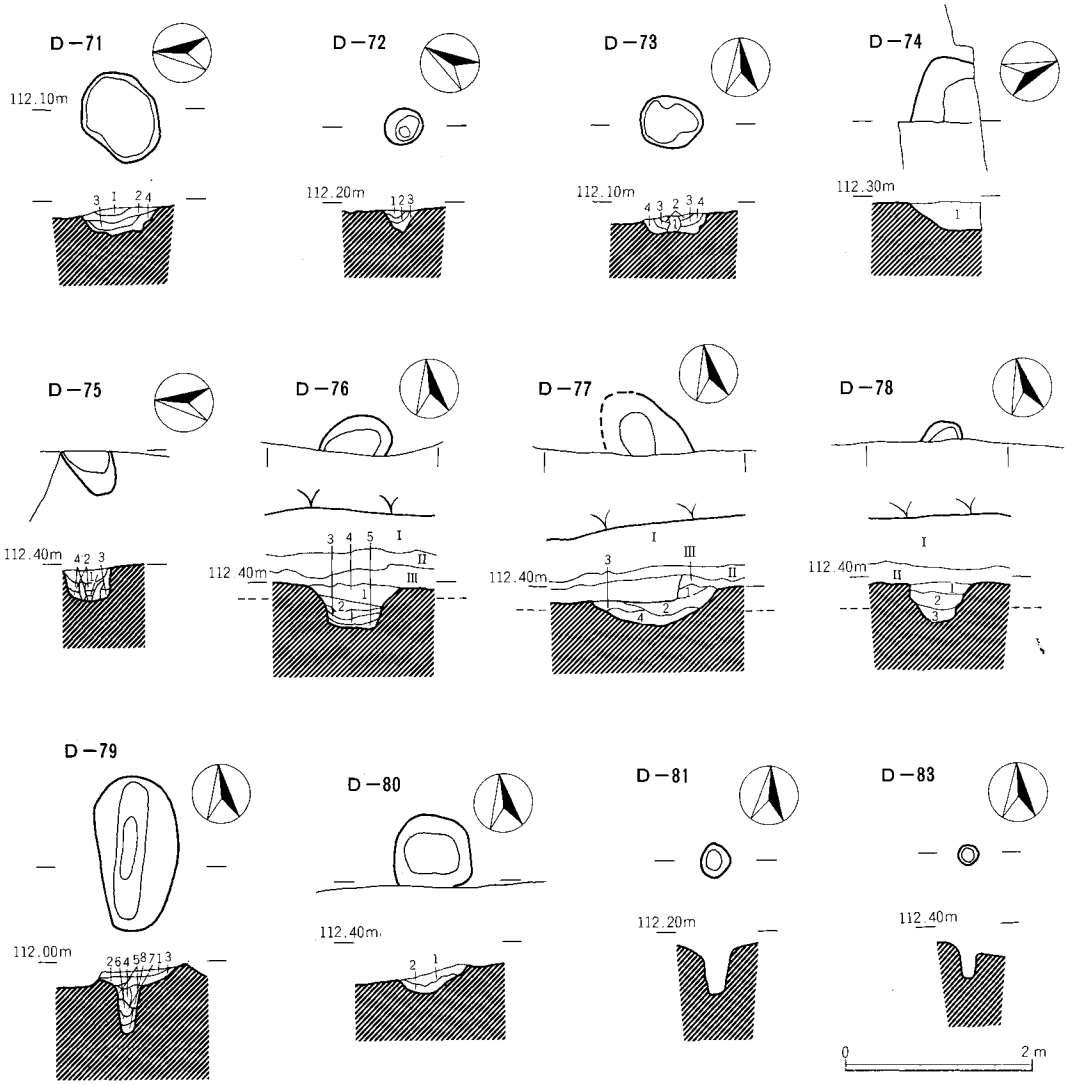
カマド　東壁の中央に構築されているが、攪乱により掘り方でしか確認できなかった。

遺物出土状態　遺物は比較的攪乱を免れた南壁際及び西壁際に集中が見られる。２・３の坏、４の甑は、表土剝ぎの段階で西壁近くから出土している。１の坏、７・８の高坏、９の手捏ね土器はいずれもプラン確認の段階で床面直上から出土している。５の滑石製小玉と６の軽石製品は、床下から出土している。掘り方調査の際、西壁中央付近より人骨の頭部が出土した。頸の骨はなく、下あごがはずれているが、歯は残っていた。

出土遺物　本住居址からの出土遺物は総数325点で、実測可能遺物は、土師器坏３個体、甑１個体、高坏２個体、手捏土器１個体、滑石製小玉と軽石製品がそれぞれ１個体の合計９個体であった。７・８の高坏は外面に赤色塗彩を有する。本遺構の出土遺物を器形等から総括的に判断すると、５世紀後半代に比定できる。

土　　坑

本トレンチから土坑は12基検出された。大半が小形の円形プランを有し、遺物の出土は少なかった。D－71はW－30を壊して掘られている。平面楕円形で、長軸99cm、短軸78cmの規模を持つ。D－72は円形を呈し、W－32より新しい。径40cm前後である。D－73はW－30に接して築かれた径60cm前後の円形土坑で平安期の遺物を出土した。D－74は完掘できなかったが隅丸方形を呈し、覆土から古墳時代前期と推定される。D－75は６世紀初頭の遺物を出土した。又、D－76はW－33を壊している。D－77はH－48より古く古墳時代前期で、D－79はW－30を壊しており、９世紀代の所産である。D－80は遺物を58点出土しているが、H－48の流れ込みで、遺構はW－30を壊している。D－81は石田川式土器を出土している。径35cmの小形円形を呈す。D－83は小形の円形土坑で径20cm前後の規模を有する。



D—71
1層　黒褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
2層　暗褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
3層　暗褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
4層　暗オリーブ褐色　小砂礫混入。

D—72
1層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
3層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。

D—73
1層　極暗褐色土層　軽石含む細砂。
2層　暗褐色土層　軽石含む細砂。
3層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。
4層　褐色土層　ローム混入する細砂。

D—74
1層　黒褐色土層　ローム混入する細砂。

D—75
1層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
3層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
4層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。

D—76
1層　褐色土層　パミス混入する細砂。
2層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。
3層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。
4層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。
5層　暗褐色土層　ローム含むシルト。

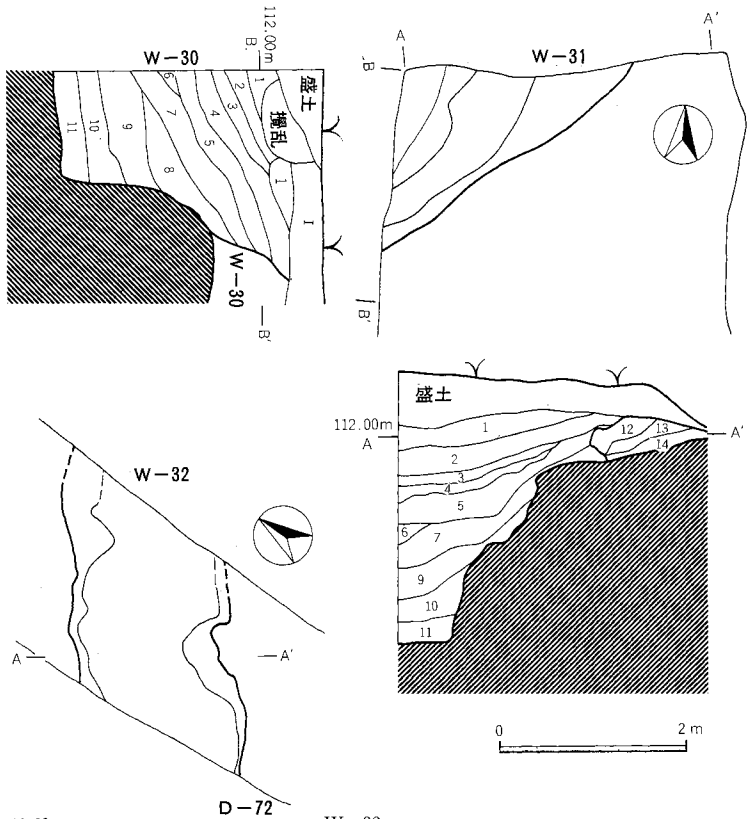
D—77
1層　黒褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
2層　黒褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
3層　黒褐色土層　ローム混入する細砂。
4層　黒褐色土層　ローム混入する細砂。

D—78
1層　黒褐色土層　ＣＰ混入する細砂。
2層　黒褐色土層　ローム混入する細砂。
3層　黒褐色土層　焼土粒混入する細砂。

D—79
1層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
2層　暗褐色土層　パミス混入する細砂。
3層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。
4層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。
5層　暗オリーブ褐色土層　細砂。
6層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
7層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。
8層　暗褐色土層　ローム混入する細砂。

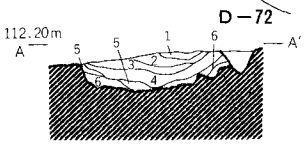
D—80
1層　黒褐色土層　パミス混入する細砂。
2層　黒褐色土層　シルト混入する細砂。

第86図　6・Ｑトレンチの土坑（1/80）



W－31

1層　褐色土層　パミス２％混入する細砂。固くしまる。
2層　暗褐色土層　ローム30％カーボン２％混入の細砂。
3層　黒色土層　パミス１％混入のろ状堆積物。
4層　暗褐色土層　パミス10％カーボン、焼土１％混入の細砂
5層　暗褐色土層　パミス30％カーボン１％混入の細砂。
6層　暗褐色土層　パミス、カーボン１％シルト10％混入細砂
7層　黒褐色土層　パミス２％カーボン、焼土１％混入の細砂
8層　暗褐色土層　パミス、焼土１％シルト３％混入細砂。
9層　暗褐色土層　シルト５％パミス、カーボン１％混入細砂
10層　にぶい黒褐色土層。
11層　にぶい黒褐色土層。
12層　にぶい黄橙色土層。ローム
13層　褐色土層　ローム60％パミス10％混入細砂。
14層　褐色土層　地山、硬質の火山灰質シルト。固くしまる



W－32

1層　黒色土層　カーボン集積30％灰５％ＣＰ３％混入する細砂。若干しまる。
2層　黒褐色土層　ＣＰ５％カーボン３％ローム２％焼土１％混入の細砂。若干しまる
3層　黒褐色土層　パミス（ＣＰ、ＦＰ）５％焼土１％混入する細砂。固くしまる。
4層　黒褐色土層　ローム10％パミス３％カーボン１％混入する細砂。固くしまる。
5層　褐色土層　パミス１％混入する粗砂。固くしまる。
6層　褐色土層　セカンダリーなシルト層。固くしまる。

第87図　Ｗ－31、32号溝（1/80）

本トレンチから検出された溝は６条である。以下概略的に検討してみたい。

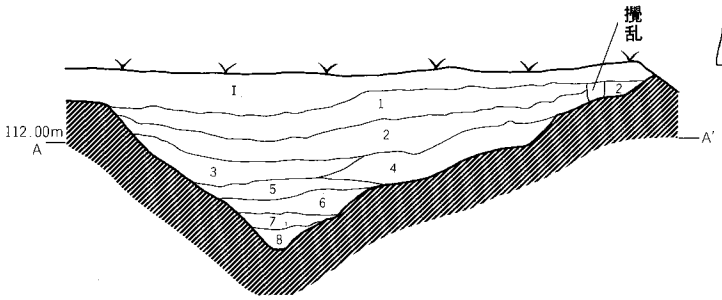
Ｗ－30　本トレンチの中央を北から南に走行する大規模な溝である。規模は、上端幅３m20cm下端幅95cm、深さ１m10cmで、断面形状はきれいな逆三角形を呈している。地層断面における上端幅は５m80cmにも達する溝である。出土遺物、規模、方向性から判断すると、Ｎトレンチで検出されたＷ－３に続くと考えられる。

Ｗ－31　Ｑトレンチ最北端に位置し、Ｗ－30を切っている。調査区域外にあたるため完掘できなかったが、出土遺物、規模、覆土から見て、トレンチの北に延びる八日市場城の溝のコーナーであると推定される。断面に見られる12、13、14層は土塁ではないかと考えられる。

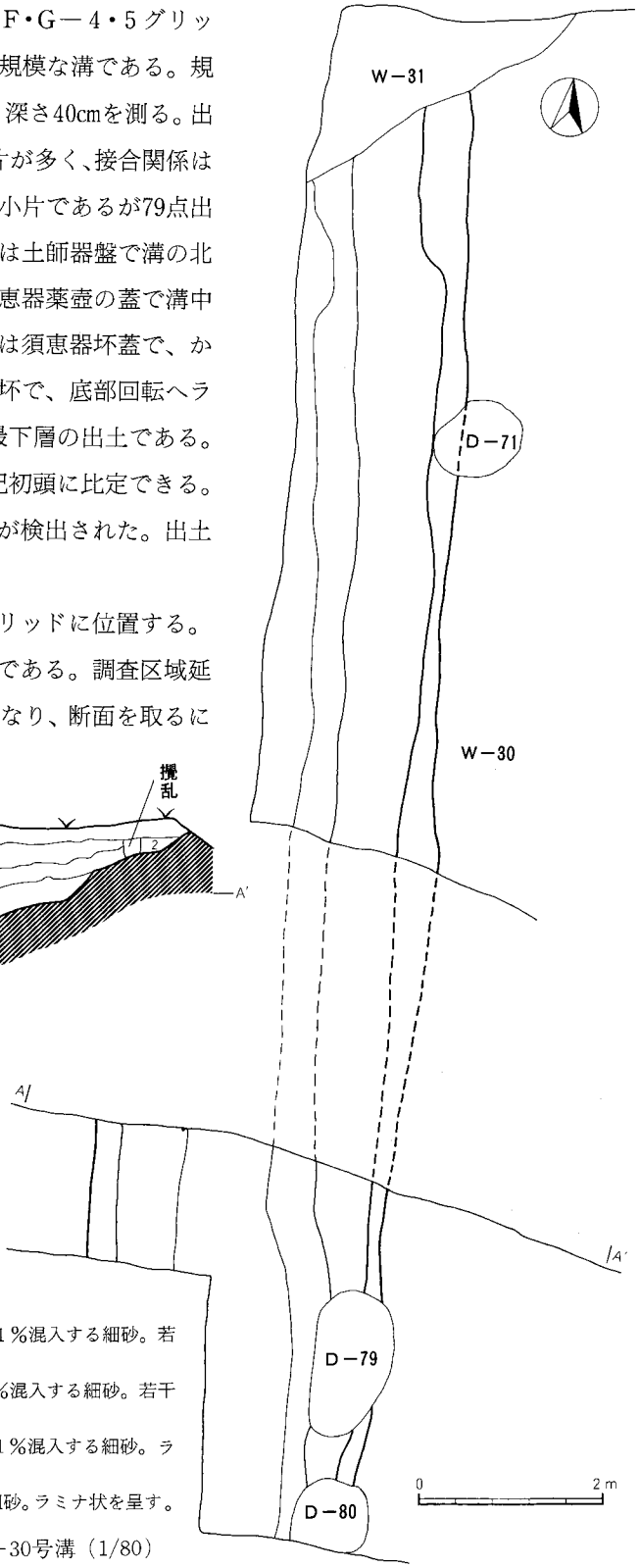
Ｗ－32　ＱトレンチＣ・Ｄ－２グリッドに位置し、Ｗ－30に切られる。北東から南西に走る溝である。上端幅１m63cm、下端幅１m10cm深さ38cmを測る中規模の溝である。東壁際は生活道路の攪乱が入る。

W—33　6トレンチ南東コーナー、F・G—4・5グリッドに位置する。北東から南面に走る中規模な溝である。規模は上端幅2m13cm、下端幅1m65cm、深さ40cmを測る。出土遺物は545点と比較的多かったが小片が多く、接合関係はあまり見られなかった。また須恵器も小片であるが79点出土した。実測可能遺物は4個体で、1は土師器盤で溝の北東コーナーから出土している。2は須恵器薬壺の蓋で溝中央の比較的上層から出土している。3は須恵器坏蓋で、かえりを有するものである。4は須恵器坏で、底部回転ヘラ切り痕が見られる。3、4は溝中央の最下層の出土である。これらの遺物は、7世紀終末から8世紀初頭に比定できる。この溝からは、土器片に混じり馬の歯が検出された。出土位置は溝中央の第2層にあたる。

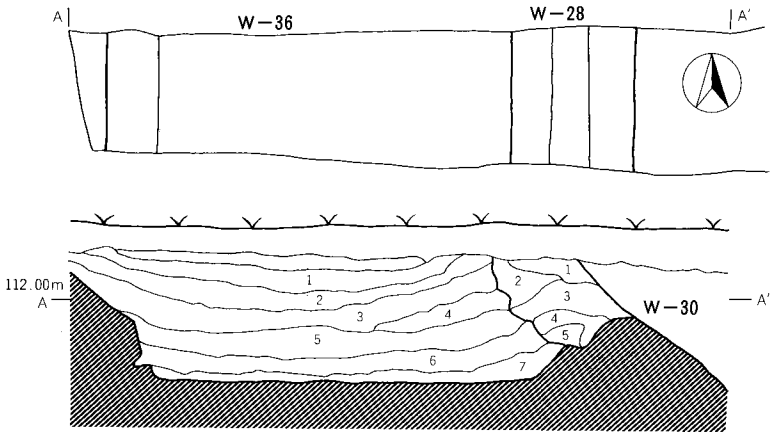
W—36　6トレンチ西端、E—0グリッドに位置する。北から南へ向かって流れる大規模な溝である。調査区域延長のため、1.5m前後のトレンチ発掘となり、断面を取るに



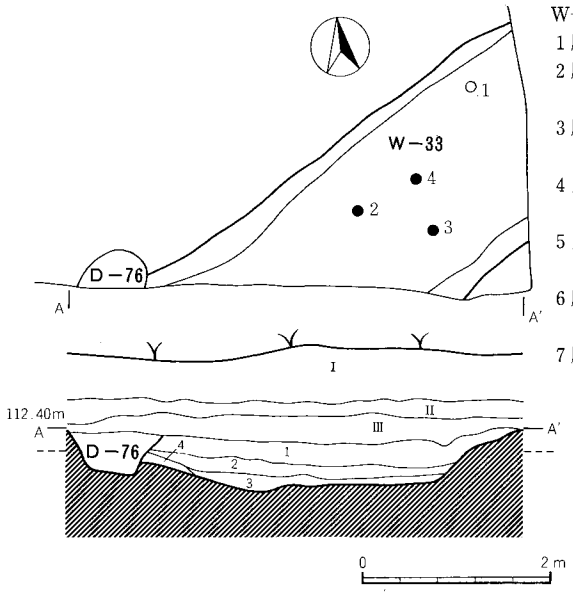
1層　暗褐色土層　パミス3％カーボン1％ローム1％混入する細砂。若干しまる。
2層　黒褐色土層　パミス3％ローム2％カーボン、焼土1％混入の細砂。若干しまる。
3層　黒褐色土層　パミス2％ローム、カーボン1％混入する細砂。若干しまる。
4層　黒褐色土層　パミス3％ローム5％黒色土3％カーボン1％混入の細砂。若干しまる
5層　黒褐色土層　カーボン2％ローム、パミス1％混入する細砂。若干しまる。
6層　黒褐色土層　パミス、カーボン、ローム1％混入する細砂。若干しまる。
7層　黒褐色土層　パミス3％カーボン、ローム1％混入する細砂。ラミナ状を呈す。しまりあり。
8層　黒褐色土層　パミス、ローム2％混入する粗砂。ラミナ状を呈す。



第88図　W—30号溝（1/80）



W—28
1層　黒褐色土層　パミス2％ローム、焼土1％混入細砂
2層　黒褐色土層　パミス2％カーボン1％シルト2％混入の細砂。若干しまる。
3層　黒褐色土層　パミス2％シルト1％混入の細砂。
4層　暗褐色土層　パミス2％焼土、ローム1％混入する細砂。しまりない。



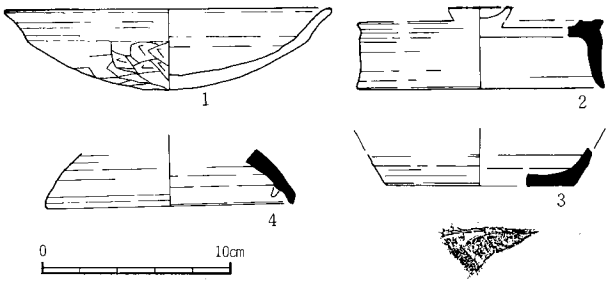
W—36
1層　黒褐色土層　パミス5％カーボン、焼土1％混入する細砂
2層　黒褐色土層　パミス3％焼土1％ローム2％混入する細砂。しまりなく若干やわらかい。
3層　黒褐色土層　パミス2％ローム2％カーボン1％混入する細砂。やわらかく粘性あり。
4層　黒褐色土層　パミス3％焼土1％ローム3％カーボン1％混入する細砂。若干しまる。
5層　黒褐色土層　パミス2％焼土1％ローム2％カーボン1％混入する細砂。若干しまる。
6層　黒褐色土層　パミス3％焼土、カーボン1％ローム3％シルト3％混入の細砂。若干しまる。
7層　暗褐色土層　パミス1％ローム3％カーボン1％シルト20％混入する細砂。若干しまる。

W—33
1層　暗褐色土層　パミス3％焼土、カーボン1％ローム2％混入する細砂。
2層　褐色土層　パミス、カーボン1％ローム2％混入の細砂
3層　黒褐色土層　パミス2％焼土1％シルト5％カーボン1％混入する細砂。黒くしまる。
4層　黒色土層　パミス2％ローム1％を含む粗砂。

第89図　W－28、33、36号溝（1/80）

留まったが、上端幅5m、下端幅4m、深さ1.3mを測る。溝の東端はW—28に切られるが遺存状態は良い。断面最上部には浅間B・P純層が16cmの厚さで堆積しており、規模、覆土、方向等から総合的に判断して、本年度幼稚園建設のため発掘調査された寺田遺跡で検出された大溝につながる溝であると考えられる。

W—28　東端はW—30に切られ、西側はW—36を切って北から南へ走る小規模な溝である。



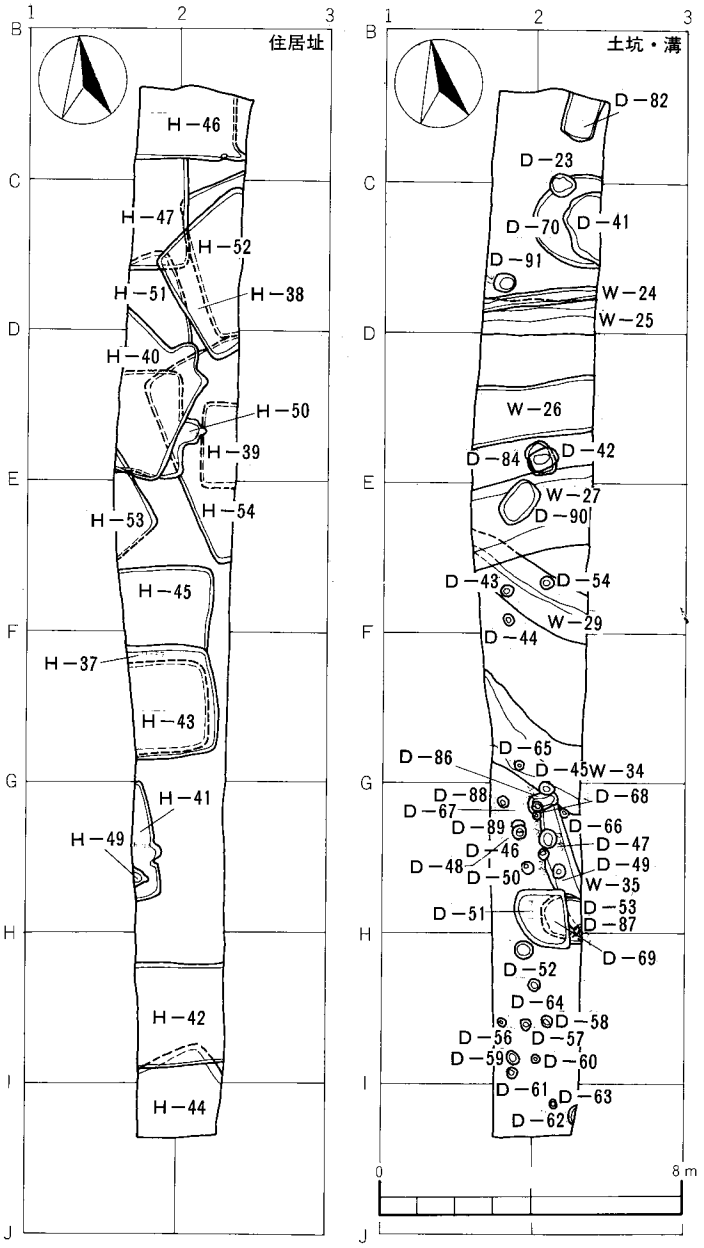
第90図　W－33号溝出土遺物（1/4）

4　Cトレンチ

Cトレンチは本年度調査地点の中央部に位置する。標高は113m前後で、地形は北から南へ、緩やかに傾斜する。トレンチ北端では浅間B・Pの純層が見られる。

本トレンチからは、住居址17軒、土坑38基、溝7条が検出され、各遺構とも著しい重複が見られた。

検出された17軒の住居址は古墳時代住居址9軒、奈良・平安時代住居址8軒であった。これら住居址はトレンチの北側に13軒が集中していた。いずれも重複しており、切り合い関係が見られる。このような住居址の配置から、トレンチの東西、北側に広がっていく可能性が考えられる。溝は7条、うち古墳時代2条、奈良・平安時代1条、中世以降4条であった。いずれも東から西へ流れる。土坑は中世以降と考えられる。



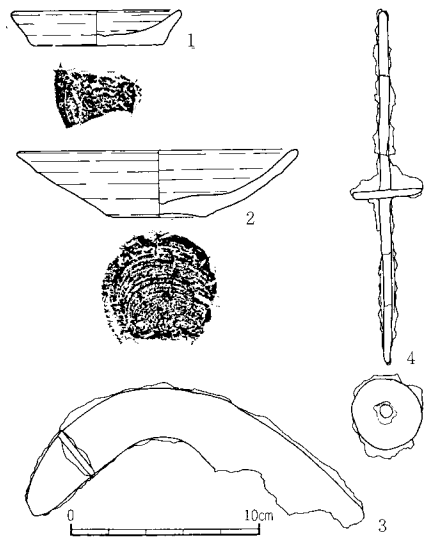
第91図　Cトレンチ全体図（1/200）

H－37号住居址

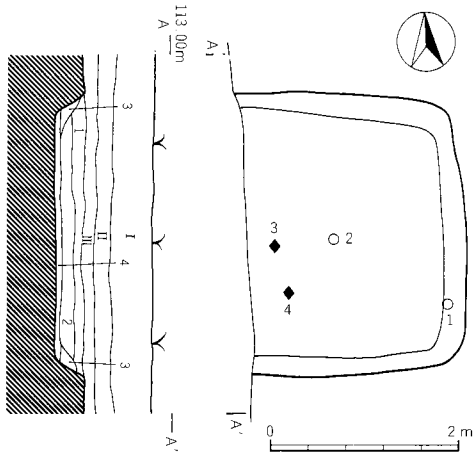
遺構　本住居址は、発掘区域の中央F－1・2グリッドに位置する。ほぼ正方形のプランと考えられるが、西壁は調査区域外にあたるため確認できなかった。主軸方位はN－4°－Eを指す。カマドは確認できず、西壁にあると考えられる。覆土は4層に分けられ、すべて軽石を含む細砂である。確認面からの壁高は平均30cmであり、平均の立ち上がり角度は65°である。床面は軽石を含む暗褐色土で平坦な面になっている。

遺物出土状態　遺物は遺構全体に分布し、3の鉄鎌と4の鉄製紡錘車が、住居址中央床面直上から出土している。

出土遺物　総数486点で実測可能遺物はカワラケ皿と土師器坏の2点である。



第92図　H－37号住居址出土遺物（1/4）



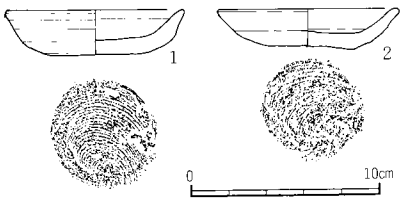
住居址
1層　暗褐色土層　BP10%カーボン1%混入。
2層　暗褐色土層　パミス3%カーボン1%混入。
3層　黒褐色土層　パミス1%カーボン1%混入。
4層　暗褐色土層　パミス1%鉄分2%混入。

第93図　H－37号住居址（1/80）

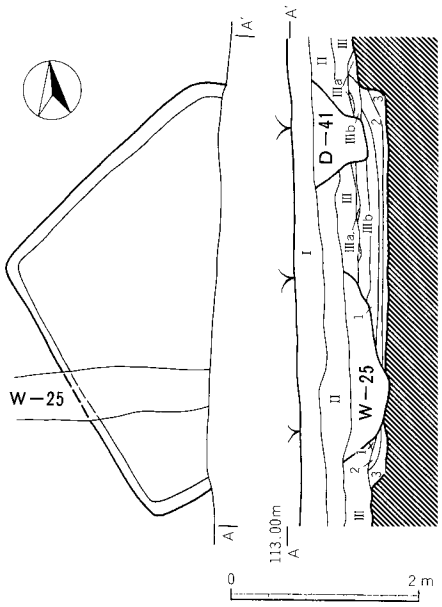
H—38号住居址

遺構　本住居址はC・D—1・2グリッドに位置し不正方形のプランを有すると思われるが、東壁と南壁の一部は確認できなかった。住居の南側部分をW—25に切られている。主軸方位はN—51°—Eを指す。確認壁高は24.5cmで平均の立ち上がり角度は78°であった。周溝、ピット、カマドは検出されなかった。床面は軽石を含む黒色土で比較的平坦な面になっている。

出土遺物　本住居址からの出土遺物総数は354点で小破片が多く、接合によって実測可能となった遺物は殆どなく、完形のいわゆるカワラケ皿が2個体であった。2個体とも底部には右方向回転糸切り痕が見られる。2は若干底部を突出させ、体部は内湾気味に立ち上がる。器形から遺物は11世紀代に位置づけられる。



第94図　H－38号住居址出土遺物(1/4)



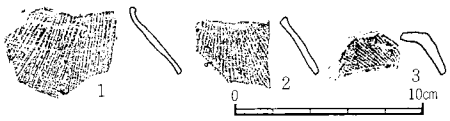
住居址
1層　黒褐色土層　パミス5%カーボン1%ロームブロック3%焼土1%混入。若干しまる細砂
2層　黒色土層　ロームブロック5%焼土1%パミス3%カーボン1%混入する細砂。若干しまる。
3層　黒褐色土層　パミス3%ローム1%カーボン1%混入する細砂。若干しまる。

第95図　H－38号住居址（1/80）

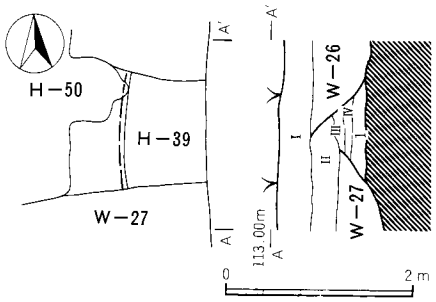
H－39号住居址

遺構　本住居址は、D－2グリッドに位置し、北側をW－26に、南側をW－27に切られており狭い範囲でしか確認できなかった。覆土はCPを含む細砂で、床面は比較的堅緻でよくしまっている。

出土遺物　遺物総数11点と少なく、そのうち3点はS字状口縁台付甕で1、2は肩部で、3は脚部の一部であると考えられる。4世紀後半代に比定できる。



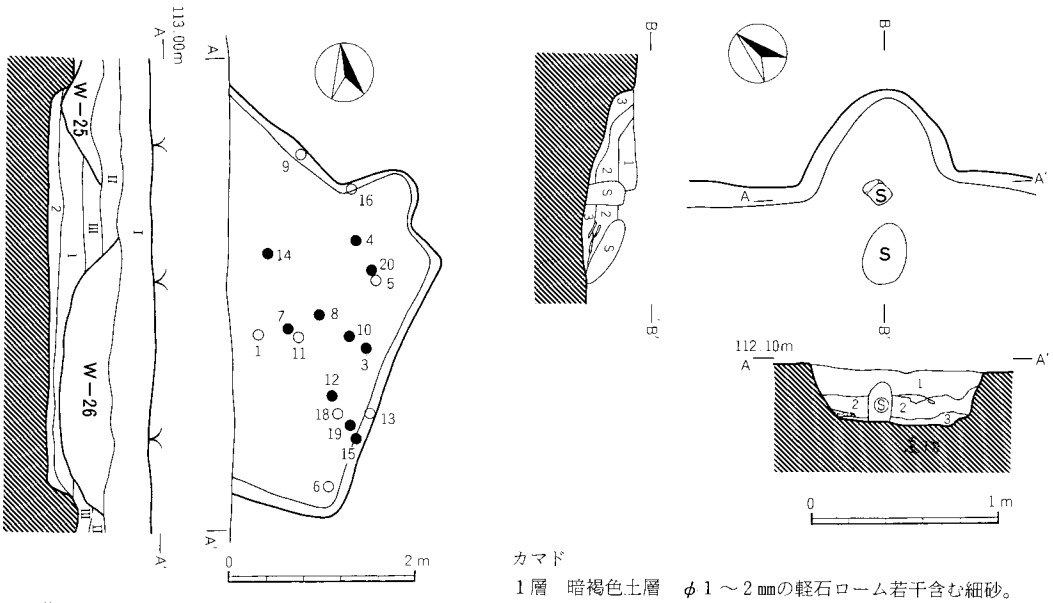
第96図　H－39号住居址出土遺物（1/4）



住居址
1層　暗褐色土層　パミス3％焼土2％カーボン1％混入する細砂。若干しまる。

第97図　H－39号住居址（1/80）

H－40号住居址

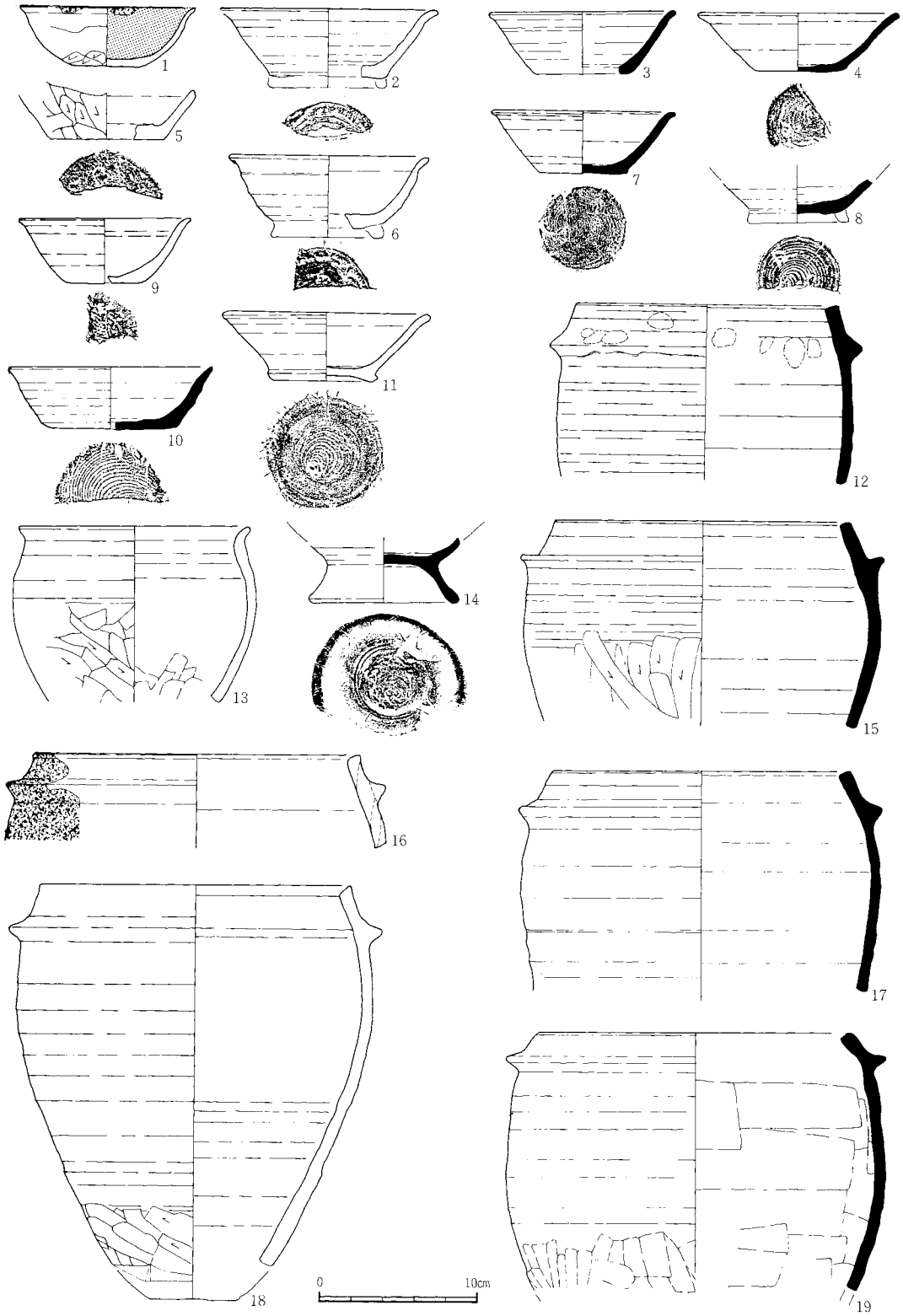


住居址
1層　黒褐色土層　FP3％、焼土1％含む細砂
2層　暗褐色土層　パミス3％、焼土5％含む細砂。

カマド
1層　暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石ローム若干含む細砂。
2層　黒褐色土層　φ1～2㎜の軽石、焼土、炭火物若干含む。しまり粘性共になし。
3層　極暗褐色土層　焼土5％白色粘土10％程度含む細砂。しまりややあり粘性あり。

第98図　H－40号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　本住居址は、D－1・2グリッドに位置し、方形プランと考えられるが、住居址西半分は、調査区域外にあたるため確認できなかった。主軸方位はN－48°－Eを指す。住居址中央をW－26、北部をW－25が切る。覆土は溝によって攪乱をうけているが、床面まで達しておらず比較

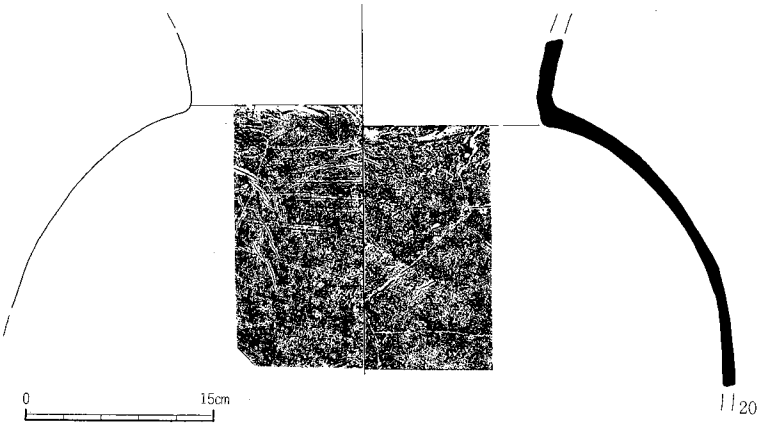


第99図　H－40号住居址出土遺物（1/4）

的堅緻な面が広がる。確認壁高は24cmで平均68°で立ち上がる。ピット及び周溝は確認されなかった。

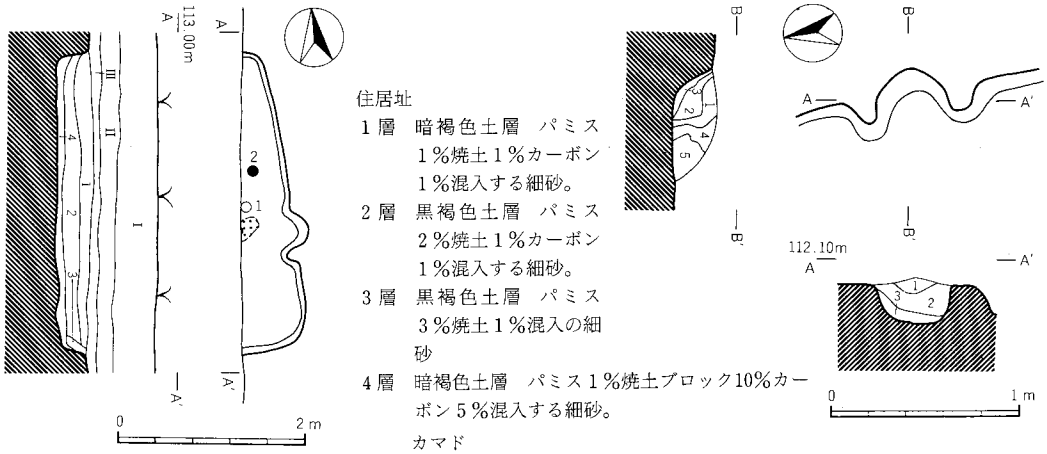
カマド　北壁の東隅に位置し、主軸方位はN－51°－Eを指す。残存状態は比較的良く全長61cm最大幅82cm、焚口部幅67cmを計る。焼燃部、焚口部ともあまり焼けておらず、焼土ブロックが見られる程度であった。カマド内からは、住居廃棄後投入されたと思われる割れ石が多数検出された。支柱には、安山岩の円礫が使用されている。

出土遺物　本住居址の出土遺物は692点と多く、そのうち80%近くは、カマド周辺と東壁際に集中している。そのうち実測可能遺物は須恵器坏6個体、埦4個体、羽釜7個体、足高高台埦1個体。大甕1個体、土師器土釜1個体の合計20個体であった。20の須恵器大甕は住居址中央で折り重なるように出土した。27個体が接合されたものであるが、口縁部は欠損していた。水甕として機能していたと思われる。出土遺物は器形的特徴から総括的に見ると10世紀の後半代に比定できる。



第100図　H－40号住居址出土遺物（1/6）

H－41号住居址



住居址

1層　暗褐色土層　パミス1%焼土1%カーボン1%混入する細砂。

2層　黒褐色土層　パミス2%焼土1%カーボン1%混入する細砂。

3層　黒褐色土層　パミス3%焼土1%混入の細砂

4層　暗褐色土層　パミス1%焼土ブロック10%カーボン5%混入する細砂。

カマド

1層　極暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石含む細砂。

2層　暗褐色土層　φ1㎜前後の軽石5%含む細砂。

3層　暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石含む細砂。

4層　極暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石、炭火物、焼土わずか混入の細砂。

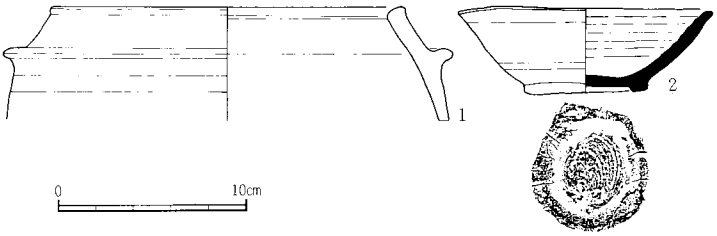
5層　黒褐色土層　焼土5～10%炭火物わずか含む細砂。

第101図　H－41号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　本住居址は、中央南寄りG－1グリッドに位置する。住居址の大部分が調査区域外にあたるため、調査は全体の1/6にすぎない。同時期の住居址の例から横長長方形のプランになると推定される。調査範囲での規模は南北軸3.16m、東西軸(0.75m)であり、各辺とも直線的に延びコーナーは隅丸である。主軸はN－86°－Eを指す。覆土は軽石を含む黒褐色の細砂である。確認面からの壁高は平均21cmで、立ち上がり角度は71°を測る。床面は、南壁際で多少の凹凸が見られるが比較的平坦である。カマド付近にわずかの焼土が見られた。

カマド　東壁のやや南寄りに構築されており、確認面が浅いために遺存状態はあまり良好ではなく、両袖がわずかに残存していた。両袖ともローム混じりの黒褐色土で構築されている。全長52cm、最大幅76cm、主軸はN－88°－Eを指す。燃焼部、焚口部とも焼けておらずわずかに焼土が混入する程度である。両袖の基部はわずかに黒色土が敷かれ、壁面から造り出されている。

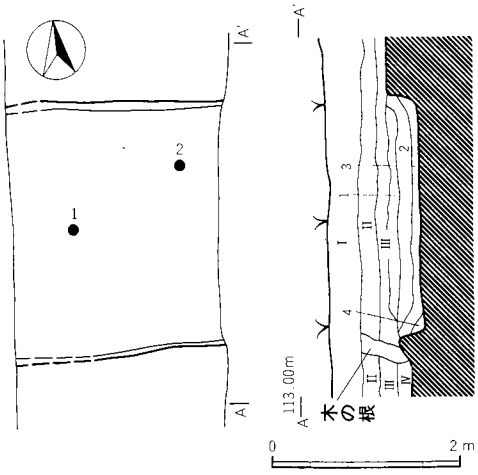
出土遺物　本住居址からの出土遺物は105点と比較的少なく、カマド付近に遺物の集中が見られた。実測可能遺物は、須恵器椀1個体、羽釜1個体の2個体であった。羽釜1は酸化焰焼成で体部が張っている。須恵器高台椀2は、右回転糸切り未調整の後、付け高台をして器形を整えている。これら出土遺物は器形の特徴から10世紀前半代に位置づけられる。



第102図　H－41号住居址出土遺物（1/4）

H－42号住居址

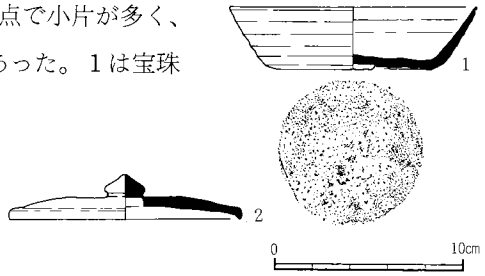
遺構　本住居址は、調査区の南端、H－1・2グリッドに位置し、H－44の北壁の一部を切って構築されている。調査によって中心部分は明らかになったが、東壁、西壁は調査区域外のため完掘できなかった。平面形は、正方形もしくは東西に長い長方形を呈すると考えられる。調査した範囲内での規模は南北軸2.7mであり各辺とも直線的に構成されている。主軸方位は、N－87°－Wを指す。確認面からの壁高は平均31cmで、立ち上がり角度は75～85°と急傾斜である。床面は、ほぼ平坦に構築されている。ピット、周溝は検出されなかった。カマドは、調査区域外にあるものと推定される。



1層　黒褐色土層　パミス3％焼土2％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　パミス2％カーボン1％混入の細砂。
3層　黒褐色土層　パミス5％カーボン1％混入の細砂。
4層　黒色土層　　パミス、シルトブロック1％混入細砂。

第103図　H－42号住居址（1/80）

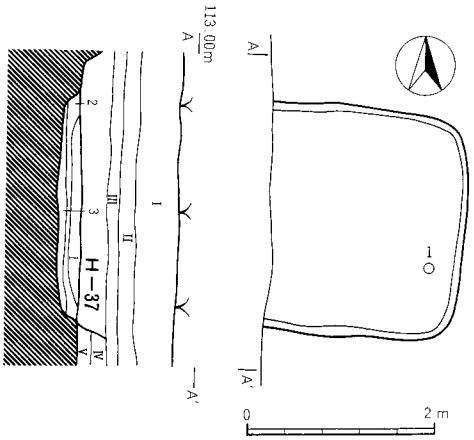
出土遺物　本住居址からの出土遺物総数は、186点で小片が多く、図示できたものは須恵器坏蓋１個体と坏１個体であった。１は宝珠状つまみを持つ須恵器坏蓋で、土が異質であることから他地域からの搬入と考えられる。２の坏は右回転ヘラ切り痕が残り、全体に自然釉の付着が見られる。出土遺物から８世紀後半代に位置づけられる。



第104図　Ｈ－42号住居址出土遺物（1/4）

Ｈ－43号住居址

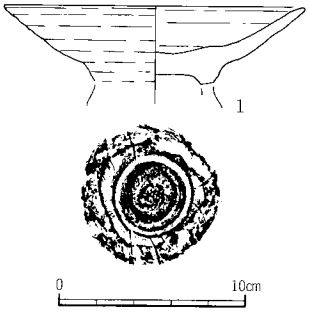
遺構　本住居址は、調査区域の中央Ｆ－１・２グリッドに位置する。調査によって$\frac{4}{5}$の部分が明らかになったが、残りは調査区域外のため完掘できなかった。平面形は、正方形もしくは横長の長方形を呈すると考えられる。調査した範囲での規模は、南北軸2.4m、東西軸（2.12m）であり、各辺とも直線的に延び、コーナーは隅丸である。東壁はＮ－６°－Ｅを指す。確認面からの壁高は平均20cmで、各壁とも立ち上がりは緩やかであったが、明確に検出できた。床面は、中央部で４～５cm程度低くなっている。



１層　黒褐色土層　パミス３％カーボン１％混入の細砂。
２層　暗褐色土層　パミス１％カーボン１％混入の細砂。
３層　黒褐色土層　パミス３％鉄分５％混入の細砂。

第105図　Ｈ－43号住居址（1/80）

出土遺物　遺物総数161点で、小片が多く実測可能遺物は、須恵器足高高台埦が１個体であった。これは東壁際床面直上より出土し、酸化焔焼成による。口縁部は広がり皿的様相を呈する。器形等から10世紀終末に位置づけられよう。

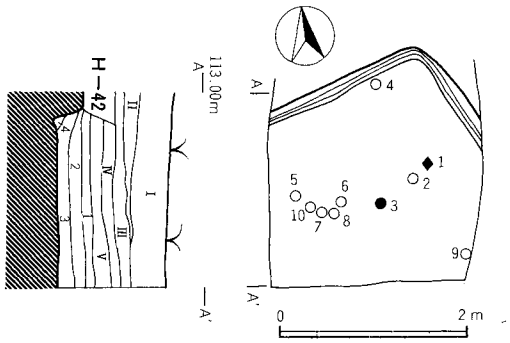


第106図　Ｈ－43号住居址出土遺物（1/4）

Ｈ－44号住居址

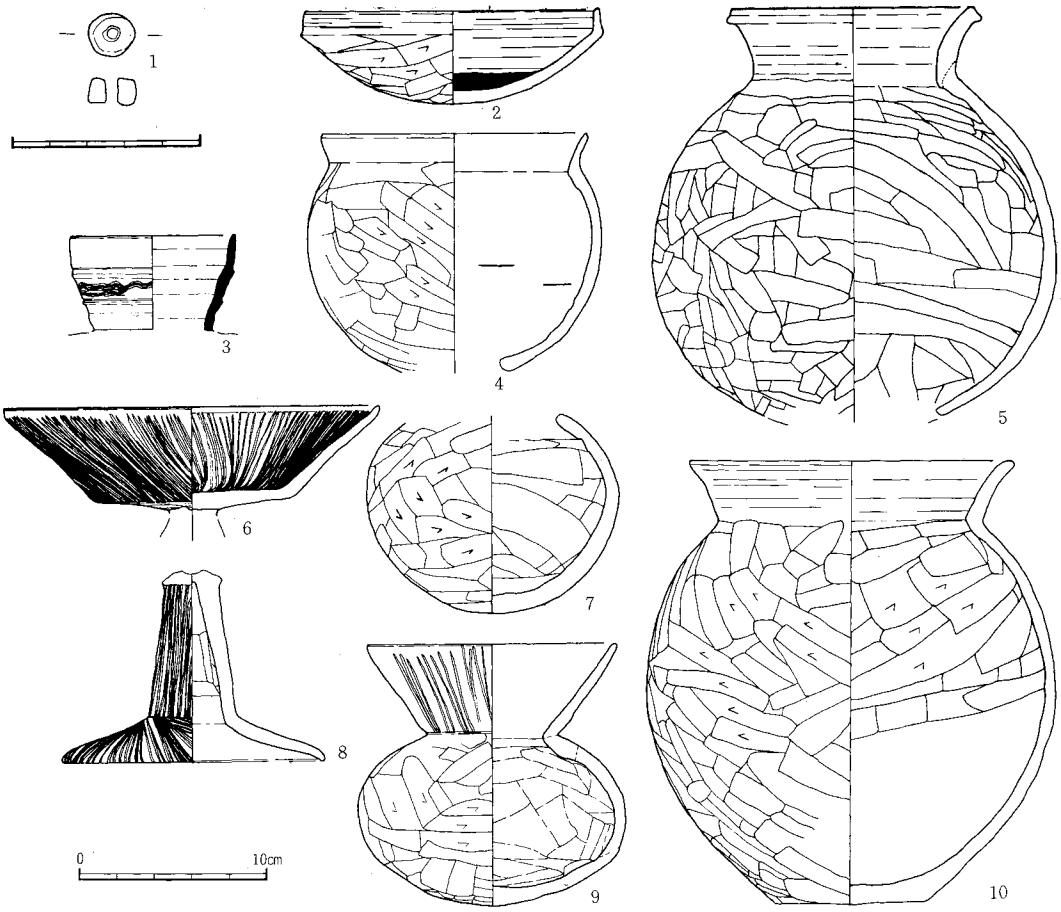
遺構　本住居址は、調査地区の南端、Ｈ・Ｉ－１・２グリッドに位置し、調査によって⅓程度が明らかになったが、残りは調査区域外のため検出できなかった。平面形は、正方形を呈すると考えられる。各辺とも直線的に構成され、北壁の方位はＮ－71°－Ｅを指す。確認壁高は平均24cmで、75～85°の角度で立ち上がる。床面は、ほぼ平坦に構築され、全体的に固く踏みしめられている。周溝は、幅５～10cm、深さ４cm前後の規模で周る。調査区内からは、ピット、カマドは検出されなかった。

出土遺物　遺物総数348点で、住居址中央に遺物の集中が見られる。実測可能遺物は10個体で滑石製小玉１点、土師器坏１個体、高坏２個体、坩２個体、壺１個体、甕２個体、壺又は瓶と思われる須恵器が１個体であった。住居址中央床面直上からは、５の壺、６の高坏坏部、７の坩８の高坏脚部、10の甕が重なり合うようにして出土した。４の小形甕は北壁床面上で出土しているし、９の坩もトレンチ南東コーナー床面直上から出土している。これら出土遺物の年代観は５世紀後半に位置付けられる。



１層　暗褐色土層　パミス鉄分３％シルト１％混入の細砂。
２層　黒褐色土層　パミス５％シルト２％混入の細砂。
３層　黒色土層　パミス３％焼土１％混入の細砂。若干しまる。粘性あり。
４層　黒色土層　パミス１％シルト２％焼土１％混入の細砂。若干しまる。粘性あり。

第107図　Ｈ－44号住居址（1/80）

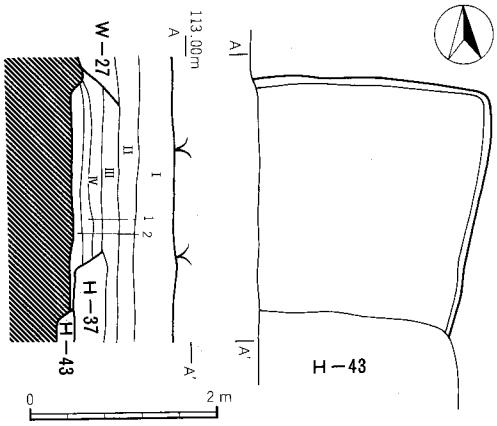


第108図　Ｈ－44号住居址出土遺物（1/4）

H—45号住居址

遺構　本住居址は調査地区のほぼ中央に位置し、E・F—1・2グリッドに所在する。南壁はH—43に切られており、西壁は調査区域外のため完掘できなかった。各辺とも直線的に延びる。東壁の方位はN—13°—Eを指す。覆土は、軽石を含む細砂で若干しまる。確認壁高は平均15cmで、緩やかに立ち上がる。床面は、V層土を掘り込んでほぼ平坦に構築されている。カマド、ピット、周溝は検出されなかった。

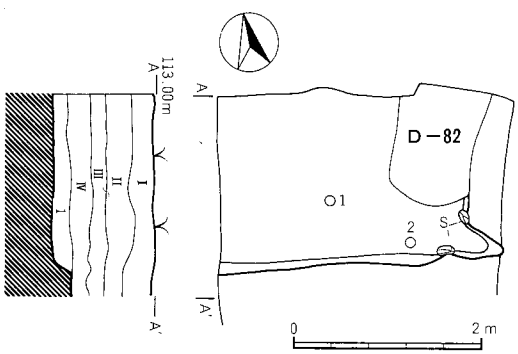
出土遺物　遺物総数148点であったが、いずれも小破片で実測可能となる接合関係は見られなかった。遺物から6世紀前半代に比定できる。



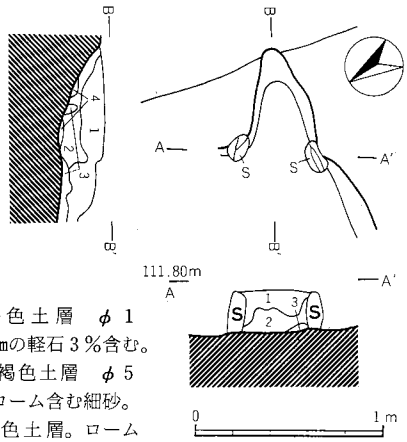
住居址
1層　暗褐色土層　パミス3％鉄分1％シルトブロック2％混入する細砂。若干しまる。
2層　黒褐色土層　パミス5％鉄分3％シルトブロック1％混入する細砂。若干しまる。

第109図　H—45号住居址（1/80）

H—46号住居址



住居址
1層　黒褐色土層　ローム10％パミス3％混入の細砂。



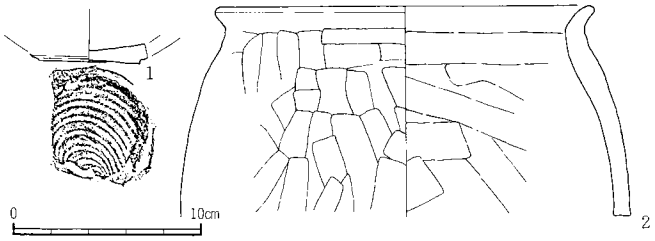
カマド
1層　暗褐色土層　φ1～2㎜の軽石3％含む。
2層　極暗褐色土層　φ5㎜のローム含む細砂。
3層　黒褐色土層。ローム30％軽石5％含む細砂。
4層　黒褐色土層。焼土10％灰10％含む細砂。

第110図　H—46号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　発掘区最北端のB—1・2グリッドに位置し、D—82に東壁を切られている。北壁、西壁は調査区域外にあたるため確認できなかった。主軸方位はN—98°—Eを指す。確認面からの壁高は平均21cmを測り、立ち上がりは61°である。床面はほぼ平坦に構築されており、掘り方は、いくつかの凹凸が認められたが、ほぼ水平に荒掘りがなされている。

カマド　東壁の南隅に構築されており、遺存状態は良好である。規模は全長67cm、最大幅54cmで、主軸方位N—119°—Eを測る。両袖とも河原石で構築されており、焼燃部、焚口部共よく焼けており、緩やかに立ち上がり煙道部へつづく。

出土遺物　遺物総数240点が出土したが、接合関係はほとんど見られず、1の須恵器坏底部と2の土師器土釜の2個体であった。出土遺物から総括的に判断すると10世紀後半に比定できよう。

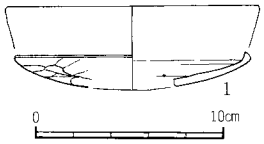


第111図　H－46号住居址出土遺物（1/4）

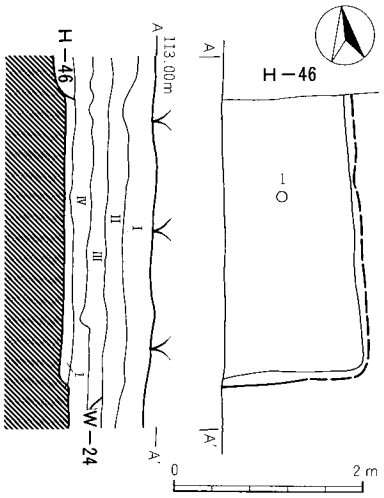
H－47号住居址

遺構　本住居址はB・C－1・2グリッドに位置し、北壁をH－46に切られている。住居址西半は調査区域外にあたるため完掘できなかった。東壁の方位N－3°－Eを測る。確認面からの壁高は12cmで比較的緩やかに立ち上がる。床面は平坦に構築され、平均8cm前後の貼床が、軽石混じりの暗褐色土とロームブロックを混合したもので施されている。ピット、カマド、周溝は確認されなかった。

出土遺物　総数60点と少なく、小片が多く接合関係は見られなかった。実測可能遺物は土師器坏の底部1個体で、器形の特徴から、6世紀前半に比定できよう。



第112図　H－47号住居址出土遺物（1/4）



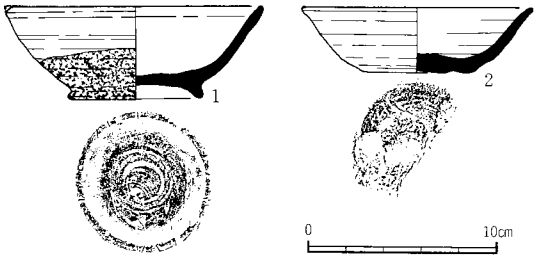
1層　黒褐色土層　パミス2％シルトブロック2％混入の細砂。固くしまる。

第113図　H－47号住居址（1/80）

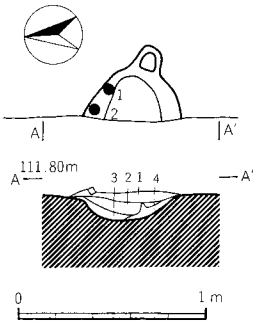
H－49号住居址

遺構　カマドの燃焼部、煙道部の一部が確認された。良く焼けており、舟底形を呈す。

出土遺物　実測可能遺物は、糸切り後高台を付した1の須恵器埦、糸切痕の残る2の須恵器埦の2個体であった。10世紀前半に比定できる。



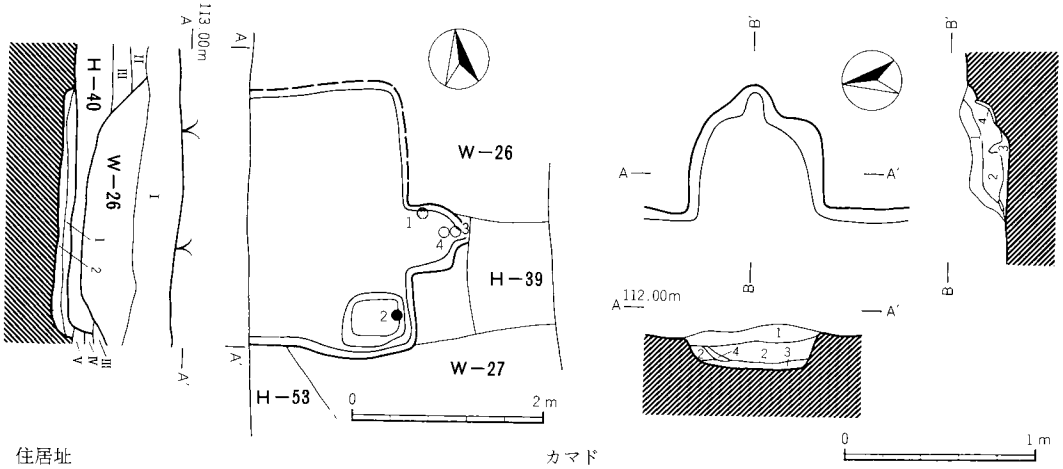
第114図　H－49号住居址出土遺物（1/4）



1層　黒褐色土層　φ1㎜前後の軽石含む細砂。焼土、炭化物若干混入。
2層　黒褐色土層　焼土10％炭火物5％若干灰含む
3層　極暗褐色土層　焼土10％ロームブロック、炭火物、灰を若干含む。
4層　極暗赤褐色土層　焼土15％若干の炭化物を含む。しまり粘性共になし。

第115図　H－49号住居址カマド（1/40）

H－50号住居址



住居址

1層　黒褐色土層　シルト1％カーボン1％焼土1％含む細砂。若干しまる。

2層　黒褐色土層　パミス3％ローム2％焼土1％含む細砂非常に固くしまる。

カマド

1層　黒褐色土層　φ1～2㎜の軽石3％含む細砂。

2層　極暗褐色土層　φ2㎜前後の軽石5％焼土5％含む。

3層　褐色土層　灰30％焼土5％若干のローム含む細砂。

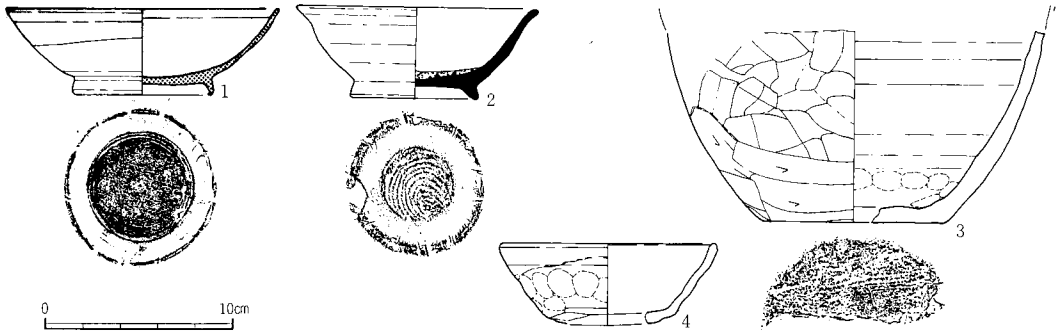
4層　極暗褐色土層　φ2㎜前後の軽石3％含む細砂。

第116図　H－50号住居址とカマド（1/80，1/40）

遺構　本住居址は調査区の中央やや北寄り、D－1・2グリッドに位置する。調査によって½の部分が明らかになったが残りは調査区域外のため確認できなかった。平面形は、正方形もしくは横長長方形を呈すると考えられる。調査した範囲での規模は、南北軸2.85m、東西軸（1.76m）主軸方位N－94°－Eを指す。確認壁高15cm、立ち上がり角度62°を計る。床面は、中央から南へ4cm程下がる。南東隅には、66cm×54cmの規模で貯蔵穴が掘り込まれている。

カマド　東壁の南寄りに設置されている。全長71cm、最大幅70cmを計り、舟底形を呈し、屋外へ突出する形態である。主軸はN－99°－Eを指す。

出土遺物　総数99点出土した。1は灰釉陶器高台埦で、三日月高台1類を付し、口縁端部は丸く曲げている。施釉は刷毛がけで胎土から猿投窯系K－90併行とみられる。2は須恵器埦で右方向回転糸切り後高台を付す。カマド付近に遺物は集中し、10世紀前半代に比定される。

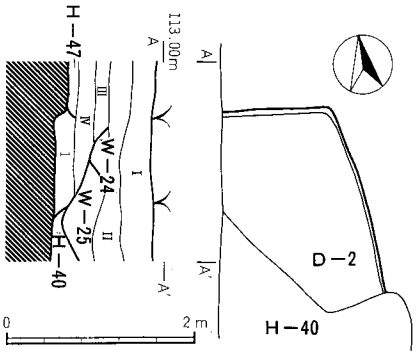


第117図　H－50号住居址出土遺物（1/4）

H－51号住居址

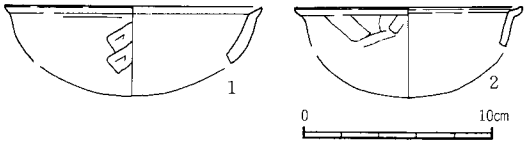
遺構　本住居址は、C・D－2グリッドに位置し、H－40に南壁を切られている。東壁方位はN－7°－Wを指し、東壁はやや丸味をもっているが北壁は直線的に延びる。確認面からの壁高は16cmで、65°の角度で立ち上がる。覆土は、パミス、ローム粒を含む黒褐色土である。ピット、カマド、周溝は検出されなかった。

出土遺物　総数77点で、遺構全体に小片の分布が見られた。接合関係もあまり見られず、図示した2点も口縁部のみであった。1、2共に体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する特徴をみせる。これら器形の特徴から、6世紀前半に位置づけられる。



1層　黒褐色土層　パミス3％ローム5％焼土1％含む細砂。若干しまる。

第118図　H－51号住居址（1/80）

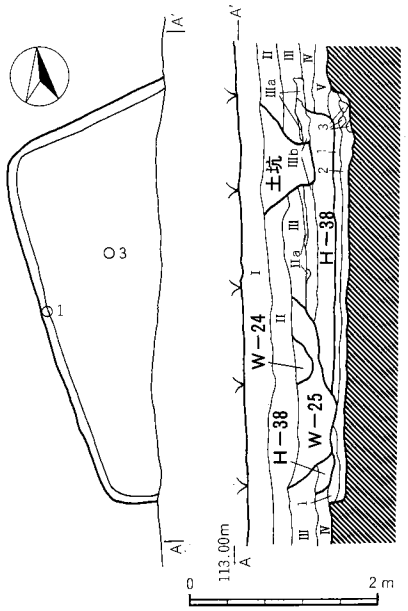


第119図　H－51号住居址出土遺物（1/4）

H－52号住居址

遺構　発掘区域の北、東壁に接するC・D－2グリッドに位置する。西壁方位はN－12°－Wを指し、各壁とも直線的に延び、コーナーは隅丸である。覆土は概ね黒褐色土であるが、ロームブロックの混入も見られる。確認面からの壁高は平均17cmを測り、立ち上がり角度は81°と急傾斜である。床面はほぼ平坦に構築されているが北壁際で6cmほどの掘り込みが見られる。

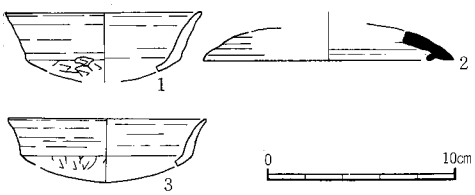
出土遺物　本住居址からの出土遺物は、総数186点で実測可能な3個体以外はすべて小破片であり、その大部分が西壁際に集中している。1と3は共に体部から稜をもって区画された口縁がわずかに外傾しながら立ち上がる土師器坏で、2はカエリを有する須恵器坏蓋である。以上の様な出土遺物から7世紀中葉に比定できる。



1層　黒褐色土層　パミス3％粘土ブロック10％カーボン1％混入する細砂。若干しまり、粘性大。

2層　黒褐色土層　パミス1％カーボン3％焼土1％粘土ブロック5％混入する細砂。若干しまる。

3層　黄褐色土層　ローム層。



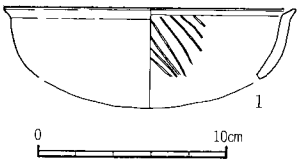
第120図　H－52号住居址出土遺物（1/4）

第121図　H－52号住居址（1/80）

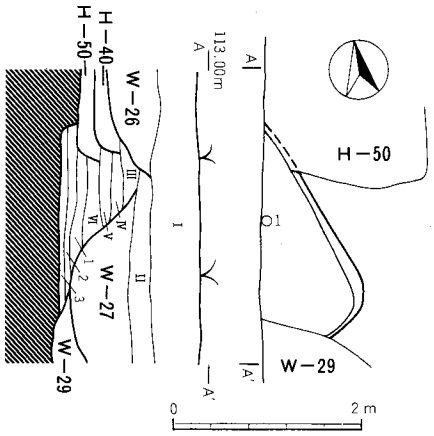
H—53号住居址

遺構　発掘区中央西壁に接するD・E—1グリッドに位置し、南壁はW—29に切られ、東壁北半はH—50に切られる。東壁方位N—25°—Wを指す。確認面からの壁高は19cmで立ち上がり角度69°を測る。床面は小さな凹凸が見られるものの比較的平坦に構築されている。

出土遺物　総数48点と少なく、すべて小片であった。1は、壁際床面直上から出土したもので、口縁部はわずかに外反し、内面にミガキをもつ土師器の坏で、唯一実測可能な遺物である。6世紀前半に比定できる。



第122図　H—53号住居址出土遺物（1/4）



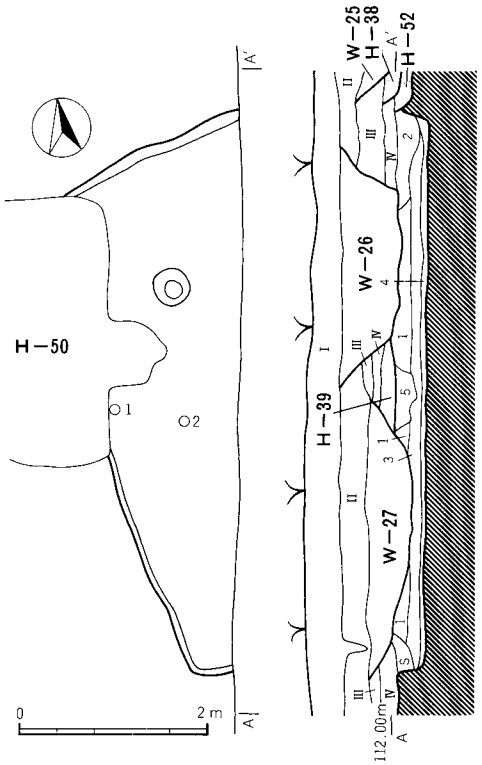
1層　黒褐色土層　パミス5％シルト10％焼土3％含む細砂。固くしまる。
2層　黒褐色土層　CP5％灰5％カーボン2％焼土3％含む細砂。固くしまる。粘性あり。
3層　黒褐色土層　CP3％焼土、カーボン、ロームブロック1％シルト2％含む細砂。

第123図　H—53号住居址（1/80）

H—54号住居址

遺構　本住居址は、発掘区中央、東壁に接するD・E—1・2グリッドに位置し、北西コーナーをH—50に切られている。プランは正方形もしくは南北に長い長方形を呈すると考えられる。調査した範囲での規模は、南北軸5.24m、東西軸(2.6m)であり、各辺とも直線的に構成されている。西壁方位はN—14°—Wを指す。確認は全体層序Ⅳ層で検出でき、平均26cmの壁高を測る。壁の立ち上がりは72°と急傾斜である。覆土は、細かく見れば5層に分けられるが、概ねCPを含む柔らかい細砂である。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土で5～8cm程度貼床され、平坦な面に構築されている。掘り方は凹凸の多い不整形な面が広がる。カマド、ピット、周溝は検出されなかった。

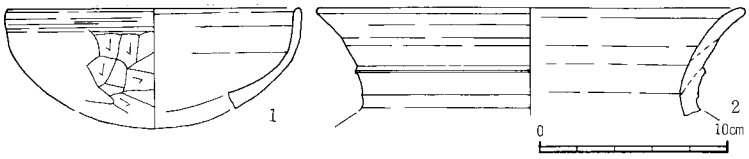
遺物出土状態　遺物は遺構全体に広く分布



1層　黒褐色土層　CP3％カーボン、焼土1％含む細砂。
2層　黒褐色土層　CP、FP5％シルト3％含む細砂。
3層　黒色土層　CP5％カーボン5％含む細砂。
4層　黒褐色土層　粘土30％CP2％灰30％含む細砂。
5層　黒褐色土層　CP、FP2％シルト3％含む細砂。

第124図　H—54号住居址（1/80）

しており、接合された遺物は床面付近が多かった。1の坏は西壁中央の壁際から、2の甕は西壁中央やや内に入って出土した。



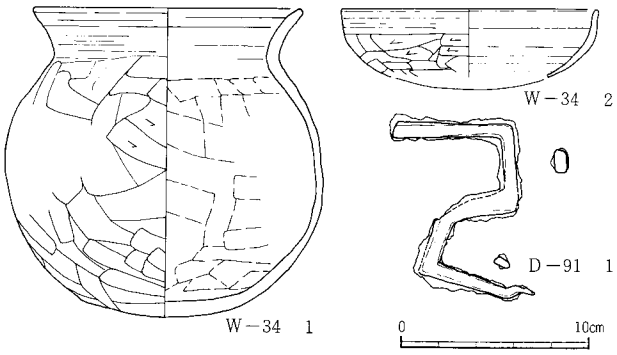
第125図　H－54号住居址出土遺物（1/4）

出土遺物　総数156点で、すべてが小破片で、接合関係も見られず、実測可能遺物は土師器坏1個体と甕1個体であった。1は素口縁を有する坏で床面直上から出土していることからも本址の時期決定上有力な資料である。2は二重口縁をもつ土師器甕である。年代観は出土遺物から6世紀前半代と思われる。

土坑・溝

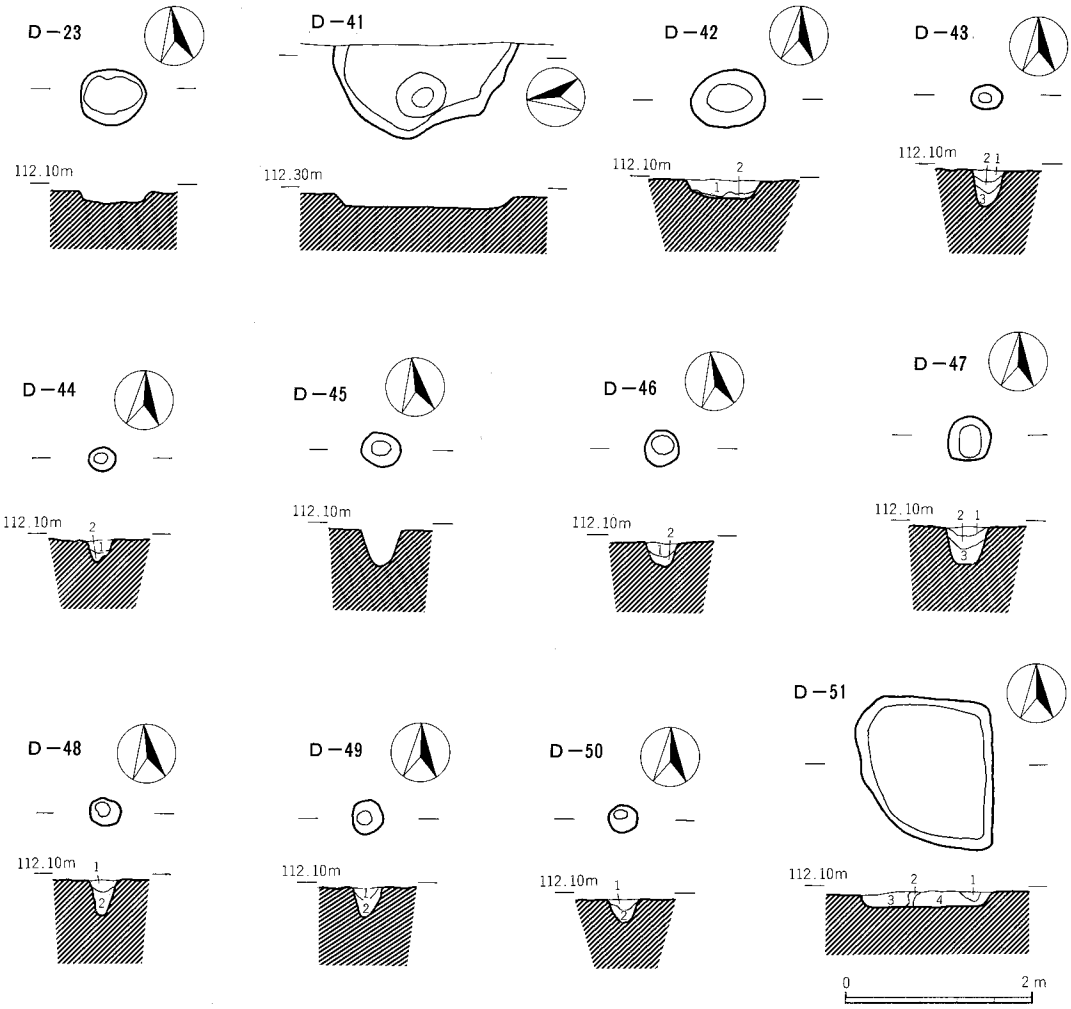
本トレンチから検出された土坑は38基、溝は7条であった。

土坑　トレンチ全域に散在しているが、特にG・Hグリッドにその集中が見られる。これら土坑からは出土遺物が少なく、10点前後のものがほとんどでD—51が91点、D—70が55点と多かった。平面形は、円形プランを有するものが25基、楕円形5基、長方形2基、不整円形3基、不整方形3基で⅔が円形プランを有する。また規模的にも長径50cm以下のものが25基と⅔を占めそのほとんどが南部に集中している。この集中地域には他で見られるような住居址の密集はなく、掘立柱建物址の柱穴とも考えられるが、ピットの配列に規則性がなく建物址として組むことはできなかった。出土遺物も少なく、正確な時期決定はできないが覆土に見られるＢＰからすべて中世以降と考えられる。



第126図　Ｃトレンチ出土遺物（1/4）

溝　W—24は、C－1・2グリッドに位置し、東西に走る小規模な溝である。上端幅38cm、下端幅20cm、深さ16cmを測る。W—25は、C－1・2グリッドに所在し、東から西に走る中規模な溝である。上端幅130cm、下端幅20cmで西壁ではしっかりした逆台形を呈する。W—26はD－1・2グリッドで検出された東西に走る溝で、上端幅168cm、下端幅154cmを測り、東壁での断面でははっきりした逆台形に掘られていることがわかる。W—27は、D・E－1・2グリッドに位置し、西壁際でW—29を切る。上端幅213cm、下端幅140cm、深さ26cmを測り、II層を掘り込んで造られている。W—29は、E・F－1・2グリッドに位置し、西壁際でW—27に切られる。南東から北西に走る溝である。上端幅130cm、下端幅61cm、深さ22cmを測る。IV層を掘り込んで造られる。W



D—42
1層　黒褐色土層　細砂、φ2～3㎜軽石5％含む。若干焼土含む。しまり粘性なし。
2層　極暗褐色土層　細砂、軽石わずか含む。

D—43
1層　黒褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石3～5％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、焼土5％、しまり粘性、やや有り。
3層　黒褐色土層　φ2㎜軽石含む。

D—44
1層　極暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石3～5％含むしまり有り。
2層　黒褐色土層　細砂、しまり粘性なし。

D—46
1層　極暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石5％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、しまりなし、粘性有り。

D—47
1層　黒褐色土層　細砂、φ1㎜軽石1～2％炭火物含む。
2層　黒褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石5％含む。
3層　黒褐色土層　細砂、しまり有り。

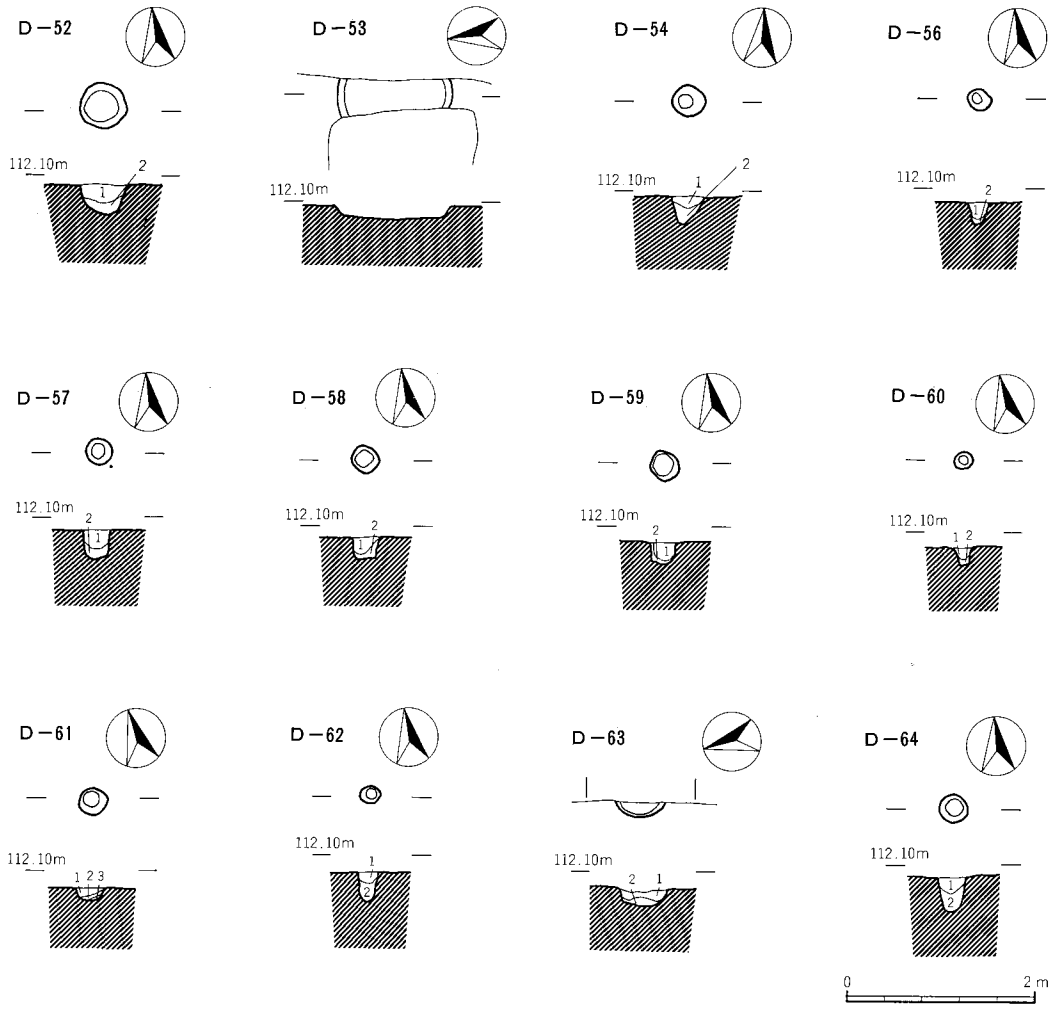
D—48
1層　極暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石3～5％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、粘性有り。

D—49
1層　極暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石5％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、軽石含む、粘性有り。

D—50
1層　暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石5％、若干の焼土を含む。
2層　極暗褐色土層　細砂、φ1～2㎜軽石含む。

D—51
1層　黒褐色土層　細砂、軽石、ローム含む。しまり有り。
2層　極暗褐色土層　細砂、φ1㎜軽石含む。
3層　黒褐色土層　細砂、φ1㎜軽石2～3％含む。しまり、粘性有り。
4層　暗褐色土層　細砂、φ1～3㎜軽石5％含む。

第127図　Cトレンチの土坑A（1/80）



D—52
1層　極暗褐色土層　軽石４％含む細砂。
2層　黒褐色土層　細砂、しまり粘性有り。

D—54
1層　黒褐色土層　軽石５％含む細砂。
2層　極暗褐色土層　軽石、焼土含む細砂しまり有り。

D—56
1層　黒褐色土層　軽石５％含む細砂。
2層　黒褐色土層　細砂。

D—57
1層　黒褐色土層　軽石５％含む。
2層　黒褐色土層　細砂。

D—58
1層　黒褐色土層　軽石５％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、しまり粘性有り。

D—59
1層　黒褐色土層　軽石５％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、しまり粘性有り。

D—60
1層　黒褐色土層　軽石５％含む。
2層　黒褐色土層　細砂、しまり粘性有り。

D—61
1層　黒褐色土層　軽石５％含む。
2層　暗褐色土層。細砂、ローム20％含む。
3層　極暗褐色土層　軽石ローム含む細砂、しまり有り。

D—62
1層　黒褐色土層　軽石含む細砂。
2層　黒褐色土層　細砂。

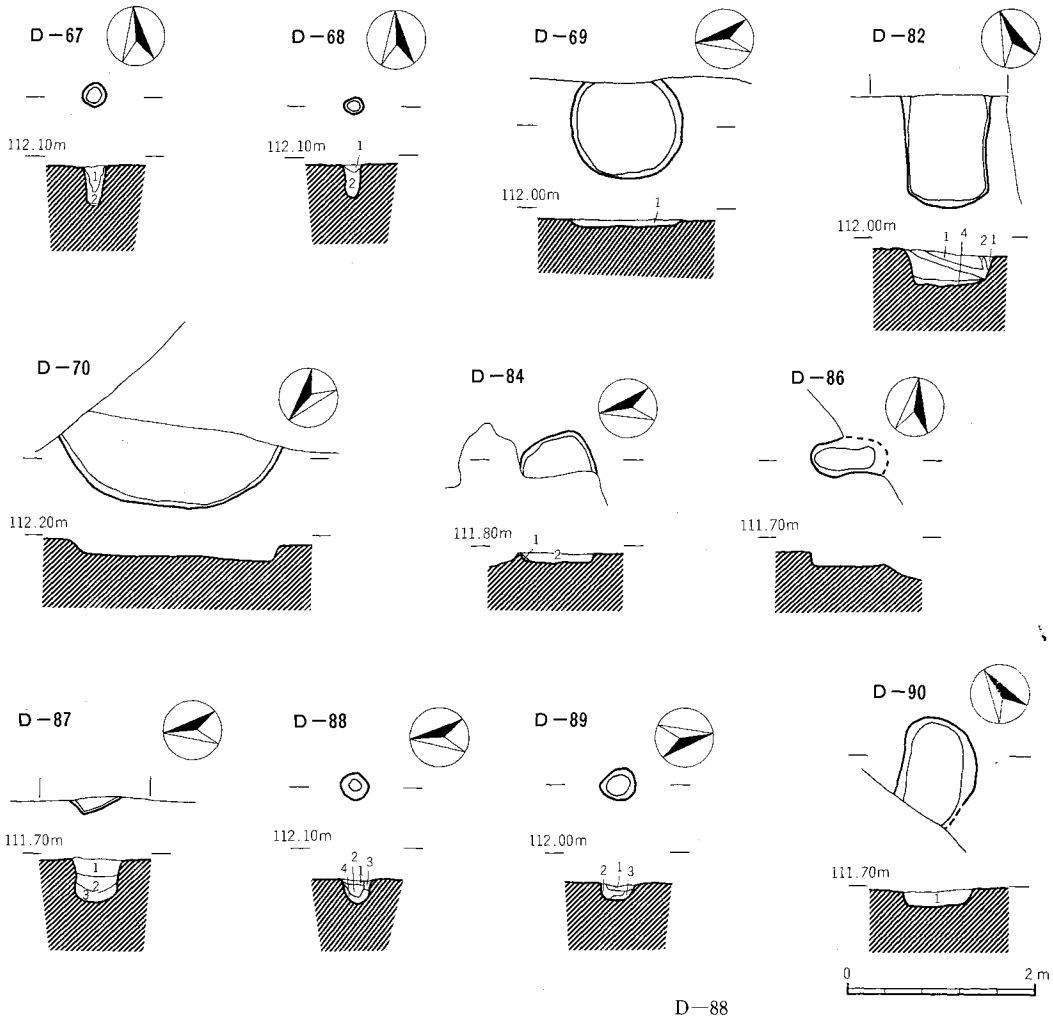
D—63
1層　極暗褐色土層　軽石含む細砂若干の焼土混入。
2層　黒褐色土層　軽石含む細砂。

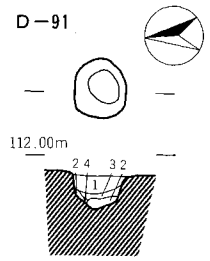
D—64
1層　黒褐色土層　軽石含む細砂。
2層　黒褐色土層　細砂。しまり粘性有り。

D—65
1層極暗褐色土層　軽石含む細砂
2層　黒褐色土層　軽石含む細砂。

D—66
1層　極暗褐色土層　軽石含む細砂
2層　黒褐色土層　軽石含む細砂。

第128図　Ｃトレンチの土坑Ｂ（1/80）





D－67
1層　極暗褐色土層　軽石含む細砂。
2層　黒褐色土層　軽石含む細砂。しまり粘性有り。

D－68
1層　極暗褐色土層　軽石５％含む細砂。
2層　黒褐色土層　軽石含む細砂しまり粘性有り。

D－69
1層　黒褐色土層　軽石５％含む細砂。

D－82
1層　黒褐色土層　ローム60％ＢＰ20％シルト５％混入する細砂。
2層　黒褐色土層　ＢＰ60％ローム５％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　ローム20％パミス２％細砂。
4層　黒褐色土層　パミス５％ローム３％細砂。

D－84
1層　極暗褐色土層　軽石、ローム含む細砂。
2層　黒褐色土層　軽石５％ローム20％含む細砂、しまり粘性有り。

D－87
1層　黒色土層　パミス２％焼土混入する細砂。
2層　黒色土層　パミス３％含む細砂。
3層　黒褐色土層　パミス２％シルト含む細砂。

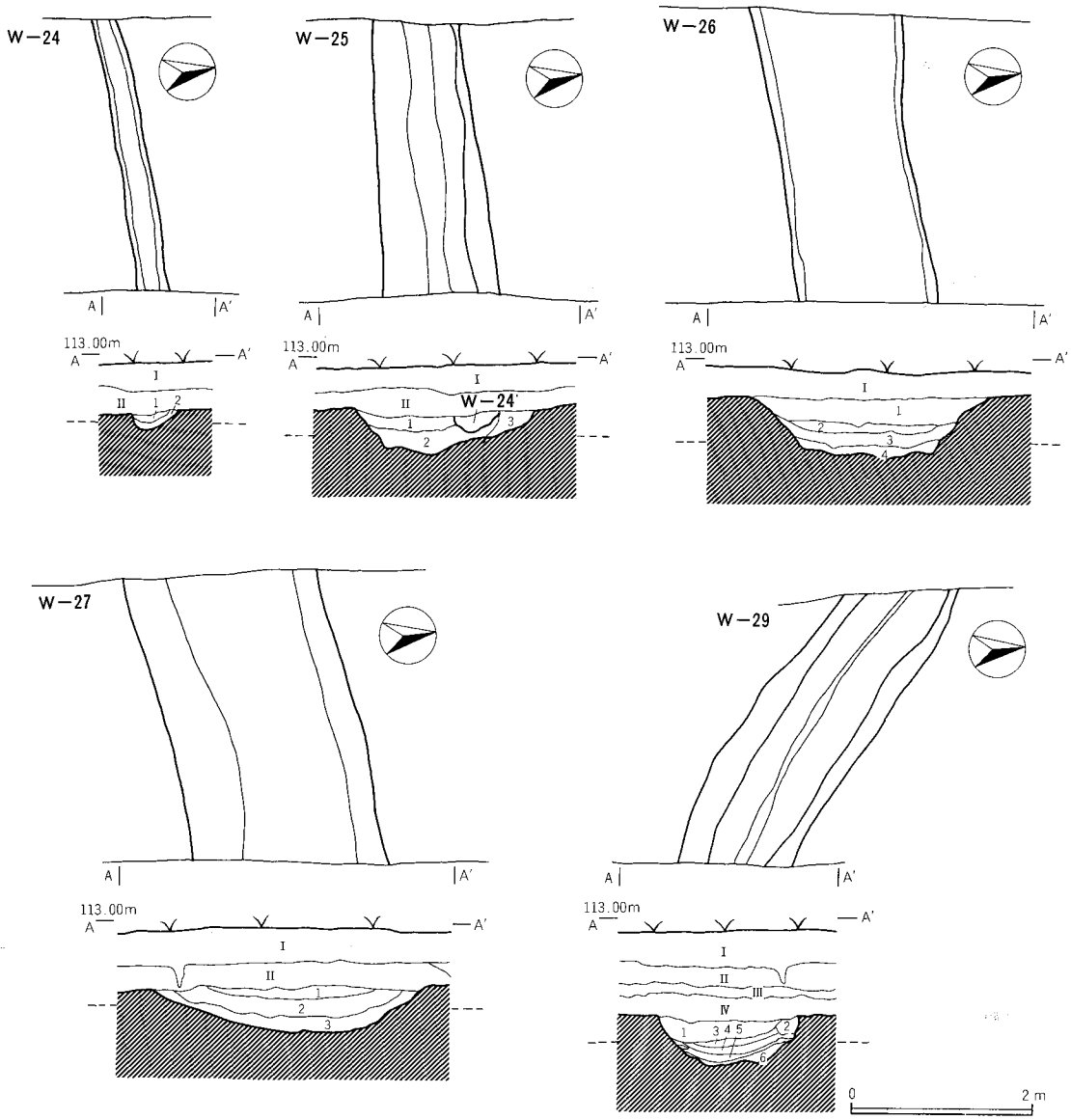
D－88
1層　黒褐色土層　軽石10％ローム含む細砂。
2層　黒色土層　軽石10％焼土混入する細砂。
3層　極暗褐色土層　軽石、ローム含む細砂。
4層　黒褐色土層　軽石、ローム10％含む細砂

D－89
1層　暗褐色土層　軽石、ローム含む細砂。
2層　極暗褐色土層　ローム30％含む。しまり粘性有り。
3層　暗褐色土層　軽石、ローム10％含む。

D－90
1層　赤黒色土層　ＣＰ１％、焼土１％混入するシルト。

D－91
1層　黒褐色土層　軽石３％ローム含む細砂
2層　暗褐色土層　ローム40％軽石混入する細砂、しまり粘性有り。
3層　褐色土層　ローム50％含む細砂。
4層　極暗褐色土層　若干の軽石を含む細砂

第129図　Ｃトレンチの土坑Ｃ（1/80）



W—24
1層　灰褐色土層　ＢＰ60％ローム２％混入の細砂。
2層　黒褐色土層　パミス40％ローム１％混入の細砂。

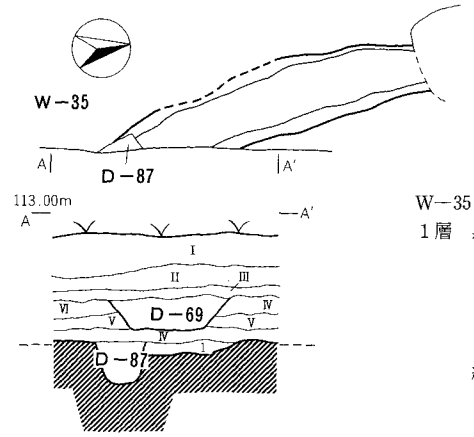
W—25
1層　黒褐色土層　ＢＰ30％ローム２％混入の細砂。
2層　暗褐色土層　パミス10％シルト５％混入の細砂。
3層　灰褐色土層　パミス80％カーボン１％混入の細砂。

W—26
1層　暗褐色土層　パミス５％カーボン、焼土１％混入の細砂。固くしまる。
2層　黒褐色土層　パミス３％ローム１％混入の細砂。
3層　黒褐色土層　パミス５％焼土、シルト２％混入の細砂。
4層　黒色土層　ＢＰ３％ＦＰ１％焼土、カーボン１％混入の細砂。若干しまる。

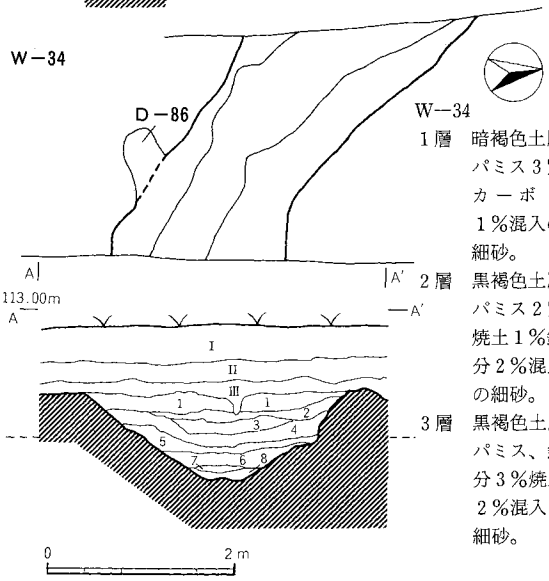
W—27
1層　暗褐色土層　パミス５％焼土、シルト１％混入の細砂。
2層　黒褐色土層　パミス３％ローム２％カーボン１％混入する細砂。若干しまる。
3層　暗褐色土層　パミス５％ローム１％焼土混入細砂。

W—29
1層　黒褐色土層　φ１～４㎜の軽石５％含む細砂。
2層　灰黄褐色土層　パミス２％混入する細砂。
3層　暗褐色土層　φ１～２㎜の軽石混入の細砂。
4層　極暗褐色土層　軽石、ロームわずかに含む細砂。しまり粘性共になし。
5層　黒褐色土層　ローム、軽石を含む細砂。しまり粘性共になし。
6層　黒褐色土層　パミス１％ローム３％混入する細砂。

第130図　Ｗ－24、25、26、27、29号溝（1/80）



W－35
1層　黒色土層　パミス3％カーボン、粘土1％シルト2％混入する細砂、粘性しまり共にあり。

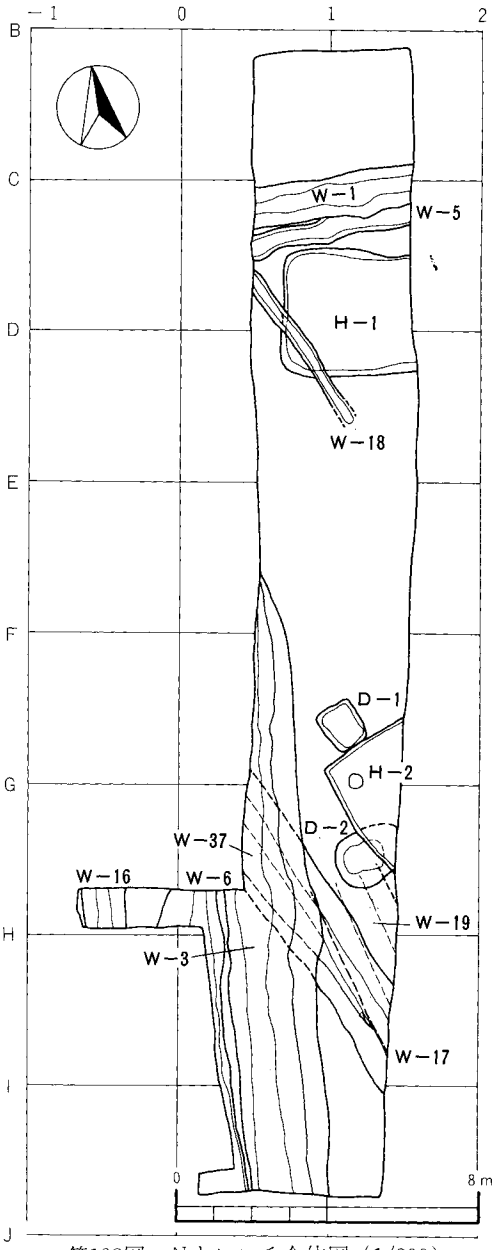


W－34
1層　暗褐色土層　パミス3％カーボン1％混入の細砂。
2層　黒褐色土層　パミス2％焼土1％鉄分2％混入の細砂。
3層　黒褐色土層　パミス、鉄分3％焼土2％混入の細砂。
4層　黒褐色土層　パミス5％カーボン、焼土1％混入の細砂。
5層　黒褐色土層　パミス3％カーボン1％鉄分5％混入の細砂。
6層　黒褐色土層　パミス1％鉄分5％混入するシルト。
7層　暗褐色土層　ラミナ状の粗砂。しまりなくやわらかい。
8層　黒褐色土層　パミス1％カーボン1％混入するシルト。ラミナ状。粘性大。若干しまる。

第131図　W－34、35号溝（1/80）

5　Nトレンチ

Nトレンチは昨年度調査のCトレンチと本年度調査のCトレンチの間に挟まれた南北方向30mのトレンチである。元総社小学校校舎から真東方向90mの位置で、トレンチの西側は道路を挟んで水田面まで比高差1mあり、牛池川の氾濫原となっている。この低地からは昨年度16ト－34・W－35は、F・G－1・2グリッドに位置し、やはり南東から北西への流れをしめす。この2条の溝は、遺構との切り合い、出土遺物等から他の溝より古く、古墳時代と考えられる。本トレンチで検出された7条の溝は、角度の差こそあれ、すべて東から西への流れをもつものと推定される。

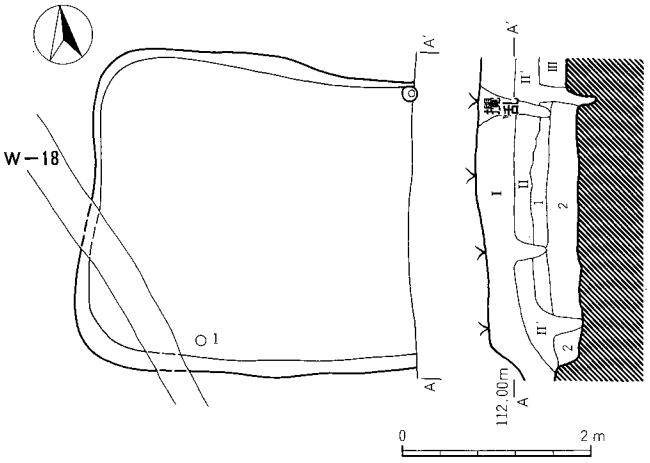


第132図　Nトレンチ全体図（1/200）

レンチの調査でＦＡ下の木器や木製部材を多量に出土した。今年度の調査では、この低地の東側台地上縁辺部に当るためＦＡ下の時期の集落を想定していたが、同時期の住居址は検出されずその集落を囲んだと思われる環濠と、それを壊して条里を形成したと思われる大溝・住居址２軒・土坑２基・中世以降の溝等の遺構を検出した。現地表面から浅い割りに遺構の残存状況が良かったのは、本トレンチ上に旧家の母屋があり、柱以外の攪乱がなかったためである。

Ｈ－１号住居址

遺構　Ｎトレンチの北部よりに位置する。南西隅をＷ—18が重複し一部を壊されている。平面形は東西方向に長い方形で、主軸方位Ｎ—93°—Ｅ、短軸長３m36cmを測る。カマドは東壁に付くと推定され、壁高は24cmで、周溝・ピットはない。床面は黒褐色土を貼床して固くしまっていた。

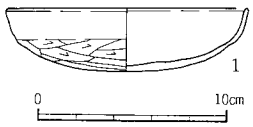


１層　黒褐色土層　ＣＰ２％焼土１％酸化鉄１％混入の細砂。固くしまる。
２層　黒褐色土層　ＣＰ１％（φ１cm大）焼土２％混入する細砂。粘性しまり大。

第133図　Ｈ－１号住居址（1/80）

出土遺物　遺物は総数で65点出土した。大半は土師器小破片で殆ど接合されなかった。

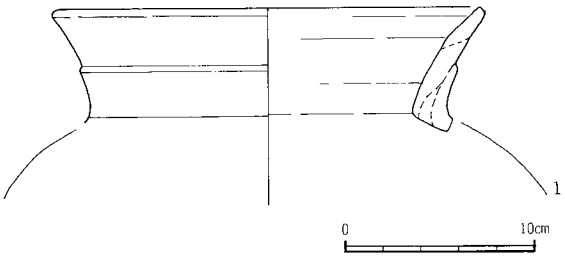
１は比較的薄手の土師器坏である。丸味を帯びた浅身の器形で、口縁は開き気味に立ち上がる。底部にのみヘラケズリを施し、口縁部ナデ調整による。共伴の他の小破片等からみて８世紀後半代に比定されるものである。



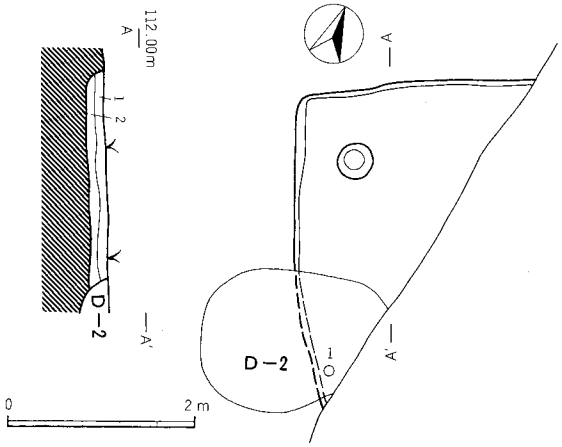
第134図　Ｈ－１号住居址出土遺物（1/4）

Ｈ－２号住居址

遺構　Ｎトレンチ中央部Ｆ・Ｇ－２グリッドに所在する。２基の土坑と重複し、Ｄ—21よりは古くＤ－１よりは新しい。平面形は正方形と推定され、住居方位は北壁でＮ—65°—Ｅを測る。覆土はＣＰ混じりの黒褐色土で、床面は比較的現地表面に近い位置に構築され、壁高は16cmであった。周溝・炉址は確認されなかったがピットは北西隅に主柱穴P_1が検出された。深さ30cm、径37cmの円形で、掘り方はしっか



第135図　Ｈ－２号住居址出土遺物（1/4）



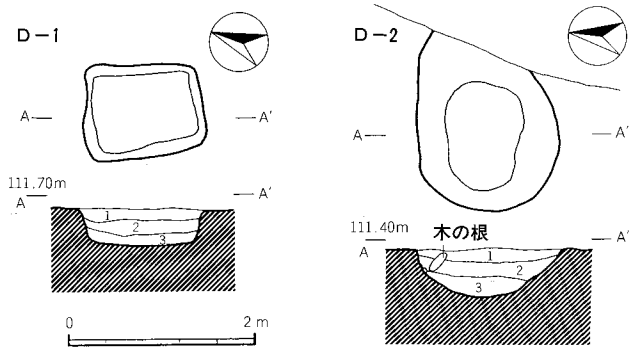
1層　黒褐色土層　焼土1％ＣＰ2％混入する細砂。
2層　暗褐色土層　焼土2％ＣＰ3％酸化鉄5％混入細砂。

第136図　Ｈ－２号住居址（1/80）

りしている。

遺物出土状態　遺物は総数17点出土した。大半は石田川式土器のＳ字状口縁台付甕の小破片であった。１は二重口縁の壺型土器で、口縁付近を残して他を欠損する。有段部の稜線はシャープで口縁端部も面取りされる。肉厚なつくりで胎土には小砂粒を多量に混入する。供伴するＳ字状口縁の年代観からみて後出すると思われ、Ｄ－２に伴う遺物の可能性が大きい。台付甕の小破片は肩部横線の消失したものであり、断面覆土の所見からもＣＰ以降は確実である。４世紀後半代の所産と考えられる。

土　　坑



Ｄ－１
1層　暗褐色土層　ＣＰ3％混入細砂。
2層　暗褐色土層　ＣＰ1％混入細砂。
3層　黒褐色土層　ＣＰ1％混入細砂。

Ｄ－２
1層　黒褐色土層　ＣＰ5％混入細砂。
2層　黒色土層　ＣＰ2％混入細砂。
3層　黒褐色土層　ＣＰ1％混入細砂。

第137図　Ｄ－１、２号土坑（1/80）

Ｄ－１　Ｎトレンチ Ｆ－１・２グリッドに所在する。Ｈ－２に先行する隅丸方形の土坑である。遺物は総数で19点出土し、すべて石田川式土器破片である。断面覆土もＨ－２に近い状態を呈す。

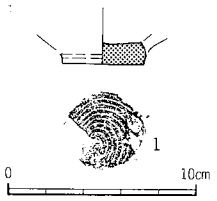
Ｄ－２　Ｎトレンチ Ｇ－２グリッドに所在する。Ｈ－２に後出する楕円形の土坑で、東側一部を残してほぼ完掘できた。Ｈ－２で図示した遺物が伴う可能性を持つ。

溝

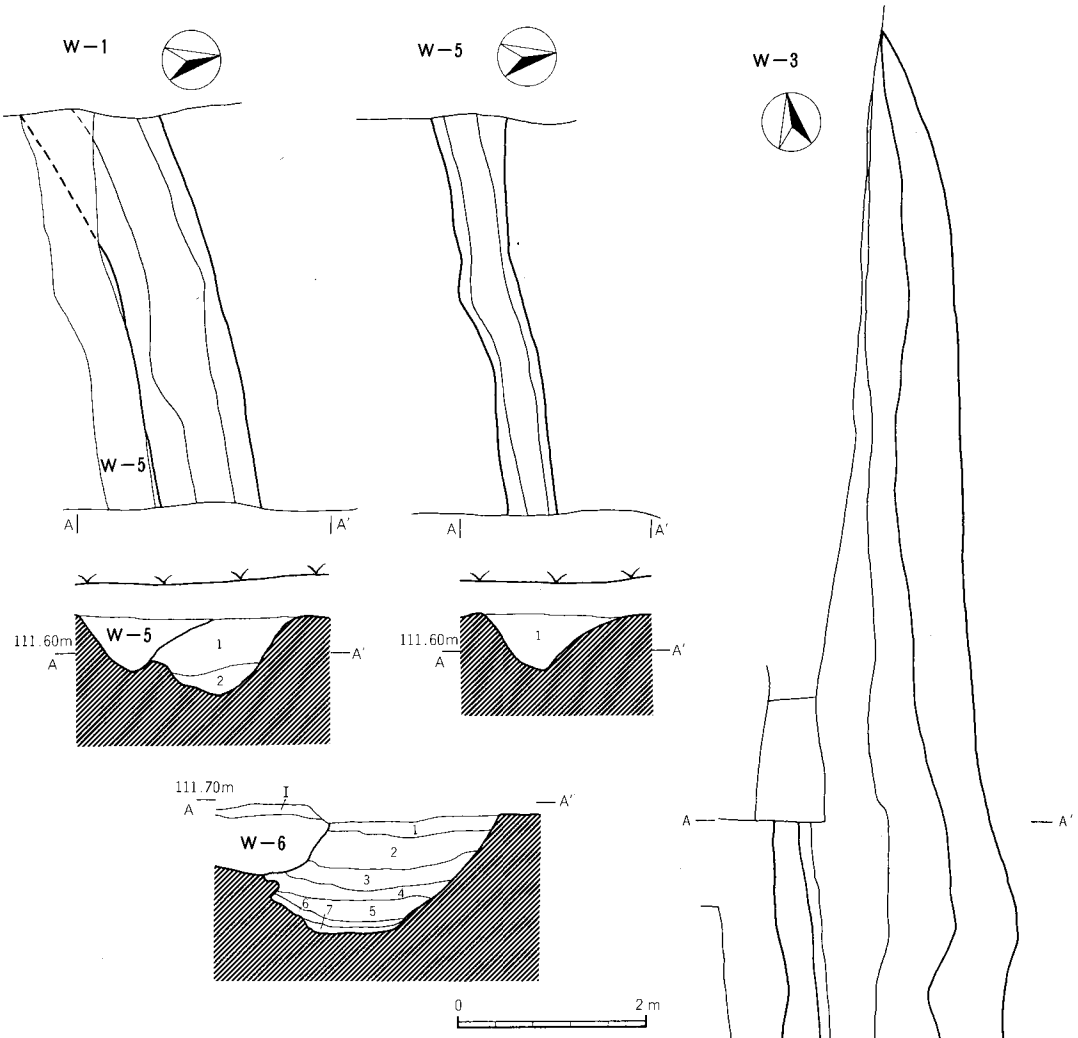
Ｎトレンチでは９条の溝状遺構が調査された。覆土の状況から新しい溝もあると推定される。

Ｗ－１　トレンチ北側を東西方向に走行する。Ｗ－５に一部切られている。覆土状況からＢ軽石降下以降の古代末～中世の溝と推定される。

Ｗ－３　ほぼ真北方向を走行する。底面形状は逆台形のしっかりした溝である。Ｗ－17より新しくＷ－６より古い。出土遺物は2,516点の土器片を検出しており、10世紀後半代を下限とする。図示した緑釉陶器は耳皿の底部と思われ柱状高台の糸切り未調整である。遺構の性格は、台地縁辺を縦



第138図　Ｗ－３号溝出土遺物（1/4）



W－1

1層　暗褐色土層　パミス３％（ＦＰ、ＣＰ）カーボン、焼土１％混入細砂。

2層　暗褐色土層　パミス５％（ＦＰ、ＣＰ）カーボン、ローム１％混入細砂。

W－5

1層　黒褐色土層　パミス、焼土、ローム１％混入の細砂。固くしまる。

W－3

1層　黒褐色土層　パミス１％ローム１％混入の細砂。固くしまる。

2層　暗褐色土層　パミス３％カーボン１％焼土１％ローム１％混入する細砂。

3層　暗褐色土層　パミス５％カーボン、ローム、シルト、焼土１％混入する細砂。

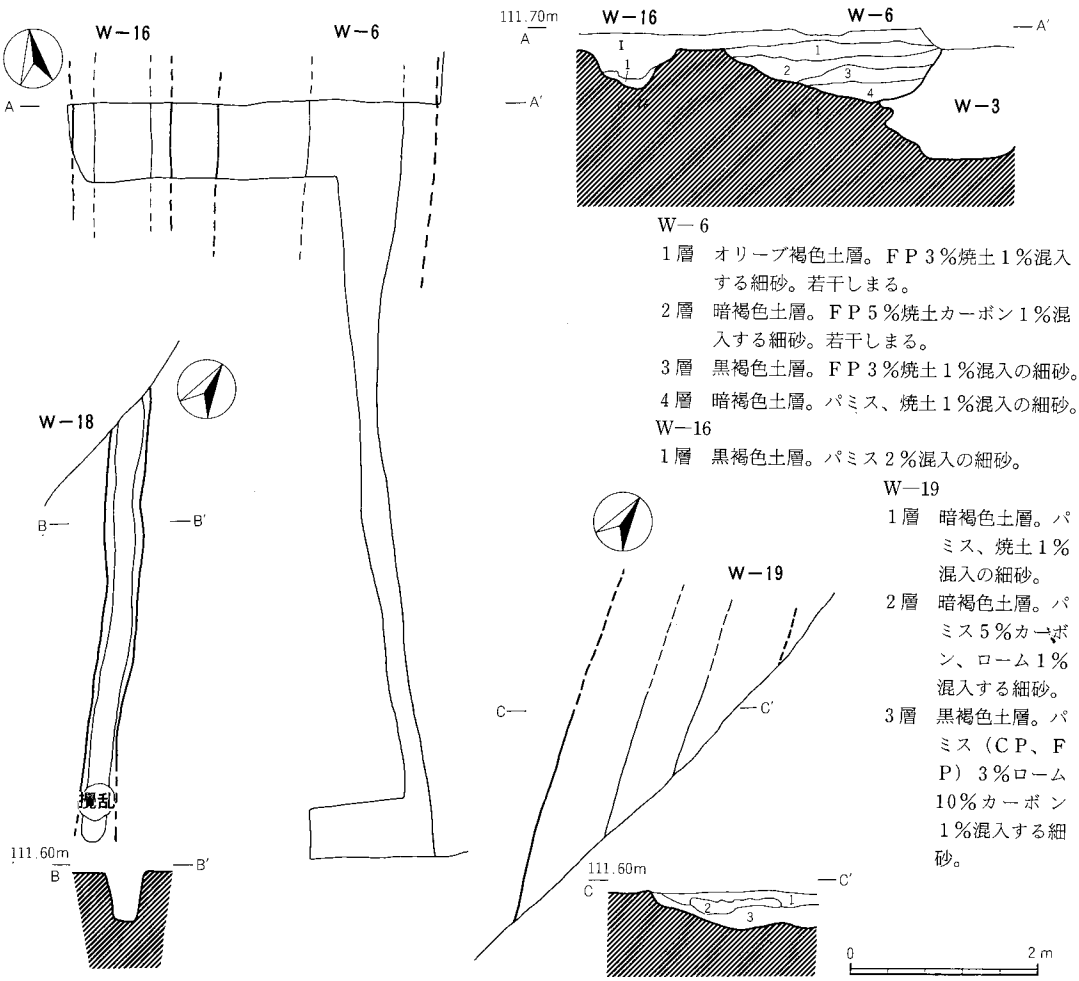
4層　黒褐色土層　パミス３％（ＣＰ、ＦＰ）ローム10％カーボン１％混入する細砂。粘性しまりあり。

5層　黒褐色土層　パミス、カーボン１％ロームブロック（φ３cm大）30％混入する細砂。粘性しまりあり。

6層　黒褐色土層　パミス、ローム１％混入する細砂。粘性大。

7層　黒褐色土層　パミス１％ローム１％混入する粗砂。若干しまる。

第139図　Ｗ－１、３、５号溝（1/80）



第140図　W－６、16、18、19号溝（1/80）

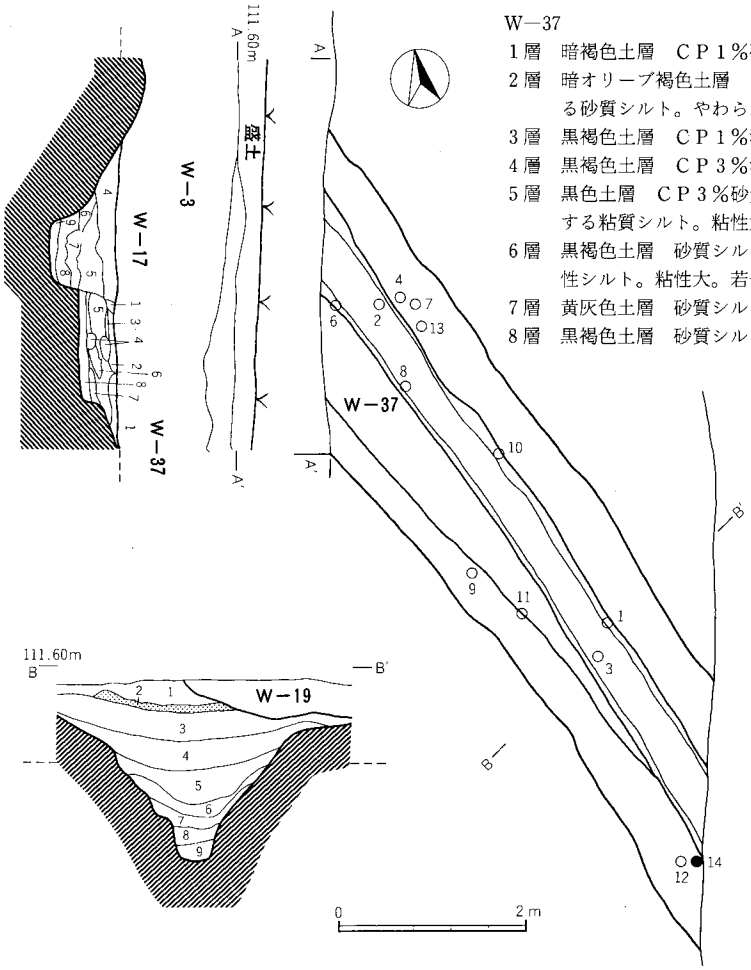
走することや、方向性からみて、国府とそれに関連した条里や区画に伴うものと推定される。なお６・Ｑトレンチ確認のW－30とは同一の溝であると推定される。

W－５　トレンチ北方を東西方向に走行する。W－１より新しく、覆土の状況から近世以降と推定され、あるいは調査前に壊された旧家の区画に伴うものとも思われる。

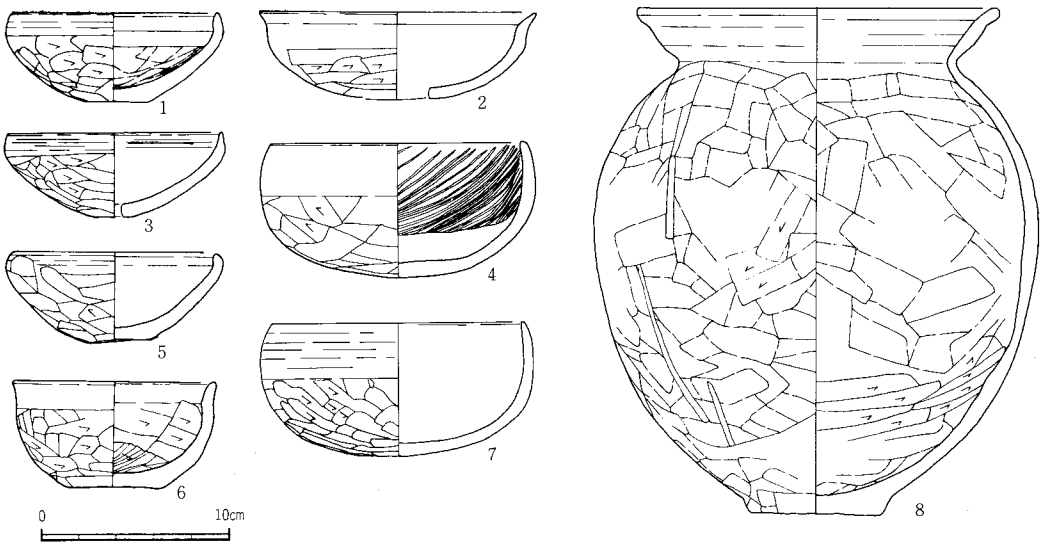
W－６　W－３を壊してほぼ平行する。覆土は新しく寛永通宝を出土している。

W－16　トレンチ拡張部で確認。現地表面に近い新しい溝、近代以降と推定される。

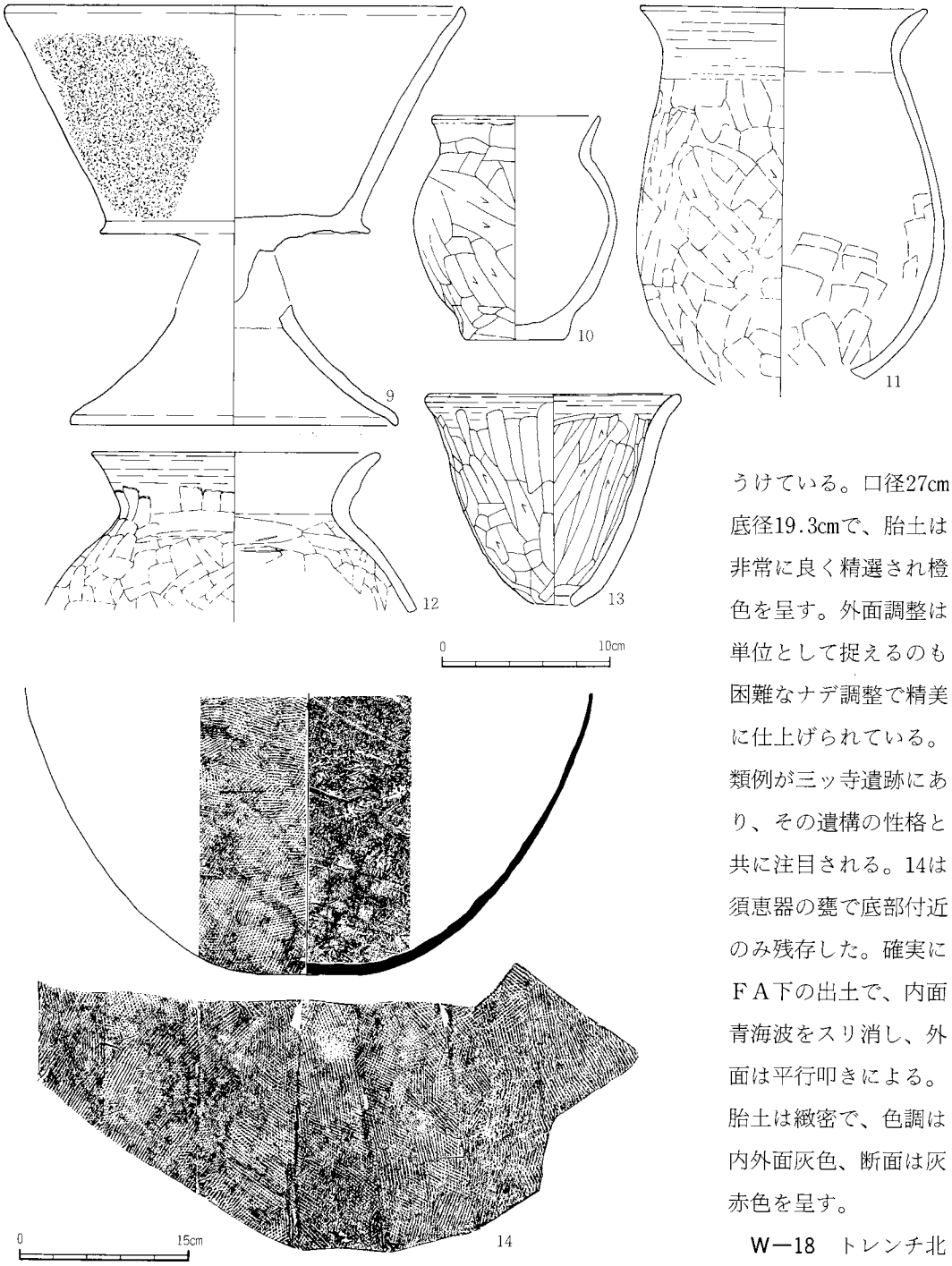
W－17　ＦＡ純層を覆土上面に堆積する。形状は薬研状を呈し、底面はしっかりしていて水流の痕跡は無い。走行方位はＮ－26°－Ｗで切合いはW－39より新しく、W－３、19より古い。出土遺物は総数1,064点であったが、残存状況の良いものが多く、時期的にもＦＡ下のセットとして問題ない。坏埦類は７点図示したが模倣坏は無く内斜口縁と素口縁、それに平底で端部を屈曲させるものなどが出土した。９は大型の高坏で脚と坏部の接合部を欠損する。坏部外面は二次焼成を



第141図　W−17号溝（1/80）



第142図　W−17号溝出土遺物（1/4）



第143図　W－17号溝出土遺物（1/4)(1/6)

うけている。口径27cm底径19.3cmで、胎土は非常に良く精選され橙色を呈す。外面調整は単位として捉えるのも困難なナデ調整で精美に仕上げられている。類例が三ッ寺遺跡にあり、その遺構の性格と共に注目される。14は須恵器の甕で底部付近のみ残存した。確実にＦＡ下の出土で、内面青海波をスリ消し、外面は平行叩きによる。胎土は緻密で、色調は内外面灰色、断面は灰赤色を呈す。

W—18　トレンチ北方で検出、H—１を壊して走行する。覆土状況からＢＰ降下前の平安時代の溝と推定される。遺物は小破片が12点出土。

W—19　W—17を破壊して走行し、セカンダリーなＦＡと小砂礫ラミナを多量に流入し、一時期は相当量の水流があったと推定される。時期は古墳時代終末であろうか。

6　Oトレンチ

Oトレンチは本調査地域の最南端に位置し、地形は北から南に緩やかに傾斜する平坦地である。本トレンチの西70mには牛池川が流れ、同河川の氾濫原上に位置する。遺構は主に地表下約60～80cmのところに堆積する地山面で検出した。

本トレンチからは、溝11条、土坑1基、落ち込み1基が検出された。以下各遺構について説明していきたい。

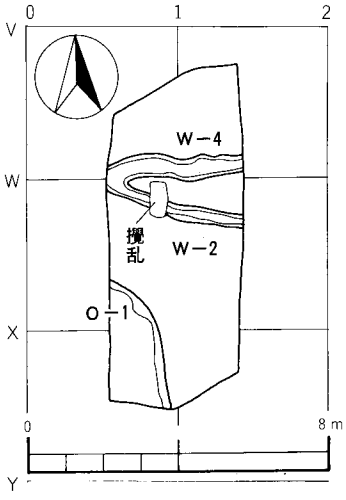
W－7　本トレンチの北、K－0・1グリッドに位置し、南東から北西に流れる中規模な溝である。規模は上端幅160cm、下端幅65cm、深さ23cmを測る。出土遺物総数109点で、すべて小片であり接合するには至らなかった。緑釉陶器の破片1点も検出されている。

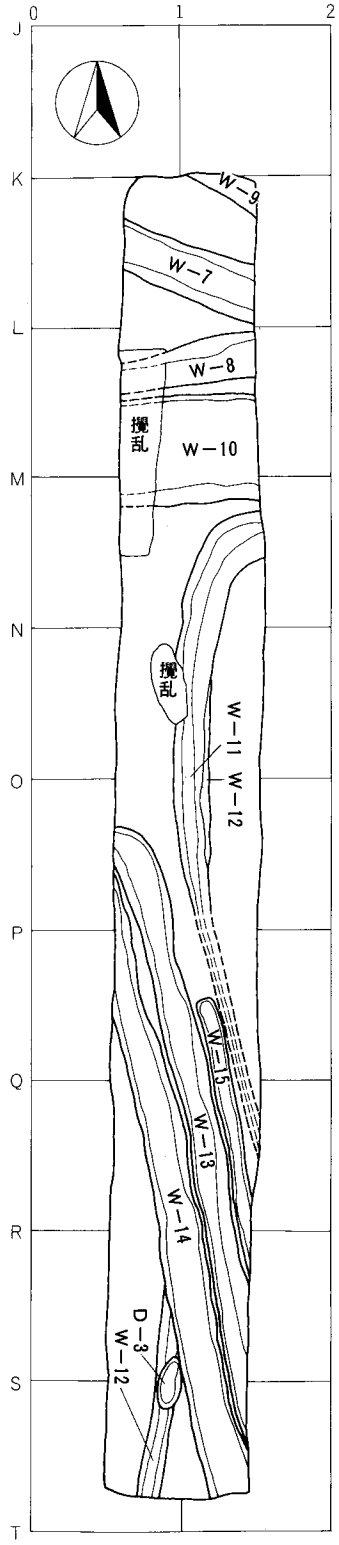
W－8　L－0・1グリッドに位置し、南壁をW－10に切られる。規模は上端幅195cm、下端幅180cm、深さ20cmを測る。本溝からは203個という夥しい数の石が検出され、五輪塔も確認された。出土遺物総数351点で、いずれも水流による摩滅を受けた土器片であった。

W－9　本トレンチ最北端に位置し、南東から北西に走行する溝である。溝のほとんどが発掘区域外になるため、調査は南側の端を確認したにすぎない。

W－10　L・M－0・1グリッドに位置し、東から西に流れる大規模な溝である。W－8を切って構築されており現代まで用水路として使用されていた。本溝からは須恵器円面硯が検出された。口径が小さく、残存部分に2か所透し孔があり復元すると6孔の透し孔をあけると推定される。砥石1点も検出されている。

W－11　トレンチ中央を流れる溝で、M－1グリッド付近で東から南へ向きを変えて南流する。途中W－12を切る。出土遺物の中には緑釉



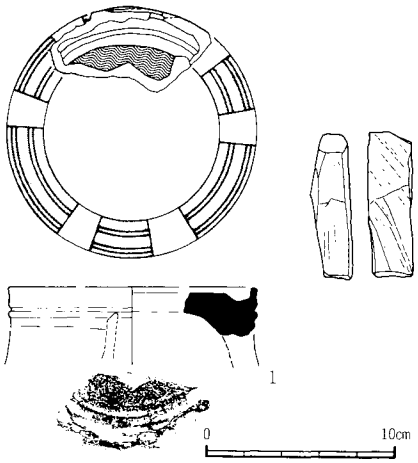


第144図　トレンチ全体図（1/200）

陶器の小片が含まれる。

W—12　トレンチ中央から南へ流れる小規模な溝である。途中W—11、13、14、15の各溝に切られる。出土遺物総数51点で、小片が多く、実測する迄に至らなかったが、古墳時代に位置づけられる。

W—13　北西から南東に流れる中規模な溝である。上端幅88cm、下端幅55cm、深さ14cmを測る。出土遺物268点でいずれも水流による摩滅を受けた土器片である。



第145図　Oトレンチ出土遺物（1/4）

W—14　13と並走する溝で13の南に位置する。上端幅116cm、下端幅84cm、深さ14cmを測る。出土遺物総数906点と多かったが、いずれも小片で接合できなかった。緑釉陶器3点が混入していた。

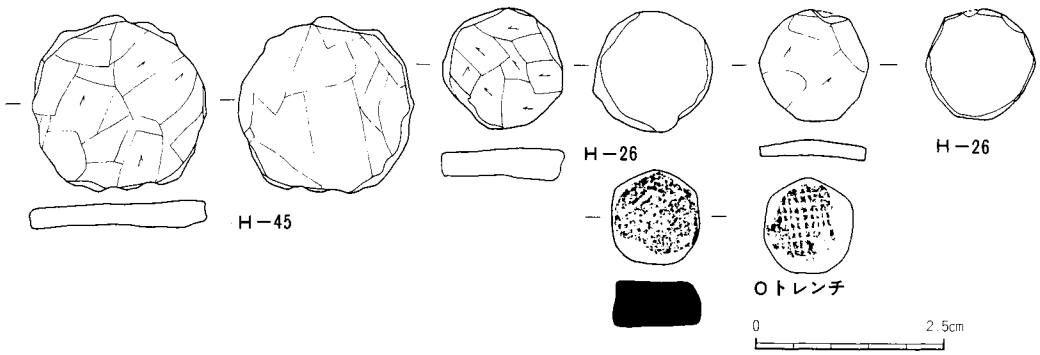
W—15　13、14と並走する小規模な溝で上端幅47cm、下端幅28cm、深さ11cmを測る。

W—2・4　両溝とも東から西へ流れる小規模な溝で、西壁際で合流する。

本トレンチで検出された溝は、W—12を除いて明確な時期決定は下せないが出土遺物や覆土にセカンダリーなB軽石が含まれることからB降下以降の溝である。

7　その他の遺物

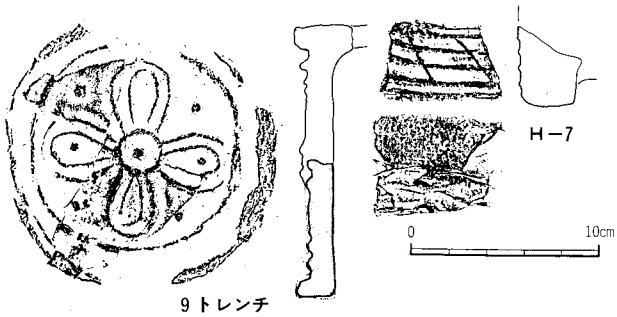
出土円板



第146図　出土土製円板（1/2）

本調査では総計4点の土製円板が出土した。いずれも土器もしくは瓦の一部を再利用したものである。1はH—45から出土したもので、表面ヘラケズリ、裏面ナデ調整からみて土師器長胴甕の再利用品と見られる。2、3は共にH—26の出土品で表面ヘラケズリによるが、2は肉厚で長胴甕、3は坏の一部とみられる。4は、還元焔焼成で表面ナデ、裏面に布目痕が残ることから瓦の再利用と思われる。周縁部は磨滅が著しい。

出　土　瓦

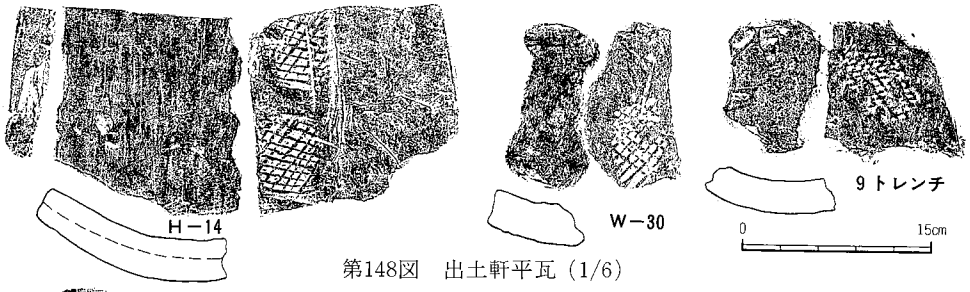


第147図　軒先瓦瓦当面（1/4）

本調査では総数135点の瓦が出土した。大半は小片で平瓦か丸瓦か判別もつかないものであったが可能な限り図化を試みた。

軒丸瓦　瓦当面は2点のみでH―13から出土しており、同一個体である。意匠は上野国分寺に同笵があり、同笵ではないが同一意匠のものは昨年度14トレンチからも出土している。時期的には9世紀代に比定される。

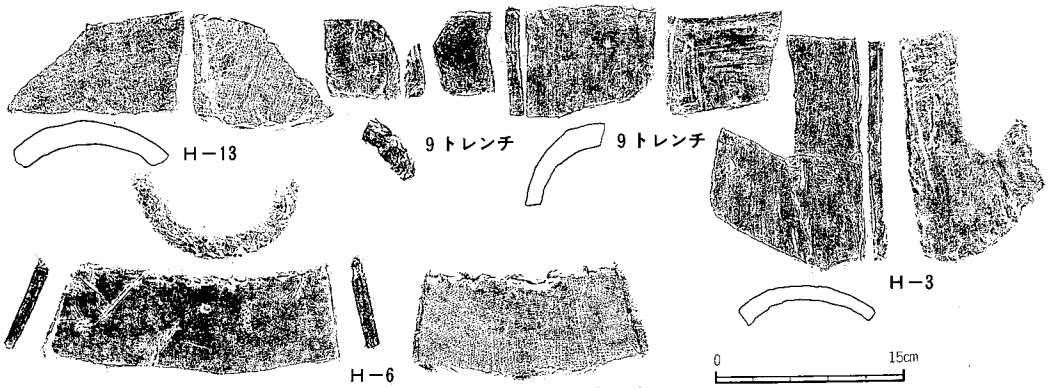
軒平瓦　瓦当面は1点のみであったが他にも肉厚のものが4点出土した。瓦当面はH―7から出土したもので、やはり上野国分寺で類似したものが検出されている。瓦当面を欠くものは平瓦を2枚重ねたもので、斜格子の叩が認められた。



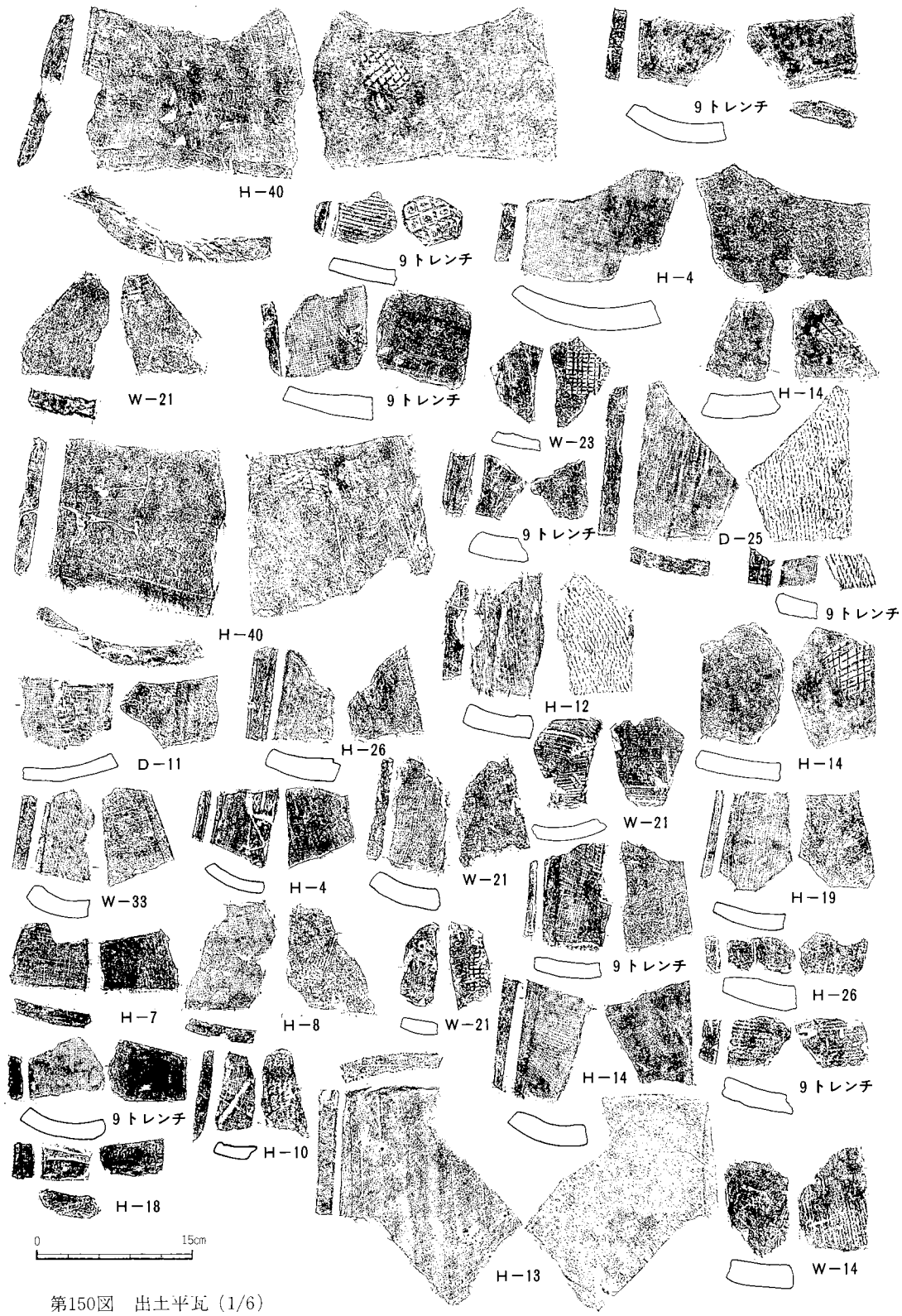
第148図　出土軒平瓦（1/6）

丸瓦　確実に丸瓦と認められたものは5点のみであった。この数は平瓦の量に比して少なすぎる。小破片が多いことが要因と思われる。平瓦として誤って掲載した可能性を示唆しておく。

平瓦　大半は推定一枚造りによるが数点に模骨痕、布の合せ目痕と思われるものも含まれており樋巻き作りの可能性もある。凸面叩には、縄、斜格子、正格子等が見られ、ナデ消す物もある。



第149図　出土丸瓦（1/6）



第150図　出土平瓦（1/6）

Ⅵ　ま　と　め

住　居　址

本遺跡で検出した住居址は54軒であった。しかし、発掘調査がすべてトレンチ発掘であり、ほとんどの遺構はその一部分を確認したに過ぎなかった。住居址の時代的内訳は、古墳時代前期４軒、古墳時代後期25軒、奈良平安時代25軒であった。

Ｐトレンチ（以下 Tr で記す）では、古墳時代後期の住居址５軒が検出された。３軒からカマドが検出されたがすべて異なる壁に附し、規則性は見られなかった。また、奈良平安時代の住居址は検出されず、当該期住居址の北限はこのトレンチ以南になると推定される。

９ Tr からは、古墳時代前期２軒、後期11軒、奈良平安時代16軒、Ｃ Tr からは、古墳時代前期１軒、後期８軒、奈良平安時代８軒が検出された。両トレンチ共各時代にわたって、狭い範囲の中に夥しい数の遺構が検出された。古墳時代前期の住居址は、過去の発掘調査からも言えることであるが、比較的浅い位置に構築されているため後世の遺構に破壊されているものが多い。いずれも隅丸方形のプランが推測され、床面はＣＰ混りの黒褐色土で貼り床されている。後期の住居址は、前期に比して深い位置に構築されており、著しい重複があるにもかかわらずＨ―26の様に遺存状況の良い遺構も見られる。また遺物の量も多く、質的にも優れたものが目につく。奈良平安時代の住居址も９ Tr 、Ｃ Tr 共重複が著しく、壁高も僅かな遺構が多かった。平面形は、正方形ないし長方形を呈し、規模も小形である。両トレンチとも、出土した土器の型式差に現れない住居址切り合いが数軒にも及び、同時存在が考えられないことからも極めて短い期間において住居変遷が行われたと推定される。当該期住居址は、調査区域中央部に集中が見られ、Ｃ Tr 以北、西は牛池川の開析谷に至る微高地に存する９ Tr にかけて分布していると考えられる。尚６ Tr から古墳時代後期の住居址１軒、Ｎ Tr からも前期の住居址１軒、奈良平安時代の住居址１軒が検出された。

カマドの位置については、各時代共規則性は認められなかったものの、袖の構築材として、各時代を通して、前橋台地産出の凝灰岩の切石が用いられていた。

９ Tr からは多量の銅滓、鉄滓の出土があり、10点を越えるフイゴの羽口も検出されたが、それに関連する遺構の検出には至らなかった。また、滑石の原石も数多く検出されたが、未製品の出土はなく工房の検出までには至っていない。こうした状況は、鳥羽遺跡に類似している。

Ｃ Tr Ｈ―50、９ Tr Ｈ―３出土の灰釉陶器埦は猿投窯系の製品で、前者がＫ―90で10世紀前半、後者はＯ―53で10世紀後半と考えられる。また、Ｏ Tr の溝からは、近江系の緑釉陶器が出土している。これらの遺物の出土は、都をはじめとして地方の官衛等にも供給されたとされる。本遺跡も、上野国府という立地を考えれば肯定できるところである。

溝　　址

本調査では総数39条に及ぶ溝状遺構が検出された。これらの殆んどが中世以降に機能した水路であるが、中には館址や街並みの区画といった重要な性格を持つと思われる遺構も含まれている。

中世では９Tr、W—21、22が14世紀代の遺物を出土しており注目された。W—21は57年度の調査で総延長40m以上を検出しており、近世、八日市場城との関連性を指適していた。しかし、本調査の所見で出土遺物は下限でも14世紀後半であり、それよりも古い遺構であることが明らかになった。QTrでは八日市場城外堀の南東隅をW—31で確認し、昌楽寺東側に現状もある溝状落ち込みが途中で東方向へ屈曲するのは近世の掘り直しであることが明らかとなった。

律令体制下の遺構としては今回もその関連性を積極的に示すような例は皆無であった。但し相当する遺構が溝であることから、広域にわたって多角的な見方ができることは確かであった。6、Q Tr 検出のW—30はN Tr W—３と同一と思われ、W—36はO Tr 西側の寺田遺跡検出の大溝と同一と思われる。その前後関係は６ Tr 北壁断面からW—36の方が古いことが確認されている。W—３、30の方位がN—６°—Eであるのに対し、W—36はN—１°—Eであり、その差の開きが、N Tr と寺田遺跡での溝の差５～６mに表われているものと推定される。この大溝が国府の外郭ラインとする考え方もあるようであるが、９世紀代と推定される掘立柱建物址は昨年この外側で検出しているし、９ Tr の状況も、むしろ衛生都市的状況を示している。こうした中で６ Tr W—33の性格も注目に値する。出土遺物から８世紀初頭段階に位置付けられる。底面形状はしっかりした逆台形でN—63°—Eの方位をとる。底面付近には砂層のラミナが認められるが浸食等も少ないことから、比較的短期間の存続であったものと考えられる。遺構の少ない律令施行段階の資料として注目される。こうした中で本調査における最大の成果にW—17の確認がある。調査範囲こそ狭いものの、その形状及び機能を考えれば、集落を画するものであることは確実視される。N Tr 南方の道路下水管敷設工事の立会いで延長上が確認されており、総延長32mに及んでいる。溝の底面は薬研状を呈し、水流の痕跡は無く、土器の出かたも特異的である。さらに大型高坏の類例は管見では三ツ寺居館址のみであり、正に本遺構の性格付けを代弁しているかのようである。出土した坏の中には赤彩が認められるものもあり、ＦＡ下の須恵器大甕とともに祭祀的色彩が濃い。出土状況は完存しているものが多く集中して出土した所もある。本遺構と方向性が一致する同時期の遺構として昨年度調査H—60と本年度調査H—44があるが、どちらも坩、高坏を中心として出土量が卓越している。さらに昨年度16 Tr 検出の木製大型部材や杭列遺構も同時期であるので、それらの廃材供給源としての建築址の存在が想定されてくる。今後の延長上及び内区の調査にあたっては充分憂慮する必要があろう。本調査に於いては当初期待していた国府の関連遺構こそ検出できなかったものの、それ以前、既にその占地に見合う勢力が存在していたことを裏付ける遺構が発見されたことは、その社会的背景を考える上で有意義であった。

Pトレンチ全景

H－30号住居址

H－30号住居址カマド

H－31号住居址

H－31号住居址カマド

H－32号住居址

H－33号住居址

H－34号住居址

図版　2

H－3号住居址カマド

H－4号住居址

H－4・6・7号住居址

H－5号住居址

H－8号住居址

H－9号住居址遺物出土状態

H－9号住居址遺物出土状態

H－9号住居址遺物出土状態

H－9号住居址遺物出土状態

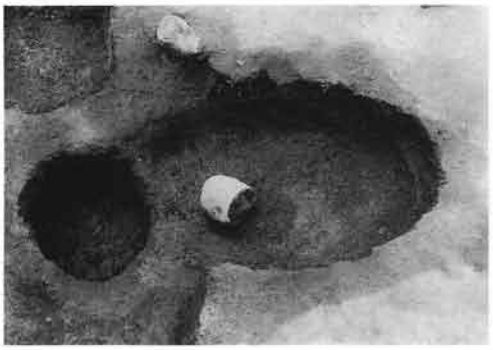
H－9号住居址遺物出土状態

H－9号住居址

H－11号住居址

H－13号住居址カマド

H－14号住居址



H－14号住居址カマド

W－22号溝断面

図版　4

H－19号住居址

H－20号住居址カマド

H－3・4・22号住居址

H－23号住居址

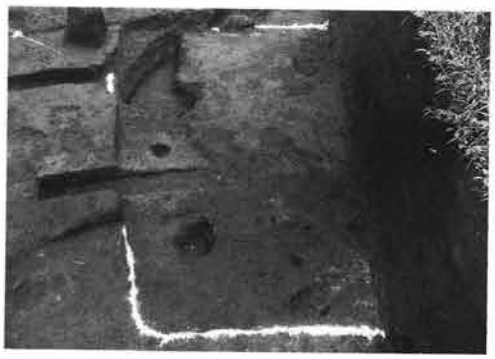
H－23号住居址遺物出土状態

H－24号住居址遺物出土状態

H－25号住居址

H－26号住居址

H－26号住居址



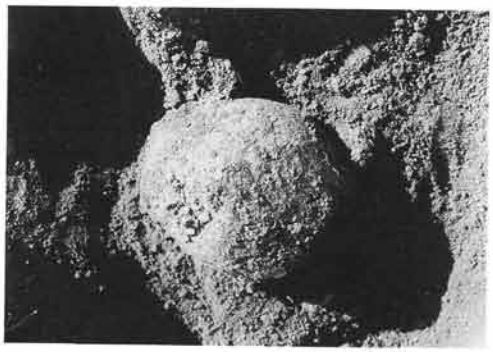
H－35号住居址

H－36号住居址

W－22号溝

6トレンチ北壁断面

H－48号住居址軽石製品出土状態



H－48号住居址頭蓋骨出土状態

H－37号住居址

図版　6

H－37号住居址内鉄鎌出土状態

H－37号住居址鉄製紡錘車出土状態

H－38号住居址

H－40号住居址

H－40号住居址カマド

H－42号住居址

H－43号住居址

H－44号住居址

H－44号住居址遺物出土状態

H－44号住居址遺物出土状態

H－45号住居址

H－46号住居址カマド

H－50号住居址

H－50号住居址カマド

H－52号住居址

H－53号住居址

図版　8

W－25号溝

W－29号溝

H－1号住居址

H－2号住居址

W－3号溝

W－17号溝

W－17号溝断面

W－17号溝断面

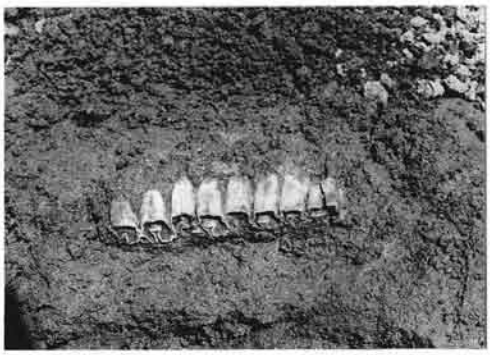
W－17号溝遺物出土状態

W－17号溝遺物出土状態

Oトレンチ北全景

W－2・4号溝

W－13・14・15号溝



W－13号溝内馬歯

W－8号溝内集石

W－11号溝

図版　10

H－15号住居址カマド

H－21号住居址

W－20号溝

W－21号溝

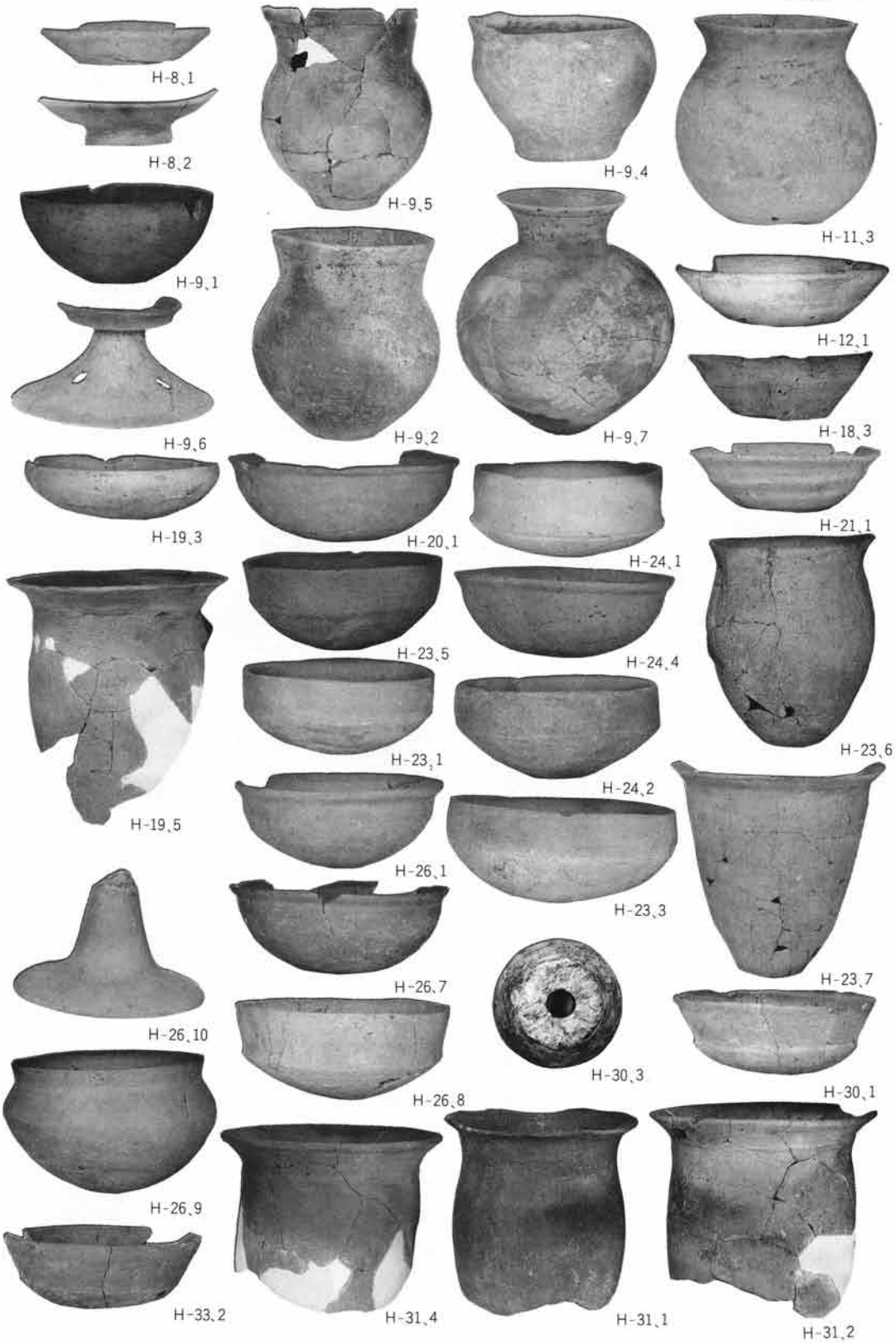
Qトレンチ全景

6トレンチ全景

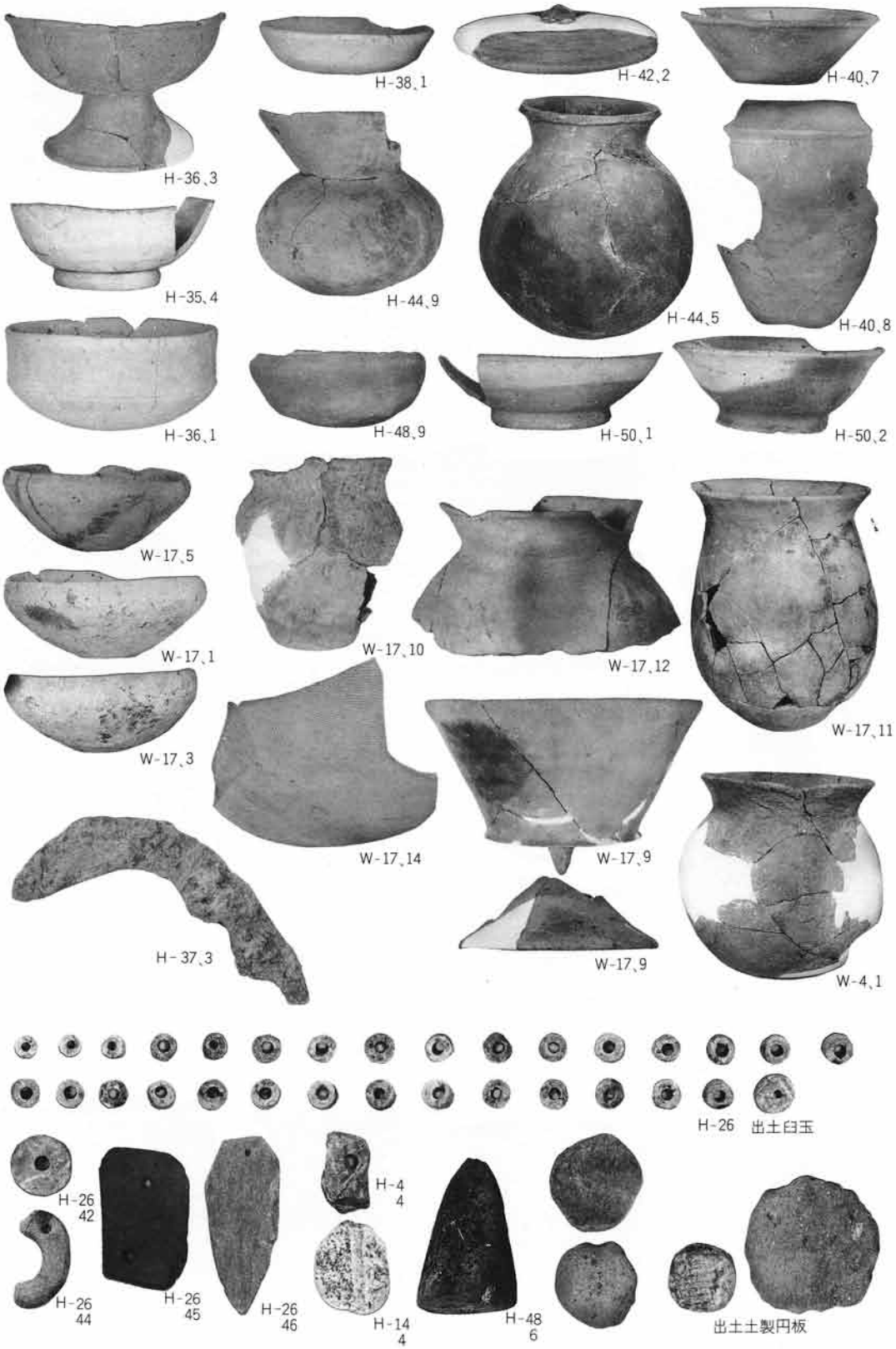
W－3号溝

W－17号溝

Oトレンチ北全景


H-8、1
H-8、2
H-9、1
H-9、6
H-19、3
H-19、5
H-26、10
H-26、9
H-33、2
H-9、5
H-9、2
H-20、1
H-23、5
H-23、1
H-26、1
H-26、7
H-26、8
H-31、4
H-9、4
H-9、7
H-24、1
H-24、4
H-24、2
H-23、3
H-30、3
H-31、1
H-11、3
H-12、1
H-18、3
H-21、1
H-23、6
H-23、7
H-30、1
H-31、2

図版　12


H-36、3
H-38、1
H-42、2
H-40、7
H-35、4
H-44、9
H-44、5
H-40、8
H-36、1
H-48、9
H-50、1
H-50、2
W-17、5
W-17、1
W-17、10
W-17、12
W-17、11
W-17、3
W-17、14
W-17、9
W-17、9
W-4、1
H-37、3
H-26 出土臼玉
H-26
42
H-26
44
H-26
45
H-26
46
H-4
4
H-14
4
H-48
6
出土土製円板

元総社明神遺跡　V

昭和62年３月20日　印刷
昭和62年３月25日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市大手町二丁目12－１

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67